『さうですか』

社長は敬三の頭から爪先まで見上げ見下して横を向いた、校正刷が出來て來た、人々は頭を其れに鳩めた。『賣國奴嫌疑者』『聖代の大恨事』などいふ初號活字がちらと見えた。人々は其れを讀み下した。

『素的ですな社長』と論說記者の一人が言つた。

『天下の名文だ』

『冒頭は實に莊嚴だ』

これは社長自身が筆を取つたものであつた、全面悉く露探事件の記事である。

『其れは待つて貰ふわけには行きませんか』と敬三は言つた。人々は一寸顏を擧げたが相手にせずに又讀んだ。

『……吾人は此の事件一切を司直の手に一任するも、而も我が同業者が恁る忌しき嫌疑を釀したる事を遺憾とせざるを得ず、明治新聞社長高峰素之氏は帝國衆議院議員たり、其の素行に就いては世間紛々の議ありと雖も政界の名士として吾人が多年尊敬し來りたるものなり、一朝禁斷の果に迷ひて皇國を敵に賣らんとす、吾人は晦々を以て、明々を掩ふ能はざるなり……惟ふに國法能く之を斷ぜん、國法斷ぜずとも天下輿衆之を斷ぜん、輿衆斷ぜずとも天神地祇之を斷ぜん……』

社長は人々が朗讀する自分の文章を會心の微笑を以て傾聽して居た。

『もう少し待つてくれませんか、事實が解るまで』と敬三は再び言つた。

『君も少し臭いんぢやないか』

論說記者の武藤白山といふ男が言つた、其の聲未だ終らざるに敬三の拳が其の横顏に飛んだ。

『何をするんだ』

『貴樣は俺を露探だと言つたね』

『言つたがどうした』

『馬鹿ッ』

敬三は硯を取つて武藤の顏に投げ付けた。武藤の顏は墨汁だらけになつた。

『御歸りなさい』と社長は立上つて言つた。『小柴さん貴方は醉うてる樣だ』

『酒は飲んだが醉うてやしません、社長、貴方は商賣敵の明治を潰せば、東洋新聞が儲かると思つてるんですか、儲けたいなら正々堂々とやらうぢやありませんか、敵に寃罪を被せて自ら利するのは君子の取らざる處です』

社長は恐しく苦い顏をしたが、直ぐ微笑した。

『解つた〳〵、貴方は靜かに眠ると可い』

『僕は酔うてやしません』と敬三は又もや繰返した。人々は敬三を宥めた、彼等は敬三が屢〻酔うて失策するのを知つて居る、敬三と親しき人達も又敬三を圍んで食堂の方へ押しやつた。敬三は最早どうする事も出來ない事を知つた、で彼は卓子に突伏して暫らく眼を閉ぢた。

給仕が冷水を持つて來てくれた、植字場や事務の若い連中は心配さうに敬三を慰めに來た、敬三は當直の日には毎も彼等と共に飲んだり食つたりするので、下級の者には德望があつた。

『恐しい事をするものだ』

彼は恁う口の中で言つた、商賣のために人を傷つける新聞もあれば、復讐のために新聞社を潰す警視廳もある、これはどうした事であるか、政治の腐敗！　新聞の腐敗！

こゝまで考へたが又急に考へ直した。

『待てよ、若しこれが寃罪であるものとすれば飽まで其れを辯護してやるのが僕の義務だ、高峰素之と永井鷗眠！　此の事件の鍵を握つて居る二人の女、其れが解れば可いのだ、永井は言ふまいから、僕が自分で探偵して眞相を握る事にしよう、萬々一永井にそんな事があるなら彼奴の首を引つこ抜いてやるだけの事だ、だが女は何者だらう、貴婦人と女中！　先づ何處から其れを探し初めようか』

暗潮

翌日敬三は例に似ず八時に眼が覺めた、彼の體内に元氣が滿ちて何か恁う素晴しい幸運が、自分に向いて來る樣な氣がした。元來彼は眼覺めの一刹那は毎も不愉快なので、罪もない女中を叱り付けたり、母に不機嫌な顏を見せる事が屢〻なので彼は寢床の中で三十分ばかりの間詩吟をしたり鼻唄を歌つたりする事にした、其れが濟むと都下の諸新聞を披いて我が社の新聞と記事の比較をするのであつた。

此の日の諸新聞は何れも露探事件に就いて書き立てた、大新聞は極めて輕く扱つて居るが、小新聞は何れも初號活字で明治新聞及び高峰や永井を攻擊した。

賣國奴！　非日本人！　腐腸漢！

あらゆる罵詈の形容詞が竝べられた。

『馬鹿な奴等だ』

恁う呟きながら其の記事を一つ〳〵に反覆して讀むと、いかにも事實疑ふべからざる樣に記されてある。熱海ホテルでボーリューに書類を渡した時ボーリューは新聞紙に包んだ五萬圓の金を永井に渡し、永井が直ぐ高峰に渡したといふ件は恰ら眼に見る如く讀者を魅する筆致であつた。

『恐しい事だ、それは皆警視廳から出た材料に違ひない、僕が若し永井の性格を知らず又昨日梅園伯に會はなかつたなら、此の記事を見て信ずるかも知れないのだ』

彼は新聞の力がいかに大なるものであるかを今更の如く覺つた。で彼は昨日編輯局で論說記者の武藤白山を撲つた事を憶ひ出して首を縮めた。

『俺はどうして恁う手が早いんだらう』

彼は毎も人と喧嘩をするが毎も後悔するのであつた、今度はどんな事があつても人を撲るのは止さう、恁う思ひつつも其の場に臨めば思はず手が出る。

『併し、俺は正しい、彼奴は俺に向つて君も少し臭いぞと言つた、撲るのは當り前だ』

これですつかり氣持が直つて床を離れた。彼は食事をしながら此の問題に就いての方針を決めた。『これは警視廳の使嗾に依つて我が社が明治新聞を打潰す計畫なのだ、社員としてはそれに從はなきやならん、だが一新聞記者としては正義に與するのが至當だ、我が社の營業本位の作戰に停るとも俺は正しき道に進まなければならん、我が社に對して最も忠實なる道は我が社の迷蒙を啓發するにあるのだ』併し……と彼は又考へ直した、此の點に就いて或は誤解を受けて退社を命ぜられるかも知らん。さうなると。

彼は母の顏を見詰めた、母は何か思案顏をして箸を動かして居る我が子の顏を意味ありげに瞶めて居た。

『御母さん、御父さんは能く人と喧嘩をしましたか』

『さうですよ』と母は微笑して言つた。『頑固だつたからね、どうしても自分の考を枉げないので困りました』

『だから不遇だつたのですね、御母さんが能く辛抱しましたね一生貧乏でも……』

『其りやお前當り前ぢやないか』

母は嬉しさうに笑ひ出した。

『さうですか』

敬三は箸を擱いた時既に心が決まつて居た。彼は元氣可く家を出た。彼の一般方略は第一は鷗眠を訪ねて例の二人の婦人に就いて眞相を訊く事である、第二には警視廳へ行つて樣子を探る事、第三には高峰の寃を明かにして內閣を彈劾する事。

漠然とした考ではあつたが、彼は其れは決して不可能な事ではないと思つた。

彼は自轉車を走らして大森に鷗眠を訪ねた。

『先生は昨日から御歸りになりません』と取次の書生が言ふ。

『困つたな、何時歸るだらうか』

『さあ、五日も六日も御歸りにならない事がありますから』

『ぢや若し歸つたら僕が是非會ひたいと言つてたと言つてくれ給へ』

敬三は汗を乾す暇もなく、再び自轉車に乘り次に紅葉館を訪ねた。

『あれきりでございますよ、昨日あの時に御出ましになつたきりで』と女中が言ふ。

『では、あの儘だね』

『はい』

『失敬！』

敬三は鷗眠はあのまゝ警視廳で拘留されたのではなからうかと考へた。若しそんな事があるのなら例の貴婦人一件を僕から言ひ立てゝ鷗眠を救ふより他に道がない、元來貴婦人の辯に外國人と通ずるなんて、そんな奴は曝露してしまふが可いのだ。

彼は直ぐ警視廳へ行つた。警視廳は早各新聞記者が寄せかけて居た。元來警視廳には幾つもの應接室がある、其の中で一番汚い室は一般の應接室で、一脚の椅子もない、繩暖簾の飯臺の樣な大きな長方形の卓子を裸のまゝに据ゑて、其の上に厚い鐵で作つた彈丸の破片の樣な灰壺が一つ載つてある、卓子は眞黑に汚れて、吸殼の燒穴だらけである。

其れからずつと離れた處に新聞記者の詰所があるのだが、其れは日光の通らぬ物置の樣な陰氣な

室なので記者達は其れよりも此の無椅子の廣い室に集まるのであつた。敬三は政治記者なので警視廳へ來たのは二三度しきやなかつた、同業者とはいふものゝ受持に依つて顏觸が違ふ、中には知つてる者もあるが知らない者が多かつた。

受持に依つて人々の風格にも差異がある、政治記者は今にも大臣になりさうな顏をして居る、外交記者は何となくハイカラで氣取屋が多い、經濟記者は實業家臭く、軟派記者は粹な裝をして居る。

『どれも〳〵刑事見たいな面をしてやがる』と敬三は思つた。實際服裝に於ても不揃であつた、着流しのもあれば袴を穿いて板草履を穿いてるのもある、怪しげな洋服もあれば、陸軍省の門番の樣な詰襟もある、彼等は盛に煙草の煙を立てゝ露探事件に就いて語つて居た、恁ういふ探訪記者の常として他人の話を釣り込んで何か祕密を探らうとするので、どんな話でも決して信用が出來ぬと共に又聞逃しも出來ない。彼等は互に牽制したり誘惑したりして、敵がどういふ種を持つて居るかを推察するのである。

『鷗眠は何處へ行つた』と一人が言つた。

『家に居るよ』と他の一人が言つた、其の辯彼は今朝鷗眠を訪問して留守を食つたのであつた。

『さうかえ、ぢや行つて見よう』

第三の男が言つた。彼は恁う言つて、誰かわざ〳〵大森まで行つたら面白いなと肚で笑つて居る

のであつた。

『高峰はどうしたのだ』と誰かゞ言ふ。

『多分今日あたり拘留されるだらう』

『代議士を勝手に拘留する事は出來ないよ』

『さうだ』

『議會で高峰除名の決議案を出すさうだね』

それは一同の初耳であつたので、人々は其の方へ視線を向けた。さうして次の言葉を待つて居たが當人は其れ以上を言はなかつた。其處へ一人の記者が汗を拭き〳〵入つて來た。

『明治が再興するよ』

『どうして?』

昨日禁止を命じられた明治新聞が直ぐ又發行し得べき筈がないのだ。

『改題だ、明治新聞でなく明治新報としてやるんだ』

『金は?』

『迂闊だな』と其の男は嘲る樣に言つた。『富塚がついてらあね』

人々は富塚惣兵衛と警視總監の事に就いて區々に語つた。

富塚が何故明治新聞に投資して警視廳の攻擊をしたか。其れは何人も考へ及ばなかつた、人々は只富塚の一人娘眞琴孃の肥大な體格に就いて亂雜に語つた。

一同が總監に面會を申込んだが斷られた、そこで彼等はボヤ二三件と、窃盗二三件其の他賭博や淫賣や溺死人四五件の種を書きとめて散り〳〵に去つた。

嵐の吹いた後の樣に室は亂雜で又淋しかつた、撒三は途方に暮れて室を歩き廻つた、鷗眠の行衞はどうしても解らない、其れを知るには總監に面會しなければならない、他の役人に訊いた處で決して實を吐く筈がない、彼は恁う考へて今一度名刺を給仕に頼んだ。

『矢張り駄目ですよ』と物慣れた給仕が言つた。

『晝飯の時に捕へるのが一番可いんです』

なるほどと撒三は微笑した、狡猾な記者が廊下に待ち伏せて襲擊するのは能く用ひる手段だ。正午には三十分ばかりである。撒三は室を出て廊下から庭、庭から次の建物へと移り歩いた。此の大きな古風な建物を直した構造は煉瓦もあれば木材もあり障子もあれば硝子もあり、赤煉瓦の牢獄が嚴しく峙つて居ると思へば四阿風の室に花園を見晴らす處もある、不統一な室々を半ば洋風に半ば和風にしたのは無論最初からの計畫でなく年々に建て增した姑息の手段だといふ事が一目に解る。衞生や大掃除を八釜しく言ふ警視廳の内部が、廊下といふ廊下は土足に汚れ、紙屑や繩屑や、黄色

な御茶の流れが床板に洪水をなして居るとは何人も思はないであらう。

敬三は恁う思ひながら微笑を浮べた、彼は廊下が次第に清潔になる様な氣がした、一枚の板を渡した橋の向ふは洋室である、其處に大きな階段がある、階段の下の褐色の扉、其處に應接所と書いた黒い札が掲げられてある。

『これだ、三つの扉があるといふ總監の應接室はこれだな』

敬三は恁う呟きながら其處を通り過ぎて庭へ降りようとした時、一人の青年に會つた、其れは髪の毛を額に波の如くうねらせた痩せぎすの美男子であつた、敬三は此の男のすつきりとした黒のモーニングに、白綾の短衣を着た姿に見惚れた。

『此の貴公子は總監の息子か知らん』

彼が餘りに見詰めたので貴公子はこそ〳〵と歩き出し向ふの厩の方へ隱れた、と此の時彼は背後に人の聲を聞いた。

『御心配なさらんでも可いです、左様なら』

窓は下の方を上へ曳き上げて居たので總監の跳ね返つた髭がはつきりと見えた。

『では安心して歸ります』

聲は婦人である。姿は壁に遮られて見えないが、聲柄に依つて察するに三十五六であるらしい。

『車を此方へ廻させませうか』

『いゝえ、馬車ですから』

『さうですか』

聲が止んだ。敬三は人の祕密を立聞きした様な氣がしたので慌てゝ反對の方へ去つた、其れから再び元の廊下へ引返した時馬車の響が聞えた。

此の暑さに幌を下したので能くは見えないが一人は彼の貴公子で、今一人は白い覆紗を頭から被つた婦人であつた。

『あゝあれかも知らん』

敬三は初めて鷗眠の言葉を思ひ出した。

『此の事件には貴婦人が關係して居る』

彼は直ぐ外へ飛出さうとした、と此の時彼は礑と總監に逢つた。

『僕は小柴です』と敬三は急に挨拶した。總監は恐しい苦い顔をしたが直ぐにや〳〵と笑ひ出した。

『永井の事に就いて訊きたいんだらう』

『さうです』と敬三は總監の洞察に驚いて言つた。

『私の方から君に訊きたいんだ、永井は何處に居ますか』

『僕が其れを訊きに來たのです』

『紅葉館に居らんかね』

『居ません』

『若し逢つたら當分旅行をせずに居る樣に言つてくれ給へ』

『承知しました』

『君の御父さんは有名な人だ、妙な友達を持つて身を誤らん樣にし給へ』

『はあ』

總監はのそ〳〵と去つてしまつた。

『なァんだ』と敬三は叫んだ。『まるで玩具にされに來た樣なものだ、俺は何て間抜だらう』

彼は憮然と警視廳を出た、半日奔走して何の得る處がない。

新聞社へ行くと社長石阪倉平は武藤白山と愉快さうに語つて居た、石阪社長は精力絶倫を以て有名であると共に其の獰惡な人相を以ても亦有名である。社員は彼を稱して鬼瓦と稱して居る、其の四角な輪廓、大きな平つたい鼻、厚い唇、强度の近眼鏡を掛けた圓い眼、隅から隅まで厚ぼつたく出來て居る、其れは堅忍不拔を表して居る、實際彼が一記者から身を起して今日の地位を占むるまでには他人の窺ひ知る事の出來ない苦勞と戰つて來たのである。社員は又彼を苦味丁幾と綽名して居る、其れは年百年中苦い顏をして居るからで、彼が大きな聲を出して笑つたのを見た者は一人もない。

人生は戰場である。

これは彼石阪倉平のモットーであつた、彼は如何なる人間でも敵だと思つて居る、さうして其れを殪す事が勝利だと信じて居る。彼は東洋新聞の創刊から第一に富豪を攻擊し、第二に華族を攻擊し、第三に金貸業者を攻擊し、第四に藝者なるものを攻擊し、第五に妾を蓄ふるもの、別莊を有するものを攻擊し、第六に軍人を攻擊した。

恁ういふ積極的な攻擊的方針は、學生や勞働者の人氣を博し自ら小新聞と稱しながら、實際に於て大新聞だけの勢力を占有した。

其れに對する唯一の敵は高峰素之の經營する明治新聞であつた、明治新聞には權謀もなく策略もないが、折り〳〵人の意表に出る樣な奇拔な記事を揭載するので相當の人氣があつた。東洋新聞が平民的なのに對して明治新聞は餘りに政治的であり、而も壯士的であつたが、昨年吉原の遊女を自由廢業させ、全社擧つて此の哀れむべき醜業婦を救ふべく拔刀隊を組織して乘込んだ。此のために日本には前代未聞の自由廢業なる新例が開かれた。此の一擧は明治新聞の人氣を沸騰せしめ、更に

警視廳攻撃に依つて東洋新聞を壓倒した、石阪としては默つて居られない、如何なる手段を以てしても敵を葬らねばならぬ危急存亡の場合である。

新聞と新聞の激戰！

併し其れは新聞だけの激戰ではないのである。其處により大なる影法師と影法師との戰がある。

一は春木侯爵、一は梅園伯爵。

現内閣總理大臣葛城伯の背景に春木侯爵がある事は何人も知る處である、時の警視總監を攻撃して内閣の威信を失はしむる事は軈て春木侯を政界から驅逐する作戰である、其れには梅園伯が明治新聞を使嗾したのだと傳へられ、其のために富塚憲兵衛が巨萬の資金を調達したとも言はれてある。

新聞と新聞の戰ひ、元勳と元勳の戰ひ！　さうして今や梅園伯の先鋒を承つた高峰素之は露探の嫌疑者として朝野憤怒の的となつて居る。

勝敗の數は、九分まで現政府と東洋新聞とに勝味がある。

『どうしてもね、惡い事をする奴は一目見ると解るよ』と石阪は反身になつて言つた。『身分不相應の金を使ふ事、次に一定の職業がない事、次に暗夜に人を訪問する事、それだけで此の男は惡い奴だと斷定して可いのだ』

『さうですか、なる程』

白山はいかにも感服した樣な顏をして言つた。

『高峰は元來貧乏だ〳〵と言つてる癖に、贅澤をしてるだらう』

『さうです』

『永井もさうだ、酒ばかり飲んで遊び廻つてるが何も職業がない』

『なるほど、ところで議會は？』

『明日は日曜だ、明後日高峰の處決を促す決議案が出る積だ』

『萬歳ですな』

『日本國民にして日本の不利益になる議論を社説に書き、のみならず外人に機密書類を賣るといふ事は歴史にない事だ、道鏡が皇位を窺覦したが……』

恁う言つた時彼は敬三の姿を見たので口を噤んだ。

『お早う』と白山は昨日の怨みを水に流した樣な寛大振を見せて言つた。

『お早う』と敬三は言つた。

『君は警視廳へ行つたさうですね』と石阪が嚴かに言つた。

『早いですな、どうしてそんな事が知れたんですか、僕が總監に逢つたら、君は永井の事を訊きに來たんだらうと言ひましたよ、それにも驚きましたよ』と敬三は言つた。

『惡い事は出來ないよ』と白山は笑つた。
『僕が惡い事をしたといふのか、胡麻摺野郎！』
『又怒つたね、どうも君は……いや謝るよ』
『謝るなら免してやるよ』
『なぜ警視廳へ行きましたか』と石阪は言つた。
『永井の事が氣になるからです、永井が拘留されたのではなからうかと思ひまして』
『そんな事は止める方が可いですよ』
『止められません、僕は此の事は永井の寃罪だと信じます、只證據がないだけです』
『證據がなければ仕方がないぢやありませんか』
『全く無いわけでもないのです』
『其れは？』
『貴婦人が此の事件に關係して居るのです、其の女を突き留めさへすれば……』
『何といふ貴婦人です』
『解りません』
『はッ〳〵〳〵』と白山は腹を抱へて笑つた。石阪は苦り切つて居る。

『そんな事を言つても駄目だよ、露探の證據が明白であればこそ明後日議會で決議案が出るんだ』
と白山は笑を收めて言つた。
『明後日？』
『あゝ』
『ぢや僕は明後日まで僕の證據を集めて見せるよ、若し僕のやる事が本社の規律に背くといふなら僕は辭職しますが、社長どうですか』
石阪は恐しく澁い顏をしたが軈て、
『君の私行が本社に累を及ぼさない限りに於て本社としては默認します』
『難有い、僕はさうあるべき事だと信じて居ました』
敬三は編輯室を出て食堂へ入つた。
『おい給仕、何か飯をくれ』
『何にしませう』
『腹のたしになるものが可い、蟲の入つた飯があるだらう』
『天麩羅ですか』
『あゝ、さうだ』

『蟲の入つたとは驚きましたね』と其處で鮓を食つて居る男が敬三に言つた。

『やあ小島君、君はうまさうなものを食つてるね』

『どうも、天麩羅を蟲だなんて、はッはゝゝ』と小島は際限なく笑ひ出した。

『一寸忘れたんだよ、何だか草鞋の樣な蟲が居るぢやないか』

『あれはシャコですよ、天麩羅は海老よりもシャヨが乙なんでけす』

『さうかね』

『どうです、おすもじは？』

『僕は此の青い奴は生臭くて嫌ひだよ』

『コハダでけす、鮓はコハダに限りやす』

『ぢや赤いのを一つくれ給へ』

敬三は鮪の鮓を一つ頬張つた、此の小島といふ男は演藝や花柳界の記者で號を赤野田人といふ、五年前までは赤野タニンと讀ましたのだが、當人の言ふ處に依れば、世が末になつたので誰もタニンと讀んでくれないので折角の洒落も役に立たないから寧ろ俗衆の讀むまゝに從つて田人としてしまつたのださうで。彼は『江戸つ子が田人になる山の芋鰻になる』といふ俳句を作つた。其れでも未だ氣になると見えて折り〳〵『田舟』といふ雅號を用ひる、田舟の舟は若え衆の衆といふ意味ださうだ。

年はもう四十だが、氣が淡泊して貧乏の癖に鳴金の着いた上等の雪駄を穿き、一本獨鈷の帶を締めて扇子をばち〳〵鳴らして居る。然りとて昔の大愚大人の樣なオホンでもなし、詰りさうする事が好きな性分といふより他はない、無論方面が異ふので敬三は恁ういふ人達を文學者として尊敬し、田人も亦敬三を未來の大臣とまではなくとも、秘書官位に尊敬して居たのである、當時は内閣が代る毎に新聞記者が秘書官になる事が流行つた。

理窟ばかり言ひ合つて政友會がどうの、進歩黨がどうのと堅苦しい話をするのとは異り、田人の程が可くて無邪氣なのに敬三は毎も感心して居た。

『忙がしいでせうな、一體露探事件はどうなるんですか』

田人は色が黑いがてか〳〵と磨き立て其の時流行り出した角刈の頭は黑くて光があつた、何處から何處までも通人らしい處が見える。

『さあ、どうも解らんが』

恁う言つた時彼は電光の如く頭に浮んだものがあつた。

『君に一つ御願があるんだがね』

『はあ、僕に？』

『秘密だよ君、君でなければ出來ない事なんだ』
『はあ』
田人は敬三が毎も借金取に苦しめられて居る事を知つて居るので多分高利貸の世話だらうと想像してにこ〳〵した。
『詰りね、探偵小説の主人公……いや主人公ではない、何といふだらうな……』
『脇役でけすか』
『さうだ、脇役だね、君に脇役をやつて貰ひたいんだ』
『面白さうですね、一體どんな事で』
『露探事件に深い關係を有つて居る貴婦人がある、其の名は解らんが、其れを捕へると此の事件が直ぐに解決するんだ』
『貴婦人？』
『あゝ』
『藝者なら手の内ですが貴婦人となると少し飜譯臭くなりますからな』
『駄目かね』
『年は？』

『わからん』
『貴婦人といへば令孃ではありませんね、夫人も貴婦人ですね、未亡人もさうですかね、さうするとまあ二十五歳以上ですな、油が乘つてる處だ』
『そこでだね、今日僕が警視廳でちらと見た婦人がある、其れがさうぢやないかと思つてるんだが』
『どんな風で』
『顔は見ない、後姿だけだ、白い覆紗を被つて居た』
『惜しい事をしましたな』
『だが、今一人、此の婦人と一緒に馬車に乘つてた青年がある、それは素的な美男子だ』
『君の樣に？』
『おい交ぜつ返さずに聞いてくれ給へ』
『いや失禮』
どんな眞面目な談話の際でも、洒落を言はずに居られないのが田人の性分である。
『あんな美男子を見た事はない、確かに華族の坊ちやんだよ』
『年は？』
『二十三か四かね』

『はてな待つて下さい、二十三四で美男子、君と僕よりも美男子なんですね、いや失禮、はてな、時に依ると貴婦人よりも其の方を先に探す方が近道ですぜ』

『さうかね、女に關する事なら君は何でも知つてるだらうと思つてるが、さうはいかんかね』

『さうですな』

田人は暫らく考へ込んだが軈て活々とした眼を輝かして言つた。

『可い事があります、今日ね、歌舞伎座に恤兵寄附の演藝會があります、多分貴婦人が其處に見えるでせう、華族や實業家、上流ばかりの會ですから』

『そいつは難有いな、僕等が行けるかね』

『僕がこれから行かうと思つてるんです、どうです、貴方の名刺があれば大丈夫入れます』

『何時からだ』

『二時からだけれども暑いから皆集るのは三時過ぎでせう、併し人を見るには少い時からの方が可うがすぜ』

『ぢや行かう』

『兎に角蟲を召し上つてからになさい』

『はッはッ〳〵さうか』

給仕の持つて來た天麩羅を食ひ終つて二人は社を出た。

歌舞伎座の前は蠟塗定紋附の人力車が幾百臺となく人家に添うて竝んで居た、絶間なく來る馬車は盛裝の婦人達を下しては勢よく精養軒の方へ去つた。采女町の橋は此等の馬車や人力車に支へられて往來の人は軒下を潜つて歩いた。もう此處まで來たら橋の上で馬車を降りさうなものだが、貴婦人達は草履を土に染めるのが厭だと見えて、劇場前の綠門まで乘入れるのであつた、其のために馬は頭を高く擧げて蹴合つたり、馬丁と車夫とが口論したりした。

綠門には陸海軍の國旗が交叉されて、柱は悉くイルミネーションで飾られてあつた。右の柱には恤兵義捐演藝會と書き、左の柱には帝國婦人會主催と書かれてあつた。劇場の入口には紫の幔幕が張られ、廊下には無數の岐阜提灯が點されてある。

三時頃からだらうと田人が言つたのだが、一時過ぎには早八分通りの觀衆が集つた。

『やあ大變な人ですね』

田人は恁う云つて自分の雪駄と敬三の靴とを下足番に預けた。下足番は彼を知つて居た。

『大入です〳〵』と下足番は言ひながら靴と草履に繩を通した。

『おい〳〵賴みますぜ、泥が付かない樣にな、靴は僕のでないからどうでも可いけれども』

下足番は笑つた。

『貴方、お切符は、貴方』

紋付に袴を穿いた一人の婦人が二人の横合から現れて遮る様に言つた。

『はい〳〵新聞屋でございますが、どうぞ御通し下すつて』と田人は落語家の様な口調で言つた。

『新聞記者でいらつしやいますか』

『はい左様にござり奉るんで』

婦人は笑ひもしなかつた、其處へタツツケ袴を穿いた薄痘痕の男が來た。

『やあ助け舟、安さん、頼むぜ、御前汁粉だ』

『はあ、正面ですぜ今日は』と安さんが言つた。

『正面か、下か上か』

『下ですよ』

『連中が見えてるか』

『まだ誰方も』

『難有う』

慣れたもので田人はさつさと正面の下に入つた。其處には未だ新聞記者が一人も見えなかつた。

『今日の御客は二階の方が御好きですよ』と安さんが笑つて言つた。

『すつかり嬲されてしまつたよ、紋付袴で以て、こら町人ッ切符を持つちよるかと來るもんだからな』

『はッ〳〵〳〵』と安さんは笑つて去つた。

『あれは何だ』と敬三が訊いた。

『出方です』

『どうして出方といふんだらう』

『土間を歩くから土方に改正しますかな』

恁う言ひながら田人は左の桟敷を見渡して敬三の肘を突いた。

『やあ來てる〳〵、白襟に紋附、あれは皆藝者ですぜ』

『さうかえ』

『素人の様でせう』

『さうぢやない、何處か灰汁抜けがしてるよ』

『解りますか』

『解るとも』

『股潜りだね』

『何の事だ』

『感心したといふんで、ところで、やあ御覽なさい、春木侯爵が見えてる』

『何處に？』

『右の二階！』

いかにも春木侯爵は其の清癯鶴の如き風采で而も白絣に黑紹の羽織を着て端然と坐つて居る、其の傍には老夫人、其の隣には赫と燃ゆる樣に咲き誇つた花の如き令孃達が三人並んで居る。

『あの令孃達と、此方の藝者達を比べると、どうですか矢張り上流は其れだけの位がありますね、ところで例の貴婦人は……』

田人は左の二階を見上げたが又もやしたゝかに敬三の肘を突いた。

『來てますぜ』

『誰が』

『梅園伯が』

『なるほどね』

敬三は呆氣に取られた、右に春木侯、左に梅園伯、今日本の政治に血煙立てゝ相爭ふ双方の首領が偶然此に落合つたのである。見物人は開幕を待つ間に双方を見上げては囁き合つた。

と田人は又々敬三の肘を突いた。

『來ましたよ』

『何が？』

『木町の闘取』

『何だ』

『富塚のデブさん、どうです、偉大なるものぢやありませんか』

『どれ何處に？』

敬三が恁う言ふ間もなく又もや肘をうんと突いて田人は言つた。

『やあ〳〵、模範的上流婦人』

『誰か』

『上原雅子』

『あれが上原雅子か、白い覆紗を有つて居るね』

『流行ですからな』

『さうかね』

敬三は暫らく考へ込んだ、と此の時彼は例の美男子が假花道に立つて人を探す樣にうろ〳〵して

るのを見た。

『あれだよ、おい』

歡三は田人の肱を突いた。

情火

『なるほど美男子ですな』

田人は扇をぱち〳〵鳴らしては其の方を見詰めた。右の二階には春木侯爵の一族、左の二階には梅園伯の一族、其の下にずらりと竝んだ雛の裝ひは花柳界の尤物連、此の花やかな光景の假花道に立つて人を探すが如く方々を見やつて居る青年は年の頃二十二三、髪は漆の如く黑く色は飽くまで白く、眼は鈴を張つてぼつちやりとした瓜實顏の華族タイプ、モーニングに白綾の短衣はいかにも上品である。彼は體裁惡さうに棧敷の上下を見やつたが、波を織る羅綺粉黛の艶かさに照り返されて心の中は一方ならず狼狽した。實際棧敷の上下は無論の事、花柳界の席から、土間の貴婦人席から、前から後から八方の視線は此の貴公子一人の上に集つた。

『奇麗な方ね』

『役者の樣ですわ』

『役者にだつてありやしませんわ』

貴婦人達は恁う囁き合つた、藝者連は無遠慮である。

『ちよいと御覽よ、何て好い男だらう』

『あの人に似てるわ』

『お前さんのあの人かえ』

青年は幾千となき凉しき眼に射窘められ、進む事も退く事も出來なかつた。此の時滿場急に騷立つた、其れは何といふ事なしに一種の笑聲の交つた陽氣な呻きであつた、青年は正面から一人の婦人が來るのを見た、假花道は狹い、足を讓るには斜に向き直らねばならない。で彼は身構をする間もなく婦人の肥大な身體が近付いた。其れは富塚令孃眞琴であつた。

眞琴は眞直に自分の席へ行かうとしたが、途中に一人の青年があるのを見た、彼女は青年を見るや否やさつと顏を染めた、其の美しい二つの瞳が自分の肥大な顏や肩幅を見下してる樣に思はれた。

『あゝ奇麗な方！』

恁う思ふと彼女の全身は羞しさに顫へた、胸は恰ら早鐘を突く樣！　彼女は動けなくなつて立窘んだ。兩側の見物人は此の狀を見て思はずわつと笑つた。一人は繪に見る樣な美男子、一人は角力

取の樣な娘、此の對照は餘りに皮肉であつた。

『どうぞ』と青年は漸との事で言つた。眞琴は消え入りたさうに足を運んだ、狹い假花道で男の側を通り拔けるには餘りに肥り過ぎて居た。眞琴は身體の中心を失つて足元の枠の中へ落ちかけた、途端に青年は其れを抱き止めるや否や身を交して摺り拔けた。

再びわつといふ聲が起つた、氣の毒さうに笑を怺へて居た人達も、これには思はず聲を擧げた。

『あれが其の何でけすよ、小說の第一回であれが緣で娘が戀の病をします』

と田人は敬三に言つた。

『さうかね』

『すると男は他に女がある、何方にしませうか、差向き向ふの艷子にしますかな、そら、下の方から一イ二ウ三イ……五番目の雛妓です、素的でせう、あれは京屋の秘藏つ子です、あれとあの男と好い仲だもんだから、本町のデブ公なんざ眼中にありませんな』

『本當かえ君』

『いやさ、小說ですよ、そこでデブ公は狂ひ死をする、其れから幽靈になつて二人の枕元に立つ……併し肥つた幽靈は凄みがないから、瘠せ藥を飲ませますかね、さうすると』

『おい、君がそんな事を言つてる中にあの青年が居なくなつたよ』と敬三は不平さうに言つた。

『しまつた、待つて下さい、僕が探して來ます、何の某といふ事も訊いて來ませう』

恁う言つて田人は群集の中へ紛れ込んでしまつた、敬三は獨り取殘されて場内の光景を眺めた。彼は例の白い面帕の婦人を物色するよりも東西の棧敷に陣取つた春木侯と梅園伯の對照に興味を感じた。

侯と伯がどういふわけで仲が惡いのか、其れは政界に於ては隱れもなき事であるだけに事實の眞相が不可解とされて居る、だが世間一般の評は至極簡單である。春木侯は軍人出身であり、梅園伯は文人出身である、侯の目から見ると自分こそは砲煙彈雨の間に一命を賭して維新の大業以來今日まで國家に貢獻したのだ、梅園の如きは簿書堆裡に齷齪して僥倖にも風雲に乘じた刀筆の吏に過ぎぬと思つて居る。が梅園伯の眼から見ると春木侯は一武弁である。國家の政治は武弁の與り知るべき事でない、第一に日本の憲法制定に心身を傾注したのは俺だ、春木の如きは政治の政の字も解しないのだと思つて居る、同じく長州人でありながら文と武の立場が異ふ。侯爵は武士の家に生れたが、伯爵は田舍から出た足輕に過ぎぬ、身分に就いての矜持は何時までも失せきらぬ處へ以て來て、伯爵は何を考へたか、今までの藩閥主義を捨てゝ政黨を組織した。これが侯爵憤怒の重大な原因である。

春木侯爵が何故政黨が嫌ひであるか、彼は政黨といふよりも民衆が嫌ひなのであつた、實際彼の

經驗から言つても、國家を誤るものは凡て民衆であり、所謂代議士と稱する者に碌なものがない、彼は何かに付けて恁ういふのであつた。

『多數は腐敗す』

彼は絶對に政黨を非認した。而も昨日まで梅園伯も同意見で、大隈板垣が政黨を組織したのは大西鄕や江藤などと軌を同じうするものだと公言した事さへあるのだ、其れが俄然として政黨を組織して自ら首領となつたのは表裏反覆であるのみならず、民衆に媚びて自分の勢力を扶植し以て彼春木侯を壓へ付けようとする陰謀であると見做さゞるを得ない。

いかにして此の裏切者の陰謀を打破らうか？　春木侯は苦心慘憺の結果、梅園伯を樞密院に葬つた。これには伯も開いた口が塞がらなかつた。彼は政黨の首領を辭せざるを得なくなつた。

明治新聞が連日に亙つて記載した警視廳の攻擊、瀋閥政府の攻擊は、其の材料は凡て伯爵の手から供給されたのだと侯爵は信じて居る。

其の復讐として警視廳は露探問題を以て明治新聞を壓へ付け、社長高峰を壓へ付け、梅園伯の寵兒永井鷗眠を訐き立てゝ梅園一派を何處までも追窮しようとして居る。

虛々實々の戰は今や絶頂に達した、此の高潮の矢先に二人は相對して演藝を見物して居る。どんな事を考へて居るだらう、どんな計略を廻らしつゝあるだらう。敬三の好奇心は頻りに動いた。

彼は左を見て、は又右を見るので殆ど眼を休める事が出來なかつた、いろ〳〵な紳士や貴婦人は入替り立替り春木侯の席へ挨拶に行つた、侯爵は非常に煩はしさを感じたが、其れでも極めて几帳面に一々應答した、此の挨拶の人々は其の足で又梅園伯の席へ出掛けるのであつた。伯の席は賑かで笑聲が絶えず漲る、其處には新橋や赤坂あたりの女將らしいもの、姿も見えた、彼女等は春木侯の席へは近付かなかつた。

此の人々の中に敬三は淺見子爵を見付けた、人の好い子爵は令孃の結婚を濟ましてから急に血色が好くなり、むく〳〵肥り出した。彼は何處へ行つても喜びを感じた、第一に負債の整理が滯りなく濟んで華族らしい生活に浸る事が出來たのである。彼は先づ春木侯の席へ行つた、すると侯爵は非常に謹嚴な態度で彼に御辭儀をして言つた。

『御令息が出征なすつたさうで難有う』

此の一言で子爵はすつかり嬉しくなつた、我が子のために肩身廣さを感ずるといふ事は彼に取つて無上の幸福なのであつた、彼は次に梅園伯の席へ行つた。

『やあ、戰地から便りがありましたか』

梅園伯は時宜の挨拶もせぬ中に恁う聲を掛けた、子爵が少しくまご〳〵して居ると梅園伯は又疊みかけた。

『私は男の子を有たんので、貴方方の顔を見ると何だか濟まん樣な氣がする』

子爵は涙がこぼれさうになつたので慌てゝ手巾で洟をかんだ。人々は戰爭の話に移つた。

『まだ陷落しないのでせうか』

『まだ〳〵、さう早く陷落すると張合が無からうぜ』と伯爵が意味ありげに笑つた。

敬三は子爵に會つて一郎の消息が聞きたいと思つた、で彼は子爵の姿を見張つて居た、と彼は戸の隙間から廊下を歩く節子の姿を見た。彼は跳り上つて走り出した。

廊下は香水の香や衣摺の音で媚いて居た、美しい人達は右往左往に去來した、彼は繪葉書を賣る店の前に黒山の如く立つ紳士淑女の群を少しく離れて、手巾を持つて、喉元の汗を煽ぎながら、ほつとした樣に立つて居る節子を見た時、何といふ事なしに胸が一ぱいになつた。

『あら！』

『しばらくでしたね』

『まあ』

節子は鈴の樣な眼を睜つて凝と敬三を見詰めたが、見る〳〵兩頰にさつと血の色が漾うた。結婚式の招待狀を貰つたが敬三は行かなかつた、其れから一度も節子に逢つた事がない。話し出せば話したい事が山々ある筈だが、扨態うなると何を話して可いか解らない。

『御兄さまから消息がありますか』と彼は紋切形で言つた。

『いゝえ、些こも』

『消息のないのは無事である證據ですよ』

『私もさう思ひますわ』

『御目出度があつたさうで、あの時僕は失禮しました』

『いらつしやらずに居てくれゝば可いと思ひましたのよ』

『さうですか、はッ〳〵〳〵』

敬三は笑つたものゝ何だか笑ふべからざる處で笑つた樣な氣がしたので直ぐ口を閉ぢた、其れが奇妙に二人を悲しく思はせた。

若い美しさと上品さは今までとは少しも變らないが、最早人妻となつた印には廂髪の鬢が締まつて、ほんの心持だけ頰に瘠せが見え、絣の羅に、えとゝき模樣の紹の帶は淋しい。

『併しですね、兎に角家庭に御入りになつた以上は、僕は貴方が幸福で御暮しになる事を祈りますよ、節子さん』

『難有う、私幸福ですわ』

節子の顔から赤みが消え失せた。

『其れは何より結構です、どんな人でも思ふ通りにはならないんですからね、自分の運命に從順でなければね……』

節子は其れを聞いて居たのか、聞かなかつたのか解らぬ樣に遮つて言つた。

『あの方に御會ひでしたらね、さう言つて頂戴ね、私は幸福に暮して居ますからつてね……貴方も幸福の道を求めて下さいつてね……私は決して泣いて居やしませんてね、貴方が幸福になつて下されば其れで私が救はれるんですからつてね、私手紙をあげようと思つたけれども……そんな事は道に背いた事ですから貴方に……』

繪葉書屋の群から一人の男が飛び出して來た。

『これで可い？　今日の寫眞が皆ですよ』

恁う言つて直ぐ敬三を見て言つた。

『小柴さんでしたね』

『あゝ』

其れは節子の良人の栗津篤彌であつた、薄羅紗のモーニングに白短衣、派手な水色の襟帶を胸に見せて長い首に高い紙襟を着け、髮は奇麗に眞中から分けて居る。其れは丁度ホテルのボーイといつた風。

『難有うございます』と節子は繪葉書を受取つて丁寧に言つた。

『戰地のがございませんの？』

『さうだ、忘れた、戰地のでしたね』

篤彌は踵でくるりと身體を廻轉させ、

『直ぐ買つて來ますよ、御待ちなさいね』

甘い流るゝ樣な聲で恁う言ふや否や再び群集を押分けた。其のいかにも氣輕で、品位の乏しいアメリカン型に敬三は少からず驚いた。

節子は默つて下を向いて居た。彼女は敬三が良人に對してどういふ批評を有つて居るかを察して居た。

『御辛抱なさい』と敬三は言つた、其の聲は妙に調子が外れて大きく響いた。

『もう可いのよ』と節子は顏を擧げてはつきりと言つた。

『今に御兄さまが御歸りになりましたらね……私其れを待つて居ますわ』

『僕も其れを待つて居ます』

『ありました、これでせう、節さん、これでせう』

群集を兩手で拂ひ退け〳〵篤彌は繪葉書を振りながら再び現れた、彼は節子の傍へ來るや否や自

分の頭の毛に一寸手を當てゝ、それから襟帶の歪みを直した。

御囃子の音が響き渡つた。敬三は節子に別れて元の席へ復ると田人が其處でシュークリームを食べて居た。

『やあ、可いものがあるね』

『樂屋で貰つて來ました、併し菓子は駄菓子に限りますよ、浪路の奴今日は御冠が曲がつてるんで……でなけりやウキスキーの一壜位持つて來ようと思つたが、どうもね』

『浪路といふのは女優だらう』

『さうですよ、女優、女優なんて日本に初めてなんですとさ、いや初めてぢやない、三崎座に粂八一座があるぢやないかと言つたら、あれは女役者です、と恁う言ふんだから堪らない、女優も女役者も同じぢやけえへんか』

『其れやさうだとも』

『ところでね、西洋の物眞似をするのが女優で、日本の藝をやるのは女役者だと、ちやんと區別をしてるんで……いやはや、世の中が新しくなりましたよ、そこで一つシュークリームの顚末を御話しませうか』

田人は獨りけら〳〵笑つて饒舌つたかと思ふと突然立つて着物の裾をくるりと捲つた、さうして痞せた兩膝を露に竝べて坐り直した。

『着物の裾が皺だらけになるんで敵はねえ……樂屋へ行つて見ると、浪路孃！　孃でけすかな、隨分男を食べて今では亭主がありながら孃でけすかな、どうも氣になる、まあ何方でも可いとして、浪路孃はぷん〳〵怒つてる、菓子箱が毀れて中からシュークリームが食み出し、シュークリームからクリームが食み出し、クリームから……あゝ自烈たい』

『何の話だか些も解らんよ』

『僕も少し解らなくなりました、何でしたつけ、さうだ、クリームですね、クーリムが其の……あ又何か洒落たくなる……どうしたわけかと訊いて見ると恁うなんです、上原雅子なんてあれは高等淫賣でせうと恁ういふんです』

『なるほど』

『あの女は歌人だとか、教育家だとか言ふけれども、あれの商賣は私がちやんと知つて居る、と恁ういふもんだから僕は蛇の路はへビでけすかと言つたら、かん〳〵になつて怒りましたよ』

『怒るのは當り前だよ』

『どうもね、兎角僕は口で失敗しますよ、口は禍の門なりでね、舌は禍の障子で、喉は禍の廊下なら、鼻穴は禍の煙突で……』

『其れからどうした』

『あゝ折角の警句も君に遇つては馬に小判……やあ失敬々々、上原雅子が樂屋見舞として浪路にシュークリームを贈つたのです』

『ものを貰つて怒る奴があるもんか』

『ところが、さうぢやない、雅子と梅園伯との關係は世間の人が知つてる、浪路と梅園伯との關係も知つてるものは知つてるが、知らないものは知らない』

『浪路と伯？　伯も達者なもんだね』

『いやもう縱横無盡です、箒といふ綽名がある位ですもの、無論箒だからハク……あゝ可い洒落だ、君に聞かせるのは惜しい』

『箒だから伯爵といふ洒落だらう』

『あゝ〳〵情ない、洒落を註釋されるのは菊正宗を洋盃で飲むより情ない、江戸の名所を褌の端に書き留める玉だ』

『其れからどうした』

『双方とも伯爵の何かに當るんです、ところが雅子は多年の宿望たる女學校創立の資金を伯に頼み込んで居るのです』

『怪しからん女だね、肉を賣り操を汚し其の金で良家の子女を教育する神聖な女學校を建てるなんて、泥棒して親孝行する樣なものだね』

『憤慨は御止しなさい、鼠小僧だつて御寺に御賽錢を上げるし、石川五右衛門だつて高野山詣りをするし、まあ野暮は言はない事にしませう。そこで一方の浪路孃です、彼女は……少しバタ臭くやりませう……彼女も亦、伯の膝頭をぐり〳〵とやつて劇場建築費を調達させようと考へつゝある事ほど左樣に横着である』

『亭主があつても伯爵とかえ？』

『藝人に節操なしとアリストートル言はずや』

『そんな格言は聞いた事がないね』

『僕も聞いた事がない……双方伯爵を利用しようとして腹なんです、雅子の方が役者が一枚上だけに樂屋へ遣ひ物をした、其れを見て浪路は私は只の藝人に見下げられたつて口惜し紛れに菓子箱を投り出したもんだから、箱が毀れてシュークリームが食み出し、シュークリームが毀れてクリームが……あゝ草臥れた』

『はッ〳〵〳〵、聞いてる僕も草臥れたよ、處で君、肝心の一件は？』

『其れです、そこにぬかりはありませんよ、あの美男子はね、瓜生實といふ學生の樣な學生でない

樣な、詰り美男子であるために身が持てない玉なんですな、誰かの御落胤だらうといふんで、其れも當にはなりませんがね、先刻ね、樂屋へちよいと顔を出したんで、其れでやつと浪路樣の機嫌が直つたんで』

『あれも浪路とかえ』

『いや混線々々、まあ御覽なさい、あれ彼處に今立つてる貴婦人、あれは外交官夫人ですが、役者買が好きです、あすこで笑つてる夫人は書生を片つ端から嘗める、其れから』

『もう可いよ』

敬三は堪らなく不快になつた。彼は上流社會の腐敗の程度が恁くまで烈しいとは思ひも寄らなかつた。

此の時賑かな囃子に伴れて幕がする〳〵と開いた、觀客は暫らくざわ〳〵と動いて軈て水を打つた樣に靜かになつた。舞臺では鶴亀の踊が初まつた。踊手は有名な歌舞伎役者であるだけに貴婦人達の胸は鼓動した。敬三は何の興味も感ぜずに只不思議な憤怒に苛立つて居た。

『あゝ上流社會よ、貴婦人達よ、恤兵部の寄附に集まる人よ、汚れた手を以て潔き兵士を慰めんとする人達よ』

恁ういふ叫びは刻々に彼の胸から迸り出る。何のための音樂だ、何のための舞踊だ。

舞踊が終つた、拍手の音が急霰の如く起つた。觀客は再びざわめいた。此の時田人は慌てゝ敬三の肱を突いた。

『やあ來てる』

『何が』

『浪路がやつて來た、そら梅園伯の隣に坐つた、そら白い面帕を肩にかけたまゝ』

『白い面帕？』

『あゝ、雅子も坐つて居る、白い面帕だ』

いかにも伯爵の右に坐りかけた浪路も左に坐つて居る雅子も同じ樣に白い面帕を肩にかけて居る。

『はてな』

『何方だ君』

『さあ』

『浪路の方が三つ四つ若いが、恁う見た處では同じ樣だね』

『さう』

『馬車の上で見たのは？』

『どれだらうか、男は瓜生に違ひないが』

『髪や着物に見覺えがないか』

『どうもね』

『困つたなあ』

考へて見ると吾ながら粗漏千萬である、此の上は當人の瓜生實といふ青年に直接訊き糺すより他に策がない。

『何處へ行つたらうあの青年は？』

『向ふに居るよ、そらたつた一人で、確かに誰かを待つて居るのだ』

『見失はない樣にしてくれ給へ』

瓜生實は只一人、上手の五番目の高土間に茫然と坐つて居た、彼は人々の視線が自分に集まつて居る事を自覺した、で彼は非常に眞面目な表情を以て一心に向ふを見詰めて居た、其處からは土間の富塚親子や下手の高土間の藝者連や、其の二階の梅園伯及び雅子や浪路が見えた。彼は雅子や浪路が伯爵と特種の關係がある事を知つて居る、だが彼には嫉妬らしい氣持は何にも起らなかつた、二人の女が餘所でどんな事をしようが其れは彼女等の商賣で、自分の愛には何の差引もないと信じて居る、或る點に於て彼は毎も自分を女より以下の位置に置いて考へるのであつた、彼は女に愛されるために生れて來たので、愛する力は自分にないとさへ思ふのであつた。十七の歳から此等

貴婦人達に弄まれて來た彼は恰ら變性の如く柔弱になつてしまつた。

彼は昨夜雅子と共に一夜を明かした、大抵其の翌日は放免になるのだが。時に依ると今夜は浪路に捕まるかも知れない、浪路は行屆いて氣輕であるが、酒を飲むので終夜管を巻かれる事があるので閉口だ、雅子は酒を飲まないが其の代りに何處までも秘密を重んじて突然來客がある時には戸棚の中に半日蟄伏しなければならない事もあるのが何より辛かつた。

こんな事を考へつゝある彼を一生懸命に見詰めて居た人々の中に京屋の雛妓艶子といふのがあつた。

『何てえ奇麗な方だらう』

御艶は十七、初々しい顏をして居るが早既にものゝ哀れを知つて居た、彼女は生れて初めて繪に畫いた美男子を實物で見た。何といふ方だらう、一言で可いからものを言つて見たい、御座敷をかけてくれないかしら、若し御座敷がかゝつたら私どんなに恥かしいだらう、二人きりでは儀裁が惡いから姐さんと一緒に行く事にしよう。

いろ〳〵な妄想が小さな胸に續々と湧いて來る。

實は艶子が自分を見て居る事を知つて居た、其れと同時に土間の中から大きな眼が自分を覗いてゐるのに氣が付いた、其れは富塚の令孃眞琴である。眞琴は假花道で恥かしい思をしてから、もう實

の姿がこびり付いた様に頭から離れなかつた。彼は正面に實を見る事が出來ないので、母の肩を横にちよい〳〵窺み見るのであつた。母のむつちりとした小山の樣な背中、太い丸太の樣な頸、面積の廣大な頰などが彼女の視線を程よく遮つてくれた、が彼女は母の肥大な肉付を見るに付けて自分の肥大を悲しく思つた。彼女は母の膝と自分の膝とが何れが高きやを比較して見た、さうして母の方が少しばかり高いので幾分か安心した。

『あの方は私を見て笑つてるに違ひない、御母さんが肥つてるから私もこんなに肥るんだ、笑はれても仕樣がない、どうせ私なぞは……』

美しい青年を見るに付けても彼女は益〻自分を悲觀した、さうして心の中はすつかり混亂して、いつそ此の場を飛出さうかなどと考へた。母は彼女の惱みを察した、母は彼女の視線を辿つて早くも實に氣が付いた。

『無理もない』

何處へ伴れて出ても其の度毎に恁ういふ惱みが生ずる、母の心も亦千々に亂れた、彼女は折り折り良人の惣兵衛を見やつた、惣兵衛は一向無關心であつた。彼はそんな事よりも春木侯に注目して居た。

『今に見ろ、内閣を顚覆して見せるから』

再び囃子の音が響き渡つて幕がする〳〵と開いた、約そ二間ばかり幕が開いて寺小屋の場が半ば、見えた時、突然只ならぬ叫びが聞えた。觀客は一度に跳り上つた。

『遼陽陥落！』

『萬歳！』

『天皇陛下萬歳！』

『皇后陛下萬歳！』

『大日本帝國萬歳！』

潮の如き叫びと共に二千人の頭や顔は歡喜と狂熱に興奮したまゝ跳り上り舞ひ上り、男共は舞臺に飛び上り、棧敷といふ棧敷に走り廻り、婦人達も亦其の白い腕を高く〳〵擧げて無暗矢鱈に叫んだ。

『バンザアイ』

土間の客は芋の子を洗ふ如く犇めき立ち押し合ひへし合ひ羅綾の袖は嵐の如く飜つた、其れが靜まりかけたと思ふと再び狂熱の叫びが起つた。

東の棧敷に陣取つて居た梅園伯が、眞直に西の棧敷へ走つて無言のまゝ春木侯の手を握つたのである。春木侯も亦默つて伯爵の手を握つた。さしもに犬と猿の如く仲の惡かつた兩雄の眼は涙に

輝いた。皇國の大歡喜！

『春木侯萬歳』

『梅園伯萬歳』

見物人は涙を流しながら叫んだ。此の時事務員が一抱の號外を見物席に撒き散らした。又々萬歳の聲が起つた。此の騷ぎの最中に一人の事務員が三歳ばかりの男の子を肩車に乘せて舞臺に立つた、子供の胸に『迷子』と大きく書いた紙が垂れてあつた。

見物人は其れを見て又叫んだ。

『萬歳！』

すると一人の婦人が耻かしさうに舞臺へ上つて子供を請取つた。見物人は又叫んだ。

『萬歳！』

何を見ても彼等は萬歳を叫んだ。さうして彼等は演藝會などを默つて見る氣になれなくなつた。彼等は潮の如く劇場から溢れ出た。

『宮城へ、宮城へ』

此の人波に揉まれながら敬三は號外を讀んだ。

遼陽占領（四日午前十時七分大本營着）

九月三日より四日に亙る夜間及四日朝に於ける戰鬪にて遼陽は全く我が有に歸せり。

敬三は手を額にして皇國の武運を祝福した、と彼は裏面を見よといふ注意書に氣が付いた。

二十八日までの戰死及負傷將校下士姓名

彼は此の表題を一瞥するや否や胸に不思議な鼓動を感じた。

『淺見がやられはしなかつたらうか』

戰死者の中に大尉中尉が最も多かつた。彼は中尉の二字を拾ひ〳〵讀み下した。

『負傷　近衞騎兵中尉　淺見一郎』

『あつ』

といふ聲と共に彼の凡ての器官が悉く閉止してしまつた、彼は頭の腦天から水銀の棒を打込まれた樣に眞直に立つた、彼の耳には只がや〳〵といふ響が遠くに聞え、眼には群集が夢の如くに動いてゐるのが見えた。

『どうしました』

田人は横合から出て來て彼の顏を打戍つた。

『どうかしましたか』

『やられたッ』

『仕方がないさ、この騷ぎだからね、何れ又あの美男子を捕へますよ』

『そんな事ぢやない、友人が負傷したのだ』

『はあ』

田人は敬三の權幕に驚いて默つた。敬三は喪神した樣に遙かに萬歲の聲を聞いて居た、此の時彼は節子の姿を見た、節子は大理石の如く靑ざめて居た、彼女も亦喪神した樣に顏を眞直にして歩いて居た。彼女の良人は氣遣はしげに節子の腕を抱へようとした、節子は其れを拂ひのけた、彼女は其の苦みを外に表すまいと努めた。いかなる場合に於ても取亂した態度を慎む事は貴族の品位であると彼女は信じて居る、彼女の眼には涙の痕さへなかつた、涙は凡て胸の奥底へ滴り落ちた。

『節子さん』と敬三は歩み寄つた。

『號外を御覽になつて？』

『はい』

節子は蹌踉と敬三の腕に倒れかけたが、しつかりと踏みこたへて言つた。

『負傷はどんな程度でせうか』

『僕は陸軍省へ行つて訊いて見ます、後ほど電話で』

敬三は走つた。彼は群集の中を海月の樣にふはり〳〵と歩いて居る淺見子爵を見た、先刻の元氣

に引替へて子爵の顔は鼠色になり眼にはものを見る力さへ無くなつて居た。敬三は聲をも掛けずに社へ走つた。直ぐに自轉車に乘り全速力を籠めて有樂町へ出ると、彼の眼の前を全速力で走つて居る馬車がある、車上の人は子爵であつた。あんぐりと口を開いたまゝ眼を深く垂れ、帽子を阿彌陀に被つて白髪がばさ〳〵と額に掛つて居るのも知らぬもの、如く兩手を胸に組んだまゝ動かない。

『急げ、もつと急いで』

彼は馬丁に聲を掛けた。角を曲る時帽子は風に飛んだ。白髪は片靡きに右へ押されて背後の崩れた襟から老いさらばへた長い首筋が露れた。其れでも彼は囈言の樣に言つた。

『急げ、もつと急げ』

輿論

毎夜々々提灯行列は市中を練り廻つた。花電車が町々を美々しく通る、宮城前の廣場は雲霞の如き市民で滿たされる。此の狂はしき歡喜の中に衆議院は忌はしき問題に就いて決議せねばならなかつた。其れは代議士高峰素之の露探嫌疑事件である。

敬三が獨り此の事件の無根である事を信じて居るに拘らず、二日過ぎ三日過ぎ、衆議院十八名の調査委員が三度會議を開いて居る中に輿論は次第に惡化して來た、最も公平な態度を持して最初から東洋新聞の商賣政策だと冷眼に視下して居た旭日新聞すら何時の間にか高峰に對して攻擊の鉾を向ける樣になつた、其れと共に凡ての新聞が高峰を罵つた。

『露探！』

恰も其れは高峰を攻擊する事が愛國心の發露であると思つて居るもの、如く見えた。昔は洛北等持院にある足利家累代の木像の首を斬つて尊王の意を表したものがあつた。いま高峰を罵らざるものは日本人でなくなつた。露探！　賣國奴！　不忠！　不義！　あらゆる罵詈は高峰の一身に瀧の如く落ちた。

凡ての形勢は敬三の豫期と反對に進んだ、調査委員會が終つた、愈〻今日は高峰排斥の決議案を出さうといふ。敬三は堪らなく苦しくなつた。彼は周圍が惡化すればする程其れに對する反抗心が募つた。何とかして永井鷗眠の汚名を雪ぎたい、高峰を救ひたい、恁ういふ慾望は毎日々々彼の心を苛々させた。

『あゝあの女！』

女が證明してくれゝば直に氷解する事であると彼は信じきつて居た。

女を引張り出さう、だが何の女だらう、上原雅子か女優の望月浪路か、二人の中一人に違ひない。だがあの女達は果して此の事件の謎を解くべく蹶起するだけの勇氣があるだらうか。勇氣がなくと

も引張り出してやる。

彼は恁う決心した。其れは晴れきつた青天に大きな入道雲がところ〴〵に翼を擴げて居る朝であつた、敬三は床を出ると直ぐフロックコートを着た。

『此の頃は忙しさうですね』と母はちらり〳〵敬三の顏を見やつて言つた。

『あゝ』

『何か心配な事でもあるのかえ、顏色が大分惡い』

『露探事件でね、お母さん、世間の奴は愛國々々と言ふけれども、罪のないものを露探にしてしまつて其れを愛國だと思うてるんでは仕樣がありませんね』

『お前は高峰さんの味方をしようといふのかえ』

母の顏は嚴肅であつた。

『さうです、寃罪ですからな』

『お前のお父さんは他人が白と言へば黑と言ひ、寒いと言へば暑いと言ふ人でした、其のために一生あの通りで死にましたが、私はお前にもさういふ氣質がありはしまいかと思ふとね……世の中は……』

『お父さんは正義の士です、僕がお父さんの子である事を何よりの矜持として居ますよ、世間に負

けて堪るもんですか、御安心なさい』

『さうかね』

母は再び言はなかつた。敬三は今日こそは最後の手段に訴へても例の女を引張り出してやらうといふ勇氣が益〻加はつた。彼は自轉車に乘るや否や眞直に三番町の上原雅子を訪ねた。が雅子は留守であつた。

『何時頃御歸りになるでせうか』と敬三が訊いた。

『今晩は晩くなると仰有つて〻御座いました』と取次の女中が言つた。

『居留守を使つてるんだ』

敬三は恁う思ひながら外へ出た。朝の訪問の第一番に不快な思をさせられたので、彼は何となく今日の作戰が無効に終る樣な氣がした。彼の第三の手段は今一人の女、女優望月浪路を訪ねる事であつた。其の頃浪路の一座は芝の福住樓を根據に秋興行の準備をして居た。浪路の良人壽一は日本劇壇の鬼才であつた。彼は寄席の高座に奇妙な唄を唄つて人氣を博して居たのだが、一躍して俳優となり、日本に初めての社會劇を創立した。因襲に囚はれた役者共が昔のまゝの丁髷以外には一歩も進む事が出來ないに拘らず、壽一は大英斷を以て現代の風俗そのまゝを演出した。日清戰爭に旗上をしてから此に十年、而も彼は其れに甘んぜず專ら外國の名作を飜案して上場するので滿都の學

生は勿論、苟くも千篇一律の舊い芝居に飽きた人々は悉く彼に傾いた。彼は舞臺に於ては見物の氣を見るに頗る巧みで、其の滴る如き愛嬌と、先天的な機智とはどんな人でも魅惑せずには措かなかつた。彼は役者としての技巧が十分であるのみならず、事業家としての機略も亦十分であつた。彼は妻の浪路の美貌を利用してあらゆる上流社會に取入つた。特に梅園伯とは複雜な因緣があると稱せられて居る。其のために一面に於て彼を非難する者は恁う言ふ。

『事業のためには女房を犧牲にする男だ』

だが、これに對して辯護する者は恁う言ふ。

『浪路も亦虛榮のためには良人を犧牲にする女だ』

何れが眞か解らない。併し才人たる壽一と妖婦たる浪路、此の夫婦は確かに當代の代表的傑物かも知れぬ。

福住樓の望月事務所へ行つて見ると、其處に七八人の青年が集まつて居た。二十疊ばかりの廣間……疊は既に赤く古びて正面の床の間に掛けた大きな墨繪の龍は、軸の處が一尺ばかり剝がれて置物の布袋に埃が一ぱい積つて居る。一人の男は襯衣と猿股一つで五六人の男を相手に立廻の稽古をして居る。其れはいかにも劇しい格闘であつた。前から一人、左右から一人づつ、背後から一人、やつとばかりに攫みかゝるを、拳を擧げるとばたりと倒れる。左の男の向脛を右足で蹴つて、右の

男の横腹に當身を食はせる、背後から來るのは、體を沈めて前へのめらせる。

『ぶら下がつちや不可ん』と件の男が言ふ。

『拳骨を見せたら顚倒返るんだぞ、可いか、身體を粘着けちや業が汚く見えるぞ、離れて〳〵、やい太田、お前は肩を攫むから姿勢が崩れて不可ねえ、攫む樣に見せて手を離して置くんだ、さあもう一遍』

立役が平氣な代りに、雜兵共は汗みづくになつて呼吸を切らして居る。

『浪路さんに御目にかゝりたいんで』と敬三は名刺を振りながら言つた。だが其れは聞えなかつた。稽古は白熱する。

『何を？　俺は大日本帝國軍人だ、ロスケの百や二百は蛆虫同然だ、さあ來い』

『生意氣な事を吐かしやがるな』と雜兵が言つた。

『不可ない、露助だからそんなに日本語を上手に使つちや不可ない』と立役が言つた。

『ペケ〳〵〳〵』と一人が言つた。

『支那人ぢやあるまいし、ペケといふか』と其の男が叱られた。他の者は一度に笑つた。

『浪路さんに御目にかゝりたいんで』

敬三は此の隙を見て言つた。

『はあ』
一人の雜兵はやつと氣が着いて應對した。
『御留守です』
『何時頃御歸りですか』
『さあ、どうも』
恁う言つて他の男共に相談する樣に見向いた。人々は暫らく默つたが、軈て立役が言つた。
『わかりません、昨夜からお留守なんで』
『はあ』
敬三は落膽して二階を降りた、靴を穿かうとすると突然奥の室から田人君が現れた。
『お早う』
『やあ君はどうして?』
『どうしてつて君、まあ外へ出よう』
田人は其處にある下駄を引掛けて門を出た、二人は御成門の方へ歩いた。
『居留守ぢやないのか』と敬三は言つた。
『本留守でけす、何しろね、奴さん金の工面がつかないんで今四苦八苦だ』

『奴さんて誰の事だ』
『望月さ、昨日から執達吏が來るやら何やら、僕も見るに見兼るから何とかしようと思ふけれども、どうもね』
『ぢや浪路も金の工面に行つたのか』
『さうです、それで、實にどうも、實に……浪路はね、昨夜梅園伯の處へ無心に行つたのだ』
『宿りがけでか』
『女が男を口說き落すには宿りがけでなくちや』
『なるほど』
『其れが今朝になつても歸つて來ない、そこで亭主の方は氣が氣でない』
『併し承知の上でやつたんだらう』
『一晩だけは承知かも知らんが……はッ〳〵〳〵』
『ぢや浪路は伯爵の處に居るね』
『さうだ、多分大森の松の家だらうと思ふよ』
『可しッ僕は其處へ行く』
『隱れ遊びをしてる處へ行くのは詰らないよ』

『いや、僕はどうしても行く、ぐづ〳〵しちや居られないからな』

敬三は田人に別れて直ちに大森の松の家を訪ねた。彼は萬一を慮つて名刺に、一大事件につき個人として御面會を御願ひ申します、と書き添へた。

『どうぞ此方へ』

暫らく待たした上で女中が長い廊下を案内した。紅蓮白蓮の咲き揃うた池を見晴らして御殿風の簾を悉く捲き上げさせ、二室を開け擴げた廣座敷の眞中に梅園伯は片足を投げ出し脇息に肱を凭らして凝と軒端から白雲を眺めて居た。唐紙や絹地、墨痕鮮かに書かれたもの、書き損つたもの、其れ等は次室の方へ擴げられ、伯爵の足元近く大きな硯に墨を磨つて居るのは浪路である。

『やあ』

伯爵は宿屋の浴衣に細い帶を卷き付けた磊落な姿勢のまゝ、敬三に聲を掛け、

『少し助けてくれ、何か可い詩がないか』

『伯爵の御近作は？』と敬三が言つた。

『近作は無い、古人の句が可いが何か』

『揮毫には何方も困らせられるさうですな、犬養木堂は地方へ行くと餘り煩くせがまれるもんだから車馬絡繹だの黄塵萬丈だのと出鱈目を書くさうです』

『はッ〳〵〳〵其れは名案ぢや』

伯爵は筆を擱いて笑つた。

『永井が居ると、永井に書かせると私も助かるんぢやが、彼奴何處に居るか貴公は知らんか』

『實は其の事で參つたのです』

『ふうむ』

『僕も永井を探してるんです、貴方に御聞きしたら解るだらうと思つて』

『私は知らんよ』

『ではもう駄目です、議會は明日決議案を出しますから』

『出しても可いぢやないか』

伯爵は恁う言つて筆を取り、横の唐紙にすら〳〵と書いた。

「不闘焉」

『其れでゝすな、僕はどうしてもあの事件は永井及び高峰の寃罪だと思ひますから、今日中に其の證據を集めたいと思ひます』

『抛つとけ』と伯爵は言つた、『小細工は永續するものぢやない』

『併し午後に迫つて居ますから』

『決議をさせるが可い』

恁う言つて伯は再び筆を取つた。

「白雲堪臥　君早歸」

『抛つとけばあの二人は社會から葬られます、そこで僕は恁ういふことを浪路さんに御訊きしたいのです』

敬三は極めて無遠慮に、浪路の方へ向き直つた。

『私？』と浪路は嫣然して眼を向けた。荒い瀧縞の絽縮緬に薄青色の青海波の帶を締めて墨を磨る手元の袖口を片手で抑へ、少し仰向になつた額に廂髪の亂れがばさ〳〵と垂れる、年は三十五六、眼尻に小皺も見えず、爛熟した肉體の青味がかつた色は何となく淫蕩な匂ひを漂はす。

『貴方は熱海で佛蘭西人と密會なさいましたか』

『あらッ』

浪路の顏はさつと紅くなつた、彼は墨を硯に載せて、其の手を手巾で拭いたが、其の儘呼吸も吐かない。

『其れが肝心な問題です、貴方ですか、但しは上原さんですか、僕は御二人の中の一人だと思ひます、若し貴方だつたら、貴方に證明を願ひたいのです、高峰や永井と會つた時の模樣を精しく御話

を願ひます』

『其んな事は私……』

浪路の唇は顫へた。

『其れは詰らない事ぢや』と梅園伯は言つた。

『どうしてですか』

『私が返答しよう、熱海で會つたのは浪路ぢや、私は二人を伴れて熱海へ行つた時の事ぢや、二人は衝突してな、はッ〳〵はッ私も困つた』

『ボーリューに會つたのは？』

『一人が怒るから、永井が遊びに伴れて行つた、其れだけの事ぢや。要するにボーリューがどうの、高峰がどうの、永井がどうのといふ問題ぢやない。政府が、今の内閣が、國民の敵愾心を利用して高峰を葬らうといふのが目的なのぢや。ボーリューは決して露國の探偵でも何でもない、ボーリューが佛蘭西へ歸つたから警視廳ではどんな嘘でも揑造が出來る』

『では貴方が何故御自身に二人のために辯解して下さらないのですか』

敬三は膝を正して詰め寄つた。

『敵は私を渦卷に引き込まうとしてるのぢや、敵の計略に引き込まれるのは智者の取らざる處ぢや』

『ぢや二人を犠牲になさるのですか』

『今の處は犠牲ぢや、後日に解る事ぢや』

伯爵は恁う言つて俄かに筆を硯に突き入れ、

「三萬六千日、夜々當秉燭」と書いた。

『永井さんにも高峰さんにも御氣の毒で私は……』

浪路は手巾を眼に當てた。

『おぬし達が悋氣喧嘩をしたからぢや、以後慎め』

伯爵はから〳〵と笑つて直ぐ又恁う書いた。

忍ぶれど
　あの鶯に誘はれて
綻び初めた梅の花
　浮名が立つぢやないかいな

『お前にやらう』

『はい』

浪路は其れを見詰めた。

『其れを彈いて見い』

『はい』

敬三は匆々に其處を出た。實際彼は餘りの驚きに言葉も出なかつたのである。彼は初めて社會の裏面を知つた。裏面の醜惡といふ文字は新聞雜誌に濫用される文字であるが、併し恁うまで複雜であるとは夢にも思はなかつた。

一つの事件が表面に現れるまでには數へきれぬ程のごた〳〵した伏線が起伏重疊して居る。其れは時計の器械の樣に大小の齒車が相倚り相引き相觸れて一から二、二から三へ次第々々に綜錯犬牙して行くのだ、而も表面から見ただけでは何人にも解らない。

其の日の午後二時頃衆議院の食堂の眞中頃に黑紹の羽織を着た禿頭の六十恰好の赤ら顏な男が悠然として海老のフライを見詰めながら麥酒を飲んで居た。其れは九州の代議士で木原彦哉といふ醫者である。彼は當日露探彈劾に於ける決議案提出者としての演說をする事になつて居る。で彼は昨夜から毛筆で克明に書き綴つた原稿を懷から出しては又首を捻つた。元來彼は非常な吝嗇家で、鉅萬の富を有つて居るのだが、決して公益のためには費はない。此のために選擧區民は彼を煽て上げて其の不淨な金を散々費消せしめようといふ計畫であつたのだが、運の强い彼は候補の名乘を擧げると同時に相手の反對派の候補者が急病で死んだ、そこで彼は殆ど一文も費はずに當選する事が出

来た。

議會へ來てから一度も演說らしい演說をした事はなし、郷里への土產もないので頗る氣に病んでる折柄、今度年長者の故を以て高峰素之に處決を促す演說をする事になつた。而も問題は露探計發であり、滿天下の愛國心に訴ふといふ有利な役目である。

昨夜二時頃まで思を凝らして書いた草稿は今讀んで見ると、どうも面白くない。

『日露戰爭は皇國空前の出來事であります、苟くも籍を我が國に置くものは夙夜戰勝を祈らないものはありますまい。抑〻神州正大の氣は發して萬朶の櫻となり、溢れて富嶽の秀麗となる……』

此處まで讀んで彼は麥酒をぐつと飲んだ。其れから海老の尻尾をちよつと食刀で突いたが、直ぐ此の字句は餘りに文章臭いと氣が付いた。

『素晴らしい警句が欲しい、何かなからうか』

恁う考へた。向ふの席では三人の代議士が議員の歲費を高利貸が差押へる權利があるかないかに就いて議論をして居た。其の聲がいやに乾ききつて食堂一ぱいに響くので、木原老人は眉を顰めた、彼は漸と浮び出た警句が此の聲のために引込んでしまつたのであつた。そこで彼はボーイに言つた。

『ウヰスキーを一杯くれ』

議員達は追々に集まつて來た。元來此の食堂は一定の時間を制定して、時間以外には食事を供給

せぬ規則であつたのだが、政治家といふものは不規則の權化の樣なもので、空腹を感ぜずにたゞ暇潰しに食堂に來るものが多い。其の上に彼等の貧乏たるや亦甚しきもので、食堂の支拂もせずに次の議會まで延ばして置くものも少くない。

『國家のためですから少しばかりの損は何とも思ひません』

恁う食堂の主人が言ふが、併し某代議士の話に依ると市中の洋食よりも三割は高價いさうだ。詰り仕拂はない人の分を支拂ふ人が負擔してる事になる。

暇潰しの連中は三時頃になるとどし〳〵入込んで來た。喋舌るのが商賣なので、行儀も何もあつたものでない、蜂の巢を叩いた樣に高聲の雜話が張る。

話題はいふまでもなく高峰や永井の一身上の攻擊であつた。

『何しろ、明治新聞が政府を攻擊して財政がめちや〳〵だ、經濟がめちや〳〵だ、こんな風では露國に勝てないと書き立てたのは怪しからんぢやないか、我が國の弱點を敵に知らしめたものだ』

がら〳〵した石油罐を曳ずる樣な聲で一人の男が言つた。

『あれは幾度も露國の軍人と密會してるよ』

他の聲が言つた。

『彼の生活振を見給へ、非常な贅澤を極めて居る、不正な收入がなければ、あんな生活は出來ない

事だ。

此等の話は重に政府黨の群から起つた。それに對しては誰も何とも言はなかつた。只一人、新聞記者出身の代議士が悠う言つた。

『日本の財政を攻擊する事は強ち賣國的行爲にはなるまい、國を愛すればこそ政府を責めるんだ』

反對の聲が一度に起つた。此の時木原老人は五杯目のウヰスキーを飲んだ、さうして、十分愉快になつて、演說なぞは御茶の子だといふ氣持になつた。

ボーイは絶間なく往來した、傍聽券を貰ひに來る面會人の名刺は誰彼の差別なく卓子に積まれた。

『困つたなあ一枚もない』

人々は互に悠う言つた。

外はもう傍聽者が門内門外に詰めかけて居た。傍聽者の入口は芝の方へ向いた通用門である、其處の築地には人の山を築いた。入口から珠數になつて犇めく群集は表門の方まで續き、殘るものは橋を越えて向ふ側の町に屯した。入口の受附は運送店の樣に大きな臺を据ゑて、其の横は下足受渡所になつて居る。臺の上には五六の事務員が必死になつて群集と爭うて居る、追へば退り又押寄せる。鼎の沸く樣な混雜の中に何の某ノ〳〵といふ面會人を呼ぶ聲が聞える。一人が一枚の傍聽券を受取らうとすると八方から長い手が其れを襲ひかゝる、押すなと叫ぶもの、踏むもの、蹴るもの。

露探問題は恐しい人氣を惹いた。

敬三が行つたのは最早四時過ぎる頃であつた。彼は途中で三杯のウヰスキーを引掛けた。通用門の横に木造の粗末な建物がある、青いペンキで塗つた處は田舍の郵便局其のまゝである。其れは新聞記者の詰所である、人口には自轉車が十幾臺となく並んで居た。此處の番人兼小使は菊さんといふ痘痕の男で、平素には鮮や菓子などを記者に賣つて居るのだが、此の日は直ぐに賣切れて外出する事が出來なかつた。彼は暑いに拘らず熱い御茶を一人々々に配つた、誰も飲むものがないので茶碗は卓子から落ち、黄色な水が床を流れた、其の不潔な床の上を靴や草履が自然に拭き取つてくれる。

二階は三室であるが、二室は朝日新聞社と大阪毎日新聞社の長距離電話室――專用――となつて一般の記者は只一つの室に雜居しなければならない、尤も朝日と毎日は其れだけの經費を負擔するので何人も苦情が言へない。

二十幾つの新聞記者の雜居する室には碁盤が三つほど置かれてあるので更に狹苦しさを感じさせる、だが碁を打てる者以外は椅子に腰を下すものがなかつた。狹い階段が絶えず鳴り轟いた、蒸す樣な暑さと、人間の熱氣とで室には異樣な臭氣が溢れた。敬三は氣の拔けた人の樣に窓枠に背を凭らして居た。彼は丁度水に溺るゝ人が、溺るゝと知りつゝもずる〳〵と深みへ落ち込んで行く

樣に、抵抗する事の出來ない或一種の力に壓された。さうして其れは何であるかを考へようとしたが其れも無駄であつた。

新聞記者の凡てが高峰の露探を信じきつて居た。さうしてどれも〳〵悲憤の面持をして高峰が今日議會に於て微塵に粉碎される光景に就いて或快感を以て豫想して居た。

『他の事と違ふ、賣國奴は生かして置くわけに行かんよ』

一人の記者が恁う大きな聲で怒鳴つた。

『高峰を見たか』と他の一人が言ふ。

『見た』

『どんな面をしてゐる』

『人間の面をしてゐるよ』

『洋袴の間から尻尾が見えなかつたか』

『いや和服だよ』

此の噂の渦巻の間を潜り抜ける樣に室の隅から隅へと小さくなつて移り廻る一人の男がある。其れは明治新聞の記者で堀田といふのであつた。堀田は人竝より圖抜けて身丈が高い、其の溫厚な人の好ささうな顏は今日に限つて青ざめて額に汗が滲み、口元は弛んで疲勞れきつて居る。彼は人々

が我が社長を罵詈するのを見て默つて居た。さうして人々に見付からぬ樣に窓から外の方を向いて居た。

『氣の毒だなあ』と敬三は肚の中で言つた。社長のために肩身を狹くしてゐるんだ、どんなに口惜しからう、どんなに悲しからう。

何か言つて慰めてやらうと思つたが彼は言葉が出なかつた。此の時階段の上で景氣の好い聲が聞えた。

『素晴らしい人氣ですな』

其れは敬三の社長石阪倉平の聲であつた。

『石阪さん御目出たう』

『とう〳〵徹底的に惡魔を退治しましたね』

他の新聞記者達は石阪を取卷いて盛んに讃辭を浴びせた。

『やあ、どう致して、つまり日本の正義未だ滅びすだね』

石阪は扁平たい鼻をぴく〳〵動かし、其の度の强い近眼鏡の上から人々の顏をちら〳〵見やりながら微笑して室へ入つた。彼は窓から外を見下した、外は今鐵桶竹麻の如き群集が沸騰して居る。

『賣國奴を殺せ、露探を殺せ』

西日は赫と群集を照らした。寄せては返す波濤の如く犇めき合ひ、罵り合ひ、振鈴の音を待つて居る。

『盛んだなあ』

倉平は恁う言つてぐつと背中を反らした、彼の厚ほつたい唇には一種名狀しがたき得意の微笑が浮んだ。彼は一管の筆が恁くまで輿民を動かしたかと思ふ時、又今日こそは他年の强敵明治新聞を撲滅し得るのだと思うた時、我ながら我が力の偉大なるに感歎せざる事を得なかつた。

『どうです小柴君、輿論ほど正しいものはありませんな』

彼は敬三に恁う言つた。

『さうですかな、併し僕はアリストートルの言葉を記憶して居ます』

『どんな言葉ですか』

『輿論は愚論なり』

倉平は空を仰いで呵々と笑つた。敬三は二階を降りた。振鈴が鳴つた。

五時になつて漸と開會した、群集は堤を破る洪水の如く殺到した。敬三は急いで廊下へ出て、階段を上る時堀田に逢つた。彼はいかにも打萎れて眼は涙に濡れて居た。

『君！』と敬三は聲を掛けた、『僕は君の社長が寃罪である事を知つてるんだ、社長がなぜ凡てを告

白しないんだらう』

『告白するだらうと思ふよ、社長は今朝何事かを決心したらしい』

『さうか、其れが可い、君の社長も、凡ての政治家の樣に裏面ばかりを驅け廻るから誤解されるんだよ』

『僕もさう思ふよ』

傍聽席は立錐の地もなかつた、婦人席にたつた一人の婦人が現れた、其れは上原雅子であつた。例の如く議長から諸般の報告があつた。傍聽人の中何人も其れを聞いてるものがなかつた。人々は議員席を見下して所謂名士達の顏を探して居た。暑さが烈しいので白帷子に黑紋付が多かつた。扇が波の如く動く。

報告が終ると議長は非常に緊張した顏をして起つた。彼は高峰素之の賣國的行爲の嫌疑に對する調査委員會の顚末を述べ、

『委員會は高峰素之君が露國の間諜たる確實の證據を發見せずと雖も、同君は一身の利益を計らんがため帝國の利益に反し露國に利益ある行動ありし事は之を認む』

此の報告は群集に非常な失望を與へた。露探！　賣國奴として不逞の國賊を面責し、秋霜烈日の如き裁斷を下して國民の公憤を晴してくれるだらうと期待した彼等は開いた口が塞がらなかつた。

『何あんだ』

『詰らない』

『泰山鳴動して鼠が一匹飛び出した』

記者席に恁う囁くものもあつた。曖昧と言はうか、不徹底と言はうか、國民の選良一人を葬るには餘りに薄弱な決議文であると敬三は思つた。

議場はガヤ〳〵と亂れた、さうして禿頭の木原が袴の裾をからげ〳〵登壇した。彼は食堂で少し飲み過ぎた爲めに辭句の配列に氣を配る事を忘れたので突然恁う言つた。

『理髪師は無賃で兵隊の頭を刈ります、按摩もロハで兵隊の肩を揉みます、其れに代議士ともあらうものが我が國の利益に反する行動をしたといふ事は實に遺憾であります』

議場に不思議な光景が現れた、其れは何れも笑ひたさを怺へる辛抱の表情である、笑ひ出したら賣國奴と言はれる、笑ふわけには行かぬ、左りとて理髪師と按摩の愛國心を引合ひに一代議士を糾彈するのは餘りに滑稽な對照である。

と木原は突拍子もない聲で又叫んだ。

『諸葛亮孔明は涙を揮うて馬謖を斬りました……』

理髪師と按摩が一轉して孔明となる、滿場の議員は悉く自分の膝を見詰めた、扇で顔を隠したものもあり、手巾で汗を拭く眞似をしてるものもあつた。

『馬鹿々々しい』

敬三は筆記臺に頤を乗せたまゝ眼を閉ぢた。三杯のウィスキーは仄かな眠を誘うて彼はうと〳〵と夢に入つた。

黒い煙

敬三は眠くて〳〵堪らない。彼は何とかして睡魔を拂はうと鈍色硝子の大きな電燈を見詰めたり、政府委員席の軍服の光を見たりした、が其れも無駄であつた。木原代議士の按摩や床屋や諸葛亮孔明のだら〳〵した物語は蒸し昇る暑さと共に敬三の腦の底を弛ませた。

『これでは不可んぞ』

彼は自分で自分を勵ました、だが恰ら重い錘を上眶から垂れて引込まれる樣に眼が次第に塞がつて來る。又ぱッと睜く、直ぐ引き下される。蜘蛛の糸が眼を十重二十重に圍む。此の糸の向ふの遙かどん底に三百の議員が扇を動かして居る、ひら〳〵〳〵、其れは次第に小さくなり朧になり、蜘蛛の糸は落花を鎖して甘い香ひが腦から脊骨へ流れ込むと彼は首を左に傾けたまゝうと〳〵と黒甜の鄕に入る。

ちくりッ。

誰かゞ手の甲を刺すので驚いて眼を覺ますと隣席の報知新聞記者が鉛筆の尖で突いたのであつた。

『おい、しつかりしろよ、高峰が出たよ』

『さうか』

敬三は壇上を見た。高峰は丈高からず、痩せ形で髭がない。黒紹の羽織に白絣、縞紹の袴、年はもう五十に近い。頭は斑白で首に手巾を卷いてるのは風邪でも引いたのか、さういふ事は何となく氣勢が挫けて見えた。

彼は壇上に立つて靜かに人々を見廻した、其れから洋盃に水を注いだ。

『あの水を飲みたいな』と敬三が思つた、と彼の眼はきら〳〵と光る洋盃に惹き付けられた、其の光は背後にある警視總監の金色の肩章と奇妙に反映した。

又しても敬三は眠つた。

ちくりッ。

鉛筆が再び手の甲を刺す。議場は水を打つた様に靜まつて居る。萩の下葉を潜る秋の流れの如く高峰の低い聲が續く。

『私は個人として敵を有つて居ります、又明治新聞といふ新聞に關係を有つて居る處から意外の敵

を受けて居ります、併し高峰は憎い奴だ明治新聞は憎い奴だといふ感情と、私が露探であるや否やといふ問題とは別々にして戴きたいのであります。調査委員會では私が露探たる證據がないと御認めになりましたに拘らず、今日議會に於て漠然と帝國の利益に反し露國に利益ある行動をなしたといふ決議をなされたのは何故でせう。味方を害し敵を利したなら其れは疑もなく露探と同じきものになります、高峰素之の如何なる點が露探に該當するか、其れを明かに擧示されなければ此の決議は極めて薄弱であります』

『男らしくしろ』

『泣言を言ふな』

『引込め、國賊！』

議場の彼方此方から罵詈の聲が起つた。

『面白くなつたぞ』と報知記者が囁いた、だが敬三は矢張りうと〳〵して居た、彼は半眠半覺の間にあつた、ほんの僅かばかりの間にとろ〳〵と夢を見た。其れは幼い時に田舍で見た機關人形の光景である。

『さあ〳〵御覽じろ、地獄極樂は此の世の誡め』と白い手拭を首に卷いた女が囃す、と其の亭主らしい日焼のした……酒好きらしい鼻の赤い男が唄ひ出す。

へ上りつめれば針の山、　前は血の池何とせう……

がつたん〳〵〳〵、黒い鐵棒を提げた赤鬼が金色の眼玉をぎろ〳〵させる度に鐵の棒が不器用に動く。青鬼、黒鬼、馬頭牛頭共が一人の女を山に追ひ詰める。

向ふには閻魔大王が金モール制服の姿で悠然と控へて居る、敬三は子供の時鬼よりも大王が恐かつた、恐る〳〵見上げると其れは警視總監であつた。

針の山に追ひ詰められて高峰は猫言葉を續ける。彼の顏は次第に血色を帶びて來た、抵抗すべからざる孤獨の力を以てして今最後に敵の本營に迫らうとして居る。

弱々しげに又壯烈である。

『何等の證據もないものを露探である國賊であると見做して社會的生命を奪はうとなさる諸君の眞意は諒解に苦みます、此の政府席に御見えになる一人か二人の計畫で世人をして恁かる誤解をなさしむる樣にしたのではありますまいか、其れとも又』

彼は警視總監をぢろりと尻目に掛け、其れから電光の如く傍聽席の一方を見上げた、其處には石阪倉平が鬼瓦の樣な顏をして冷然と見下して居た。

嵐の如き聲が起つた。

『引込め、賣國奴』

『悲鳴を擧げるな』

犬が猫を追詰める、最初は遊戯である、弱者を弄んで我が强きを誇る遊戯的態度である、併し猫としては一生懸命である、彼女は窮する餘り其の爪を以て犬の鼻柱――痛い處を引掻く、此に於て犬の態度は遊戯から一變して眞劍になる、何を生意氣な、思ひ知らしてやるぞ、慘忍な暴虐が始まる。

急所を突かれた政府黨は躍起になつて騷ぎ出した。足踏みするもの、卓を叩くもの、演壇目蒐けて押寄せるもの――其等は恰ら高峰を攻擊する事が自己の愛國心を世間に宣傳する好機會と思ふもの、如く見えた。

高峰は默つて騷擾の靜まるのを待つた。愛國！　愛國！　美名の旗幟を眞向に振翳して暴れ廻る彼等に對しては辯解すればするだけ誤解を深める事になる、其れは逆卷く洪水を堰き止めようとするにも似て居る、群集の力！　燃原の火勢、防ぎ得べき筈がない。

高峰は其れを感じた、だが俯仰天地に愧ぢざる彼の自尊心は、おめ〳〵不法の集團に屈する事を許さない。

『御信じ下さらぬとあれば最早何も申す必要がありません、別れを皆さんに告げます』

彼は壇を降りようとして背後を向いた、さうして警視總監の顏を覗く樣に前に突き出してぐつと睨んだ。

總監は指の先で髭を上の方へ跳ね上げた。

『出て行け』

議員達は怒鳴つた。高峰は足元も亂さずに扉の外に消えた。

『萬歳！』

議員席からも傍聽席からも潮の如く喝采した。敬三はすつかり眠氣が冷めてしまつた、何かしらん、活々とした炎の如きものが胸に燃えた。彼は石阪社長の方を見やつた、倉平は殆ど釘付にされた様に高峰の去つた扉口を見詰めて居た。

議事は一瀉千里に進む。

「衆議院議員高峰素之君は本院の決議に鑑み處決すべきものと認む」

決議案は滿場一致を以て可決した。

雪崩を打つて群集は廊下へ飛び出した。敬三は蹌踉と記者詰所の二階へ轉がり込んだ、其處には各新聞社の記者が鼎の如く騒いで居た、院外有志家らしいものも雜つて喚く、罵る、笑ふ、恰ら戰場の如き雜閙の間に、大阪への長距離電話などが聞えた。萬歳！　萬歳！　の聲が築地の内外から濠の向ふの櫻田本郷町の邊まで轟いた。

椅子は悉く占領されて立つて居るものが多かつた、敬三は默つて卓子の上に躍り上つた、其處には茶碗や土瓶が載せられてあつた、彼は茶碗や土瓶を足で蹴落した、黄色な茶が汚水の如く床板に流れた。人々は一種の輕蔑を以て敬三を見て居た。

『俺と喧嘩する奴がないか』と敬三が怒鳴つた。

『馬鹿ッ、醉つてるのか』

敬三と懇意な連中は恁う言つて笑つた、實を言ふと凡ての記者達が敬三と親密であると言つても可いのだ。

『喧嘩をしたいんだ、今日の決議は何だ、間違だらけだ、僞愛國、陰謀、詐欺師のために君等が欺かれてるんだ、高峰は決して露探ぢやない、議會は腐つた、おい、其れを知らないのか』

敬三の顔は青ざめて眼が吊り上つて居た。

『止せよ小柴！』

人々が言つた。彼等は敬三に何も言はせまいとして敬三を卓上から曳き下した、敬三は默つて彼等の爲すがまゝに任せた、彼は煮えくり返る様な腹立たしさが胸に渦卷きつゝも眼からは頻りに涙が零れた。

『君等は何にも知らないんだよ』

彼は恁う言つて二階を降りた、と彼の後を追ふ様に降りて來たものがある。其れは明治新聞の堀

田であつた。彼は自轉車の鍵を解きかけた敬三の肩先から顔を突出して囁いた。

『君！　君は今の樣な事を人中で言つては不可ないよ』

『なぜだ』

『君も露探だと誤解されるよ』

『誤解されても構はんよ』

堀田は悲しさうな顔をして入口の方へ去つた。敬三は何かしらん鬱勃たるものが喉に痞へて居るので相手構はずに喧嘩したいと思つた。

彼は自轉車に乘つた、議會の裏門は靜かであつた。人々は大抵散り〴〵に去つて、臨時に召集された巡査ばかりが何十人となく間拔けた顔をして立つて居た。敬三は巡査の間を威勢よく通り拔けた、其れから又引返してもう一度巡査の間を拔けた、巡査は此の小兒らしい挑戰に應じなかつた、彼等は笑つて居た、敬三は櫻田本郷町へ車を向けた。もう夕方である。往き來るさの車、役所歸りの人々、豆腐屋、新聞の號外屋などが雜沓した。敬三は盛んに鈴を鳴らした。

『おい小柴……おい』

聲が何處からとなく聞えた、其れは何人の聲かも想像が出來ない、彼は五六間自轉車をやり過してから把手を廻した。

『おういー』

向ふの角に荒い浴衣を着て立つて居るのは永井鷗眠であつた。彼は帽子も被らず、手に手拭と石鹸を持つて居た。

『おい隨分君を探したぞ』と敬三は自轉車を降りて言つた。

『知つてるよ』と鷗眠は人懷こさうな眼をして、

『面白かつたね』

『何がさ』

『今日の議會がさ』

『馬鹿ッ、高峰が露探にされてしまつたちやないか、さうすると君も從つて露探だといふ事になる』

『其れで可いんだよ、何にしても早く片付かんと俺は窮屈で堪らない、今日で十日も家へ歸らないんだ、無論家へ歸つた處で嬶があるわけでなし、どうでも可い樣なものだが、料理屋、待合、何處へも行けないんで今度といふ今度ほど困つた事はない』

『今日議會へ行つたのか』

『うむ、こつそり行つて見た』

『馬鹿々々しいと思はんか』

『思つても仕様がないぢやないか、ところでどうだ、一杯やらうか、俺の隠れ家へ来んか』
『君は湯へ行くんだらう』
『行かんでも可い』
『隠れ家は何處だ』
『そこだよ、君に紹介しよう』
『女か』
『うむ……丁度可い機だ、君に聞いて貰ひたいんだよ、どうしても女が足を洗つて俺の嬶にしてくれと言ふんだ、だがさうすると山（紅葉館）の方があるだらう　彼奴も可愛さうだからな』
『馬鹿ッ』と敬三はぴり〳〵眉を動かして言つた。『君は今女どころぢやないぢやないか、露探になつたんだぞ、おい賣國奴にされてしまつたんだぞ』
『大きな聲で言ふなよ』と鷗眠はけろりとして、『そら向ふの鞄屋の女房が見てるぢやないか、あいつは一寸話せる代物だね』
『俺は歸る、俺は君と絶交だ』
敬三は自轉車を片手で曳き〳〵歩き出した。
『そんなに怒るねえ』

鷗眠は狎える様に言ひながら敬三に從いて歩いた。敬三は最早ものを言ふ必要がないかの如く默つた、彼は鷗眠を「骨なし」「弱虫」と罵つてやりたかつた、だが彼は罵つた處で鷗眠には一向應へがない事を知つて居た。
『そんなに怒るなよ、おい、何處かへ行かうよ』
鷗眠は同じ事を繰返して手拭と石鹸を懐に入れたり出したりして居る。
『君は梅園伯や其の他のえらい人達に可愛がられ過ぎて居るよ、大木の下には草が育たぬ、大きな人物に接近して居るものは自己が無くなる、だから露探と言はれても平氣なんだらう』
敬三は恁う言つた。
『だつてお前、仕様のない事だ』
『自分の名譽を考へろよ、馬鹿ッ』
『お前は田舎者だな』と鷗眠は言つた。
『もうお前とは何にも言はん』
敬三は自轉車に乘つた。彼は振返りもしなかつたが鷗眠が手拭と石鹸を持つて自分を何時迄も見送つて居る様な氣がした。
暫らく胸がかん〳〵燒ける様に腹立たしかつたので彼は公園の中を抜けて虎の門を潜つた。涼し

い風に吹かれてる中に彼の心は段々靜まり鷗眠に對する憤怒の情が全く消えてしまつた。鷗眠とは折り〳〵怎ういふ喧嘩をするが終りまで鷗眠を憎む事は出來なかつた。享樂的で洒落者で毒氣が無くて、ものに凝滯がなくて、これぞといふ賴母しい點もないが、併し一點野卑な臭ひがない、何と言つても寛濶な一個の樂天兒である、露探の嫌疑を受けた事も、藝者に惚れられた事も同一に見做して居る。

『可笑しな奴だ』

敬三は自轉車の上で笑つた。が其れは直ぐ堰き上げる樣な淋しい心持と代つた。

『彼奴は犧牲にされたんだ、高峰も犧牲にされた、黨閥の爭ひのために日本國民として生きて居られぬ樣な汚辱を受けたのだ』

神田橋へ出ると號外の聲が八方に聞える。

『露探事件の號外、號外、號外』

敬三は腸を引拐られる樣に感じた。嘘の記事を書いた號外！　其れを悉く川の中へ拋り込みたいと思つた。

彼は號外の聲を逃れたいと思ふもの〻如く車を急がせた。彼は此の日親友の小南を訪問すべき豫定であつたので眞直に猿樂町から小石川の方へ拔けた、臺町へ行くには江戸川の西河岸を行くと東

河岸を行くとの二筋路がある、彼は東緣を辿つた、其處は河の修繕のために泥が山の如く積まれてある、元の同人社の前を漸く傳うて小さな町を曲ると、砲兵工廠の笛が消魂しく聞えた。

『あゝ腹が空いた』

考へて見ると晝には酒を飲んだきりで食事をしなかつたのである、町は死んだ樣に淋しい、片側が高く片側の低い凹凸の烈しい此の町は宵ながら人通がなく、路の眞中にある小さな社に掩ひかぶさつて居る二本の樹木がさあ〳〵風に騷いで居る、今に驟雨が來るらしい。

『一杯やらなくちや』

敬三は向ふ側の薪屋の隣に薄暗い行燈を出した店を見るともう堪へきれなくなつた。蟲喰ひの看板に「きそば」といふ字が見える。

『いらつしやい』

汚い筒袖を着た爺さんが腰に手拭をぶら下げたまゝ釜の前から聲を掛けた。塗の剝げた箱や蒸籠が棚の上に積まれてある、市松格子の花莫蓙は汚點と埃に黑ずんで居る。

『何が出來るかね』

『へえ、何でも出來ます』と爺さんが威勢よく言つた。其れは恰ら附景氣の樣に思はれた。敬三は自轉車を土間の中に入れて其れから奥の方を見やつた、奥は一段高い四疊半位の室で其處に四五人

の男が酒を飲んで居た。其れはいかにも不統一な身裝で、學生風もあれば勞働者風もあり髭の生えたのもあつた。彼等は首を伸ばして敬三の方を見た。敬三も其の方を見た、一瞬間にして双方が敵意を起した事を明かに感じた。

『海苔で一本だ』

敬三は洋袴の裾を挾む鐵の環を外して帽子と共に傍へ置いた。店の汚いに似ず酒だけは素的に上等であつた、芳烈な液體が喉を擽る樣に過ぎて、じり〳〵と胃の腑に落ちると、腸の底がきゆうと響を立てゝ躍り上る。

『もう一本だよ』

蕎麥には手を付けずに一本を平げた、ほつかりと身内が熱して、脊骨に順和な春風が沁み渡る。向ふの室では議論が始まつた、今まで秘やかに語つて居たのが次第に高聲になつた。露探々々といふ聲が聞える、敬三は耳を欹てた。

『露探は決して恥づべき事ぢやない』

一人の髭が怎う言つた。

『なぜだ』

『日本の利益を計らうと露國の利益を計らうと個人の自由ぢやないか、日本人が日本の奴隷ぢやない』

『さうだ』と一人が賛成した。

『さうぢやない』と學生が言つた。『若し露國の利益を計るなら、先づ日本の國籍から脱しなければならん、日本人でありながら敵の利益を計るのは陰險だ、卑劣だ』

『馬鹿な事を言ふな、吾人は人類でありたい、日本とか露國とか英國とが、そんな國籍や人種差別を超越して單に人でありたい、人類でありたい、世界の上の一個の人間でありたい』

髭は演說口調で言つた。

『さうだ、だから俺達は戰爭に反對なのだ、露國に勝つた處で其れは何だ、……』

……

勞働者が言つた。

『然りッ』と障子の蔭になつてる男の聲が言つた。

『萬歲！　萬歲！　の聲を聞く度に俺は此の聲の中に父や息子や良人や兄弟を死なした人の聲があるんだと思ふと泣かずにや居られない、おい「一人の生命は全世界よりも重し」とキリストが言つたぞ、おい、生き殘つたものは勳章を貰ふが、死んだものは何を貰ふ、嬶は他の男に取られる、子供は納豆賣りになる、……』

『馬鹿ッ國家を知らねえのか、國家てえのはな、……、……、……、……、俺達が恁う言つてると同じ樣に露西亞の新人達も恁う言つてるだらうよ、へん、俺達は稅を納めてる、汗を流して稅金を納めてる、……』

『非戰黨萬歲！』と髭が叫んだ。

『……のために盃を擧げよう』

『萬歲！』

『萬歲！』

敬三は堪らなくなつて二本の銚子を兩手に高く捧げて叫んだ。

『軍國主義萬歲！　帝國萬歲！』

『生意氣な奴だね』

聲々が起つた、同時にいろ〳〵な顏が此方を覗いた。

『諸君は間違つて居る』と敬三は其の方に向いて言つた。『諸君は何故に戰爭を非認するか、戰爭は國土の保全のみが目的でない、正義の保護である、正義を保護するために邪惡を攘ふのである、諸君は其れに對して異論を挾む事は出來ん筈だ』

『面白い、議論をしよう』

髭が眞先に飛出して來た、次いで二人、三人、總計五人！

『君等は日本人か』と敬三が言つた。

『面を見たら解るだらう』と髭が言つた。

『面は日本面だ、して見ると君等は日本が今何のために戰爭をして居るかを知つてるだらう』

『俺は知らん、知りたくもない、只俺達は殘虐な殺傷が毎日々々行はれて居る事を知つて居るだけだ、……、……、……』

『國を守り正義を護るに戟と鎗を以てする、其れは決して非人道的ぢやない』

『君は死んだもの及び其の家族の悲慘さを知らんのか』と學生が言つた。

『悲慘は尊き犧牲だ、十字架の血だよ』と敬三は昂然と言つた。

『個人を犧牲にして國家が利益を得れば其れで可いのか』

『おい利己主義者！』と敬三は叫んだ、『ハイカラは止めてくれ、嚙み付く犬はぶん撲つてやるんだ、泥棒を追拂つてやるんだ、バチルスには石炭酸を振り撒くんだ、國家は皆の國家だ、皆で國家を守らなきやどうする、戰爭がいやだ、死ぬのがいやだつて祖先の墓まで露助に踏まれて默つて居られるか』

『祖先の墓なぞはどうだつて可いんだ、俺達は生きてるんだ、死んだものゝ爲に犧牲になるのは眞平だ、俺達は……』

『可しッ解つた』と敬三は叫んだ、同時に彼の手に持つた銚子から酒がさつと迸つて髭の顏に落ちた。

『何をするッ』

髭は夢中に敬三に飛び蒐つた。

『ハ、、、』と敬三は笑つた、『それ見ろ、君等も暴虐に對しては戰爭を開始するぢやないか、どうだ非戰論者、一杯飲め』

『外へ出ろ』と一人が言つた。

『喧嘩か、待て、俺は勘定を拂はなきやならん、お前達も勘定を濟ませろ、其れから愈〻日露戰爭だ』

『可しッ』

五人は元の室へ引込んだ、敬三は勘定を濟まして立上つた。

『さあ、戰爭をやるから外に出ろ』

答がない。

『どうだ、個人主義者達』

答がない。

敬三は外へ出た、カンテラに灯を點して自轉車に手を掛けながらもう一度怒鳴る。

『出て來んか、弱蟲め』

外へ出ると夜は暗い、路の眞中の榎はもう風もなく、天は一面の星屑！　天の河が隱々として列なつて居る下に町は靜かに眠つて居る。

『弱い奴等だ』

彼は恁う再び言つたが急にもの淋しくなつた、毎でも彼は喧嘩をした後で必ず淋しさを感ずるのであつた。人に撲られた後よりも人を撲つた後の方が悲しい。彼は頭から酒を浴びせてやつた髭の顏を思ひ浮べた、いかにも口惜しさうな其の眼！　其の口元！　恁う思ひ出すと同時に彼の胸にむらゝ〳〵と起つたものがある。

『あゝ時代が變つた』

猛然と彼の頭が燃え立つた、其の炎は腦天を燒いて背筋まで傳つた。

『時代が變つた……非戰論者！　人類主義！　無國籍主義、個人主義、國家呪咀！　此の惡い思想が何處から來たか』

露國だ！　露國だ！

日本は戰に勝ちつゝあるが、思想に於て露國に侵掠されつゝあるのだ、虚無主義！　社會主義！

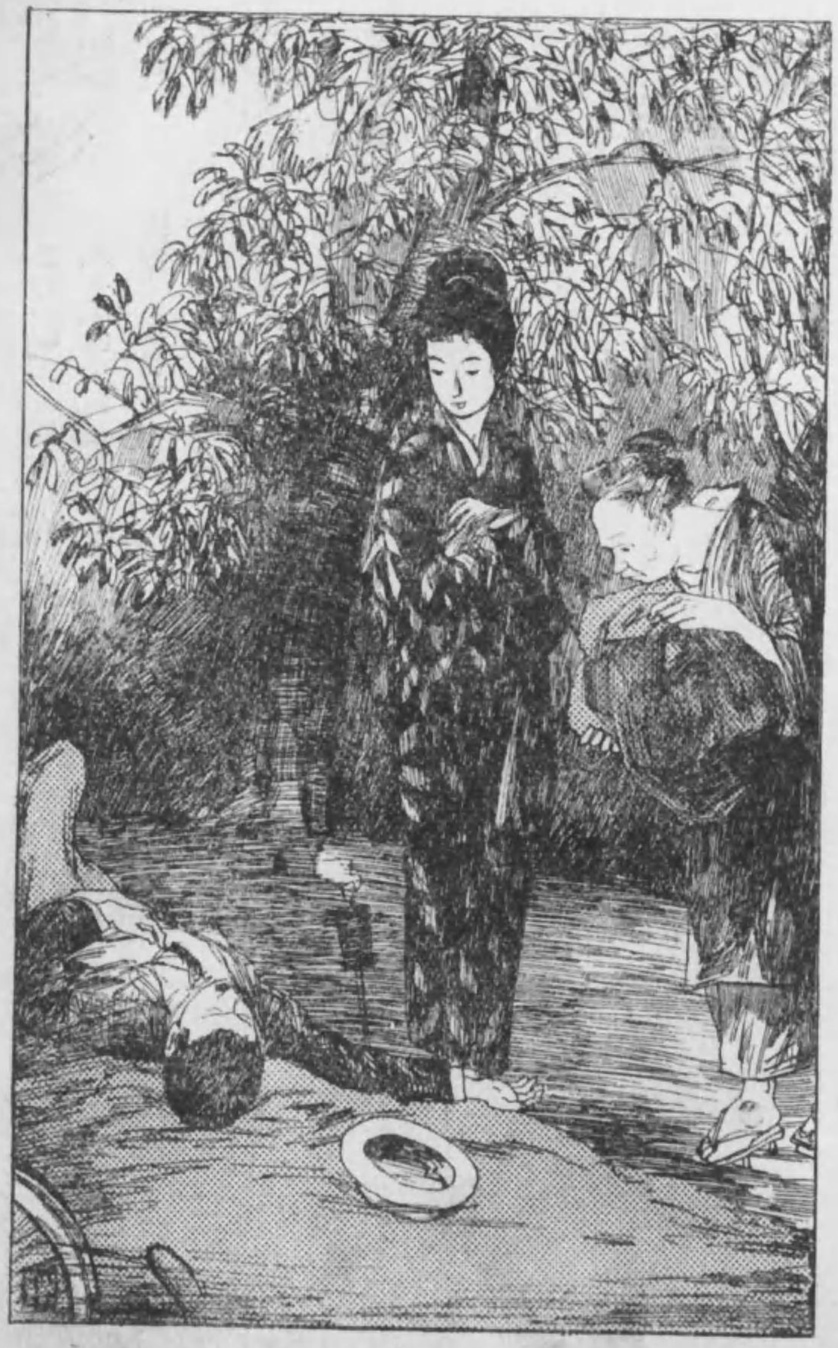
砲兵工廠の煙突から恐しい黒煙が噴き出して半天に渦巻いた、と次の小さな煙突、中位の煙突から眞白い煙がへら〳〵と昇つた、さうして一齊に笛を鳴らした。笛は暫らく止まなかつた、其の聲は眠れる町々の屋根の上を渡り、高臺の樹木を搖り、親しげに漏るゝ灯影の窓を訪れ、榎の社を過り、薄暗い蕎麥屋の行燈にも届いた。

戰爭は今滿洲の野で酣であらう、砲兵工廠は晝夜兼行で兵器彈藥を造つて居る、全市民は各〻戰爭を氣遣ひながら不安の夢を懷いて眠つて居る。而も外國からの惡思想が此の靜かな町にも訪れて居る、其れはあの汽笛の音の樣に……黒い煙の樣に。

敬三は感極まつて泣きたくなつた。

『さあ行かう』

彼は自轉車に乘つた、彼は醉うて居ない積であつたが、どう路を誤つたか、元の河岸へ出た、路普請の處々に四角な硝子張のカンテラが置かれてあつた、彼は灯を便りに車を進めた。車は見る見る小高き盛り泥の上に上つた、はつと思ふ間もない、横倒しに倒れて自轉車は河の方へ身體は泥の中へ、其の儘何にも解らない。



『あら、御母さん恐いわ』

中形の浴衣に星影を肌寒く兩袖を搔き合せて首筋の細々とした撫肩の娘がひたと母に寄り添うて、カンテラの下に眠つてる敬三を指さした。

『犬だらうよ』

母は娘より身丈が低い、大きな風呂敷包を抱へて、ほら〳〵と亂れた髪の毛を搔き上げた。

『さうぢやないわよ、人だわ』

『あゝ酔拂ひだ、そら自轉車が彼處にある』

『暗いから泥の山に乘り上げたのよ、可愛さうだわ』

『起してあげようか』

『でも恐いわ』

『行きませう』

母は娘の手を引いた。

『でも御母さん』

娘は踏み戻つて又言つた。

『洋服の方よ』

二人は敬三の傍へ寄つた。

『もし〳〵』

母は五六尺離れて聲を掛けた、其の背後から娘も覗く、いざと言つたら逃げ出す樣に前へのし掛つて後足に力を入れる。

『もし〳〵』

娘も聲を添へた。夢心地に敬三は其れを聞いた。彼は起き上らうとしたが其れが出來なかつた。

『あら生きてるのよ』と娘が言つた。

『もし〳〵』

母は次第に近づいた。

敬三は誰かゞ自分を扶け起してくれた事を知つた、其れは女である事も知つた、だが其の後どういふ風に歩いたかは知らなかつた、彼は夢の中に子供の聲を聞いた。

『小母さん、蜜柑水をおくんな』

『あいよ』と老女の聲。

『一錢のメンコをおくんな』

『あいよ』

敬三は目を覺ました、自分は確かに蚊帳の中に寢て居る。

『はてな』

急に起き上ると二つの袂がぶらりと長い。

『やあ、女の着物だ』

洋服は脱がされて、中形の秋草模様、桔梗と女郎花が媚かしく膝に掛る。

『どうしたんだらう』

彼は呆れ返つた、蚊帳の中から箪笥が見える、箪笥の上に棚があつて佛様の様なものが載せてある、反對の方面には三尺の置床、其處に兩陛下の御眞影の額が掛けられ、其の下に一枚の小型の寫眞が臺の上に乘せられてある。

背後は高窓で、薄い光が射すが、前方は長火鉢の上から店が見える、店の柱には紙鳶や紙の假面、ブリキの玩具、金米糖入の壜などが吊られてある。

『駄菓子屋だ』

恁う思つたものゝ、彼はどうしてこんな處へ來たかは何等の記憶もなかつた。彼は全く耻かしさと氣の毒さに蚊帳を出る事も出來なかつた。

『起きようか』

起きて何と挨拶をしよう、交番所で一夜を明したり、新聞社で綴込を着て寢た事は珍しくないが、見ず知らずの他人の家へ寢た事は生れて初めてゞある。

『どうも、此方から聲を掛けるのは體裁が惡い、早く誰かゞ來てくれゝば可い』

恁う考へた、と、彼は横合の襖がキイと音したのを聞いた、不圖振返ると唐獅子の模様のある帶がちらと見えた、和かに嫋やかな腰から下は若い女らしい。敬三は電氣に觸れた様にパッと再び寢轉んだ。

『お母さん』

若い娘の聲がした。

『御目ざめらしいわ』

『さうかえ』

二人は何やら囁いた。

『いやだわ』と娘は笑聲で言つた。母親も笑つた。敬三は滿身の勇を鼓して蚊帳を出た。

『おや、まあ』

二人は此方を向いた、娘はさつと顔を染めた。

『どうも實に……どうも……』

敬三は言葉が出なかつた。

『いゝえ、どう致しまして……』

母親は如才なく昨夜の顚末を言つた、さうして『私の倅も始終恁んな事がありましてね』と言つた。

『只今戰地に居りましてね、屹度皆さんに御世話をかけてる事でせう……さう思ひますとね……』

此の話を聞く間に娘はさつさと蚊帳を外して床を片付け、奇麗に掃除して縁側の雨戸を開けた、日の光がさつと其處から射し込んだ、軒には竿に通して敬三の上衣と洋袴が干されてある。

『もう可いの？』と母が言つた。

『こちらへ』

娘は箒と采配を捨てゝ敬三の前に坐つた。

『お早うございます』

『いや……どうも……實に』

敬三はひどく恐縮して言つた。彼は初めて娘の顏を見た。顏色は少し青いが其れは朝に起きたての女にはありがちな事で、髪は黑々と豐かで眼が涼しく瓜實顏の未だ水々とした生娘である。

『昨夜は夜勤があつたもんですから娘も此の通り取亂しまして』と母親が言つた。

夜勤！　其れは砲兵工廠の事だと敬三は早くも察した。

いかにも貧しげな母子の生活、母は駄菓子を賣り娘は女工となり、さうして息子は戰地にある、敬三は座敷へ移つてから恁う考へながら置床を見やつた、騎兵服を着た凛々しい姿の寫眞。

『やあ騎兵でいらつしやるんですか』

『はい、近衛騎兵……軍曹でございますよ』

『近衛騎兵？　何といふ御名前で？』

『工藤と申します、工藤三吉……』

『工藤三吉……軍曹ですね』

『はい』

『ぢや淺見の知つてる工藤軍曹だ』

『淺見さんを御存じでいらつしやいますか』

母子の眼が輝いた。

『僕の親友です、淺見の手紙に工藤軍曹々々とありますから……』

『まあ』

お夏は凝と敬三を見詰めた。

小南子爵家

自轉車で失敗したので敬三は又しても小南を訪ふ機會を失つた。小南とは語らねばならぬ要件が澤山積つて居る、其れだけに彼はどうせ行くなら宿りがけにしようといふ肚がある。ところが夜分になると必ず何處かで一盞を傾ける。其のために一日々々と延びてしまふ。

『お前、小南さんへ行つてあげなきや不可なくないんぢやない？』

母の幹子は折り〳〵恁う言つた。幹子は敬三の親友の中でも最も小南と一郎を尊敬もし親愛もし、我が子が此の二人の良友を有つて居る事を何よりの喜びとして居る。小南と節子の相愛に就いても一番深き同情を寄せたのは幹子であつた。節子が栗津家へ嫁入した時に彼女は二三日眼を泣き腫らして居た。

『小南さんが可愛さうだ。あの方は眞面目な方だから』幹子は恁う言ひ續けた。

『なあに何でもありませんよ。多寡が女の事です。天下に美人は幾らもあります。小南は失戀する樣な男ぢやありません』

敬三が恁う言ふと幹子はむきになつて怒り出す。

『お前の樣に藝者遊びをする樣な者はさうかも知れないが、小南さんの樣な眞面目な方は……』

母の鋒先が鋭くなるので敬三は毎も逃げ出す。

實際母から催促されるまでもなく敬三は毎日々々小南の事を憶うて胸を痛めるのであつた。節子の一件があつてから二三度しみ〳〵と語る積で小南を訪ねた、小南もやつて來た。二人は長い間顏を向き合つて居ながら一度も節子の事に就いては語らなかつた。胸の痛みに觸れる事も觸れられる事も互に厭なのである。其れだけ小南の全生活に喰ひ込んだ此の問題を輕々しく語つたり、安慣な同情の言葉で慰め合ふ事を好まなかつた。

だがどうしても行かねばならぬ事が出來た。其れは久し振で戰地の淺見一郎から手紙が來たからである。負傷した一郎は野戰病院で療養中である。彼は妹の結婚の件に就いては何にも書いてなかつた。

『僕は負傷したが貫通銃創なので大した事はない。そこで僕は平癒次第再び戰役に就くか、但しは一度東京へ歸つて見る必要があるか、君の意見を訊きたい』

言ふまでもなくこれには深い意味があるのだと敬三は思つた。一郎は我が妹――我が父母から受けた親友の胸の傷に就いて自分も亦責任があると信じて居るのだ。

朝から行かうと思つたのが遂に午後になり二時頃に漸く家を出た。彼は少しばかりの禮物を持つて駄菓子屋の工藤一家を訪ね、過日の御禮を濟まさうと思つた。駄菓子屋の老母は機嫌よく彼を迎

へた。彼女は遼陽の戰に息子の三吉が哥薩克兵を驅け散らして微傷も受けず、中隊長に賞められたといふ手紙を敬三に見せた。手紙は昨日到着したのだが封筒はもう皺だらけになつて居た。彼女は嬉しさの餘り近所へ見せ廻つたのであつた。

『御蔭樣でねえ貴方、馬をね、自分の馬が鐵砲でやられたから、ロスケの馬を奪つて其れに騎つて斬り廻つたんですつて、ロスケの馬でも日本兵が騎るとなか〳〵能く働くものだつてね。どうして どうして馬だつて畜生だつて日本人の言ふ事は肯きます。彼もね、嬉しかつたと見えて此の手紙を直ぐ書いてよこしたんでせう。何しろ今朝からも近所の人達が五人も六人もやつて來て手紙を見せてくれ〳〵といふんで、私もまあ彼の御蔭でどんなに肩身が廣いか……』

懷から鼻紙を出して、涙を拭き、水洟を拭きする。

『娘もね、今日は一日休んで八幡樣へ御禮詣りに行けと言ひましたけれども、兄さんが戰地で働いてゐるんだから私が一日でも樂をしては兄さんに濟まない。御詣りは晩にしても神樣が何とも仰有りはなさりますまいと恁う言つてね、今朝御役所へ出て參りましたよ』

敬三は匆々にして其處を切り上げた。

大日坂を自轉車で登り通したので彼は額にも背中にも汗を搔いた。小南の書齋に入つた時も未だ呼吸が定まらなかつた。

『やあ』

『やあ』

二人は同じ聲を出して顏を見合つた。ほんの一瞬間ではあるが敬三は小南の樣子がしつかりと落着いて平素に恢復したのを見て取つた。

『君、失敬するよ』

敬三は上着を脫いだ。

『此處が可い、冷い風が來るから』

小南は白い紗の窓掛を開いて其處に椅子を薦めた。彼は敬三の顏を見るとどうしても微笑せずには居られない性分であつた。眞黑な漆の樣に濃い五分刈の頭、太くはつきりした眉、長い髭、其の下に燃ゆる樣な赤い唇、其處から每も無鐵砲で單純で亂暴で其の代りに威勢の好い言葉が混々として出る。小南には不思議な程其れが好きであつた。彼は敬三が大酒飲みであり、藝者遊びもするし、喧嘩ばかりして居る事を充分に知つて居るが、其れは敬三の缺點でも何でもないと思つて居る。他人が恁ういふ不品行を働くなら許しがたいが、敬三だから構はないといふ寧ろ依怙贔負に近い解釋があつた。冷靜で沈着で溫厚で公平な小南が、敬三の事だといふと、盲目になると彼の友人達が評した程、其れ程彼は敬三を愛した。

どういふわけか、敬三も小南と一郎に對しては盲目であつた。年齢から言ふと小南は敬三より一つ年下であるが、敬三は毎も兄の樣に思つて居た。身丈が人並多れて高く、額が廣く眼が大きく長く近眼鏡をかけて、鼻は眞直に高く口元が締まつて居る。敬三は恁う毎も人に言ふ。

『上品で威嚴があつて優しく、理智と感情のこんもりとした蘊蓄が仄かに見えて、あんな美男子は日本にない。美男子といふと失禮に當る、彼は偉男子だ』

此の評も誇張かも知れぬが、併し敬三の眼にはさう映つて居るのであつた。

『どうだい、忙しいか』

小南は恁うにこやかに言つた。

『うむ、忙しいよ、いや忙しくない』

極めて辻褄の合はない返答であつたが、さういふ事に慣れた小南は只微笑を續けて居た。

『ところでね、淺見から手紙が來てね』

敬三はすら〳〵と言つた。實は淺見の事を言ふと節子を聯想させる、其れを恐れたのであつたが、案外無造作に口火を切る事が出來たので敬三は非常に氣安さを感じた。

『僕の處へも來たよ』と小南は言つた。

『さうか、此方へ來ると言つて來たらう』

『そんな事は書いてないが、負傷は輕かつたさうだね』

『うん、可かつたよ』

『左の肺の五分ばかり上の處だつてね、驚くぢやないか』

『うむ、五分ばかり？』

敬三はどきんと胸を打たれて肩を搖つた。

『危かつたなあ』

『うむ、天運だね』

小南も眼を据ゑて動かなかつた。

『其れで、君への手紙は？』

『其れはねえ君』

小南は卓子の抽斗を拔かうとしたが急に手を引いた。

『後にしようね、君、今日はゆつくりしても可いだらう』

『うむ、宿まつても可いよ。だが氣になるから手紙を見せてくれ』

『うむ』

小南は猶躊躇して立上つたが再び椅子に戻つた。此の時隣の室の扉がさつと開いた、と思ふと鐵

砲玉の樣に小南の小さい妹の桃子が飛んで來た。桃子は今年十二歳である。彼女は突如敬三の前に立つた。

『私ね、今、深呼吸をして居たのよ』

彼女は髪を眞中から分けて、編み合せ長く背後に垂れて居た。其れは元祿袖の單衣を着た背中の中央ほどに居いて居た。

『小柴さんに御挨拶をしないの？　桃子さん』と小南は微笑して言つた。

『だつて』と桃子は笑つて居る。

『何がだつてなの』

『變ですもの』

『何が』

『小柴さんは御行儀が惡いんですもの』

『やられたッ』

敬三は大きな聲で叫んだ。

『ほら、あんな大きな聲を出して』と桃子が言つた。其れから彼女は深呼吸の話をし出した。學校の先生に勸められて深呼吸をしてから今日で五日になるが大變に身體の工合が可いと言つた。其れ

に對して敬三は桃子がめき〳〵と肥つたのは其のためだと言ひ、一ケ月に一貫目づつ殖えるから一年に十二貫目づつ殖える。五年の後には象の樣になると言つた。桃子は象になると困ると言ふ。敬三は象になると可いといふ。二人は暫らく口論した。

小南は默つて二人の口論を聽いて居た。彼は敬三がどうして恁う陽氣で暢氣で子供等に好かれるのだらうと不思議に思つた。彼には大きい妹環がある。又幼い頃から一緒に育つた親戚の娘澄江がある。其等に對しても自分は餘りに冷靜過ぎる事を折り〳〵自覺する事がある。然るに敬三は環や澄江に對しても兄妹の如く親密である。むきになつて議論したり、怒つたり泣いたりする事もある代りにどんな秘密までも打明けて語り合つたりする。

『幸福な男だ』

彼は恁う思つた。桃子は散々敬三と巫山戯散らした上で、再び鐵砲玉の如く飛んで行つた。

彼女は直ぐ姉の室へ行つて敬三が來て居る事を報告し、其れから次に母の室へ行つたが母が見えないので勝手の方へ行つた。其處に母の久子夫人が肥つた身體をどつしりと据ゑて甘藍の切り方を女中に敎へて居た。

『御母さま、小柴さんがいらつしてるわよ』

母は答へなかつた。

『ねえ御母さま、小柴さんが……』

『さうかえ』

母は冷やかに言つてきり女中に向つて叱り付けた。

『不可ません。甘藍はそんなに葉を拐るものぢやありません』

母の機嫌が惡いと見て取つた桃子は其の儘庭へ飛出して犬小舍の方へ行つた。

小南子爵夫人久子の機嫌買ひは有名なものである。一日に幾度となく機嫌が變る。好い時には陽氣で溫か味があつて滑稽な事が好きで能く娘共や召使共を笑はせるが、惡い時には酷く急き込んで人を叱り付ける。特に少し取込んだ用事のある時、縱令ば旅立ちの時とか、御正月の元日とか、來客が多くある時には此の急き込みが烈しい。詰り氣が引締れば機嫌が惡くなるのである。此の日はいろ〳〵な事が一度に落合つた。第一には此の家の規定として四時には一同で御茶を喫む事になつて居る。第二には明日華族會館で祝捷賣市をやる事になつて居るので其の服裝の支度をせねばならぬ。第三には尻の長さうな御客が三人も見えてるので晩餐の準備をせねばならぬ。三つの事が重なつてるために彼女は只夢中に忙しさを感ずるのであつた。元來華族の身分であるから、臺所は女中に、服裝は娘共に一任すれば可いのだが、彼女の眼から見ると、さういふわけには行かぬ。どれも〳〵役に立たずで自分が一々指圖しなければ何にも出來ぬ樣に見える。そこで彼女は臺所へ行つては女中を叱り又娘共の室へ行つては、口八釜しく言はなければならない。

甘藍の切方を敎へてる中に彼女は娘の服裝が氣になつた。で其の肥大な身體をえつちらおつちら運んで室へ行くと其處には帶やら長襦袢やら友禪、お召、紋羽二重、五花七彩入亂れて一ぱいに散らかつてる中に娘の瓊と十三歲の時から引取つて育てた親戚の娘の澄江とが途方に暮れて坐つて居る。

『襟を付け替へましたか』と久子夫人が言つた。

『いゝえ未だです』と澄江が言つた。『なぜ私の言ふ通りにしないの？　それぢや仕樣がありませんね』

『だつて御母さまは直き又氣が變るんですもの』

瓊が言つた。

『そんな事を言ふなら私知りませんよ』

『私が付け直します』と澄江が言つた。

『ぢや私もするわ』と瓊も言つた。

『其れで可いから、澄江さん、御茶の支度をして頂戴』と夫人が言ふ。

澄江は起つて勝手の方へ行つた。と夫人は又呼び戻した。

『澄江さん、袖丈けを直して下さい』

恁う言つて彼女は再び起ち上つて臺所の方へ行つた。

環と澄江は同じ年の十八歳である。環は母に似て肉付も豐かで瓜實顏で丁度桃の花や海棠の樣に艶やかな光が一ぱいに輝いて居る。無論色の白い故もあらうが、其の涼しい目元と無邪氣な口元は矢張り華族らしい上品さがある所以であらう。其れと比べると澄江は細りした優形で、長い睫毛、黑い髮、柔かな撫肩、其れだけでも何となく控へ目がちな肅しやかな風に見える。

澄江はどんな人の娘であるかは、此の家庭でも精しく知つて居る人が少い。彼女は小南子爵の從兄弟に當る北島男爵の妾腹の娘である。男爵と言つても京都の公卿華族の岐れで一生不自由勝に終つたので男爵が死んでから澄江の母は澄江を養育する事が出來なくなり遂に或る商人の妻となつた。其れを見兼ねて小南子爵は澄江を引取つた。

『可愛さうな子、氣の毒な子、私が御母さんになり代つて御世話しませう』

久子夫人は同情の涙を以て澄江を養育した。だが彼女は折り〳〵自然に浮び來る感情と戰はねばならなかつた。環と澄江に同じものを着せ同じ待遇を與へようと努むる半面に於て彼女はどうしても公平になり得ないのであつた。

環は子爵家の令孃だけに世間の事は何にも知らずに極めてのんびりと鷹揚に育つたが、澄江は十三の年まで世波の起伏に育つただけに實際の事務に長けて居た。彼女は僅かばかりの紙類に至る

までも儉しやかに處理した。

のんびりとして居る環の方が華族らしくて可い樣に思はれると同時に、思慮分別がある澄江の方が人妻となつてから幸福の樣にも思はれる。出入の人々は毎も恁ういふ。

『お二人とも御美しくていらつしやいますこと』

其れを聞くと久子は毎も暗い氣持になる。

『あの妾腹の子と同じ樣に見られて堪るものか』

恁う思ふと同時に其んな事を思うたのが我ながら淺間しくなる。

澄江の方が何をさせても役に立つので自然實務的の事は澄江に命ずる事になる。着物の整理、細細した物品の取片付、來客への應對、これ等は澄江の負擔となつた。さうして澄江は此の家になくてはならぬ主婦代理の樣な重い役目の人となつた。

久子の考では明日の賣市に於て環に滿艦飾の洋服を着せ、澄江に文金高島田の振袖を着せてやりたいのであつた。賣市の定めでは祝捷の事だからどんなに立派な服裝や滑稽な趣向でも構はないのである。

夫人の考案は至極當を得たものであつた。艶麗な環には洋裝が可く、幽婉な澄江には和裝が可い。だが環は反對した。彼女は澄江と二人で同し看護婦の服裝にしようといふのであつた。

『看護婦は不可ません』と夫人は反對した。數多の貴公子や、息子の嫁を捜し廻る親達が集まつて來る賣市は一面に於て結婚の運命を定むる大切な場所である。なるべく目立つ樣になるべく他を壓倒する樣に趣向を凝らさねばならぬのである。

『其れぢや二人とも昔の振袖にするわ』と環は母に讓歩した。環としては自分だけを主として澄江と差別を付ける樣な水臭い事は嫌なのである。

『其れが可いでせう』

久子は其れに贊成した。話は決まつた、が彼女は臺所へ引退つてから又考へ直した。

『文金の高島田に結ふと、環の方が丸顏だから澄江さんに負けるかも知らん』

恁う思つて彼女は其れを訂正すべく又々談判を開いた。

『いやねえ御母樣、猫の眼みたいにぐる〳〵變るんですもの』と環は呆れて笑ひ出した。

『だつてお前は洋裝の方が可いよ』

『一遍決めた事は變つこなしよ御母さま、私澄江さんと同じにするのが好きなのよ』

『其れぢやさうなさい』

夫人は臺所へ引退つた。

『又何とか言つて來るわ』と環は笑つた。

『澄江さん』

直ぐ夫人の聲が臺所の方から聞える。

『ほらね』

環は氣の毒さうに言つた。澄江が出て行つた後で環は獨り友禪の長襦袢を膝に手繰り寄せた。其れには金絲の繡のある襟が付いて居た。彼女は其れを解かうとしたが膝が痛いので足を崩した。彼女は裁縫が嫌ひなのである。無論澄江が傍に居なければどうして可いのか解らない。

澄江ははあ〳〵息を切らしながら入つて來た。

『何なの？』

『ピアノが埃だらけになつてますから……』

『いやな御母さま！　着物で負けたからピアノで敵を打つたのよ』と環はけら〳〵笑つて針路に絲を通さうとして片眼を小さく片眼を大きくした。

『可いわ環さん、私がするから』

澄江は恁う言つて坐つた。と直ぐ又母の聲。

『澄江さん』

澄江が出て行つたが直ぐ歸つて來た。

『どうしたの？』

『鸚鵡に餌をやつて來たのよ』

『そんな事で貴方を呼んだの？』

『えい』

澄江は漸と坐り込んで矢絣お召の腰揚を解く事が出來た。二人は明日の賣市に誰がどんな服裝をして來るかなどに就いて語つた。其れから二人は織るが如き紳士淑女の賑やかな動搖めきを想ひ浮べ、賣店に竝ぶ若き御友達の美しい髪や媚めく聲々を想ひ浮べ、其等の人波の中に文金高島田振袖姿の自分を想ひ浮べて小さな胸を轟かした。

『澄江さん』

又もや夫人の聲！

『いやね、私が行くわ』

環は素早く起ち上つたかと思ふと、帶や襦袢をずる〳〵足に曳きずつて出て行つた。と直ぐ引返して言つた。

『御茶ですつて澄江さん』

露臺の上に蔽ひかぶさつた藤棚の下に三つの卓子を置き、其の中央に小南子爵が三人の客と共に御茶を飲んで居た。客の中の一人は胡麻鹽頭の色の黑い男爵議員で、人々は彼を稱して悲憤居士といふ。實際此の男爵は年百年中政府の攻擊、文敎の漫罵、時流の罵倒ばかりして居るのであつた。無論いつでも慷慨悲憤して居る事が政治家の本色の樣に世間も思つて居た。彼は今大阪の百三十銀行の破綻事件に就いて語つた。

『軍國多事の際とはいふものゝ苟くも國家の公金を一銀行の救助に支出するといふ事は怪しからん事ぢや。忠良なる國民は此の大戰の終局を見るまでは臥薪嘗膽、いかなる負擔をも辭せないのだ。だが六百萬圓！　其れは內閣が松方某井上某の情實に驅られて不法の支出をなした其の事はぢや、其の事は卽ち……』

小南子爵は身丈高く瘠せて卓子の上に帶までが見えて居た。彼の若かりし時には今の浩と同じ顏であつたらうと思はれるほど凡ての點が浩に似て居る。彼は悲憤男爵が昂奮すればする程冷靜になり左りとて煩さうに話の腰を折らうともせずに極めて嚴肅に此の平凡な悲憤を聽いて居た。

男爵は續ける。

『所謂元老なるものがぢや、元老なるものは國家の金を我がものゝ如く思つて居る。山城屋和助の一件はどうぢや。山城屋に金を貸したのと、百三十銀行に金を貸したのと同一筆法ぢや、然るに彼は事覺れて切腹した。これはどうぢや、これは……これは……春木は同じ事を二度繰返して而も恬

然として恥ぢないのか。どうぢや、うむ？　どうぢや』

悲憤男爵は我と我が言葉に感情を刺戟されて終りには聲が涙に詰まつてしまつた。

と此の時向ふの芝生から賑やかな笑ひ聲が聞えた。子爵は其の方に眼を放つと其處に浩と敬三、環と澄江の四人が一つの卓子を圍んで居た。青桐の二三本、若き四人の顏や胸に疎な影が動いて居る。

『此方へ來んか』と子爵は聲を掛けた。

『御邪魔でせうから』と環が言つた。

『敬して遠ざけたね』と子爵が笑つた。

敬三は今戰爭の話をして居たのであつた。彼は能辯ではないが言々句々に肺肝から澄れ出る熱氣があつた。其の上に彼は二人の令孃を笑はしたり泣かしたりする誇張的な修辭を用ひた。遼陽攻擊に於ける惡戰苦鬪を語りつゝ行く中に、二人の令孃は全く醉へるが如く沈默してしまつた。

『其れから？　小柴さん』

環は恐怖と敵愾に慄く我が胸の動悸を制するもの、如く片手を乳房の上に當て烈しい呼吸をして居た。澄江は兩肩を窄めて慄へて居る。彼女は折り〳〵浩の顏を見やつた。其れは恰ら子供が恐しい話を聞く時に母の顏を見やるのと同じ表情であつた。彼女は浩が悠然と微笑してるのを見て安心した。

『其れからよ、小柴さん』

『待て〳〵、御茶を飲む時間だけは與へてくれ給へ』

敬三は故意と勿體ぶつて御茶をがぶ〳〵飲む。二人の令孃は自烈たさうに敬三の顏を見成る。

『日が沈んで三日月が山の尖に引懸つて居る。そこで馬場聯隊は黑英臺に向つて、たッ〳〵と攻め寄せた。どうしても取らなきやならない高地だ……』

『一郎さんが其れと一緒なの？』と環は言つた。

『さあ、其れは解らない』

『あら知つていらつしやるんだわ。隱さないで話して頂戴ね。一郎さんは其處で射たれたの？』

『まあ御聞きなさい。敵は曳火彈を以てウラー〳〵と吶喊して來た。名にし負ふ世界第一の哥薩克兵、而も日本に三倍の大軍だ……』

『もう可いわ、止してね』

環は蒼白になつて言つた。

『もう少し』

『一郎さんが射たれる處だけ抜きにしてね』

と環は涙を一ぱい溜めて言つた。

『ぢや暫らく休息としよう』

敬三は紅茶をがぶ〳〵と飲んだ。澄江は何時までも恐しさに顫へて居る。

『でもねえ小柴さん』

何を思つたか環は突然恁う改まつて言つた。

『一郎さんが御歸りになるの？』

『まだ決まりません』

『御歸りになつても私平氣だわ。私會はないわ』

浩も敬三も餘りに突然な環の言葉に吃驚して眼を其の方に向けた。環の顏は朱の如く紅い。

『私ね、あの方に會ふ必要がない。私あの方は嫌です』

『何を言つてゐの？　環さん』と浩は優しい眼元に微笑を含めて言つた。

『さうぢやないの？　あの方が惡いんぢやないけれども、私節子さんが憎らしいから』

『貴方も悲憤居士になりましたね』と敬三が言つた。

『誰だつて悲憤するわ。嘘を吐くんですもの、私の御兄さまを愚弄したんですもの』

『其れは違ふよ環さん』と浩は慌てゝ遮る樣に言つた。

『違ひませんわ。一郎さんに御兄さまと結婚するつて誓つたんぢやないの？　身體は自分のものか

も知らないけれど一旦誓つた以上は靈は二人のものぢやないの？』

『氣を靜めて下さい環さん』と敬三は酷く狼狽して、『節子さんは苦んで居ます。どんなに苦んでゐるか……顏は瘠せてね、眼に力がなく、喑い〳〵口元になつて……』

『そんな事は決して申譯になりません。苦んだからつて罪は消えません。節子さんが苦めば私の御兄さまの心が少しでも慰まりますか。自分の苦みは自分で招いたものです。相手の苦みをどうしてくれるのです。私は決して此の恨みは忘れません。御兄さまが御宥しになつても私は宥しません。だから私、私は一郎さんにだつて……私は一郎さんにだつて……』

彼女ははたと唇を閉ぢた。紅かつた顏は石の如く冷く白くなつた。と彼女は兩袖を顏に當てゝすた〳〵と植込の中に入つてしまつた。澄江は直ぐ立ち上つた。

『頼むよ澄江さん』と浩が言つた。

『はい』

澄江ははつきりと答へて其の嫋やかな足を小刻みに環の後を追うた。

『驚いたね』

敬三は言つた。さうしてもう一度、

『驚いた』

彼は所謂上流の令嬢や女學生などは凡て御雛様の様なものだと思つて居た。學校や家庭にのびのびと世間の事も知らずに育つた彼女等に、恁くまで猛烈な熱情や峻嚴な判斷力があるとは思はなかつた。

『あれはねえ君、あれは一郎君に戀をしてるんだよ』

浩は悲しさうな顔をして言つた。

『さうかえ』

敬三は再び驚いた。

『其れだから苦しいんだ。僕を捨てゝ他所へ行つた節子さんの兄……詰り彼女の眼から見ると兄の敵の兄だ、其れに戀をしてる彼女は、怨みと戀との板挟に引掛つて悶えてるんだ』

浩は暫らく口を噤んだ。彼は自分の感情と妹に對する判斷とを混同せしめまいと骨を折つた。さうして又靜に言つた。

『苦しむのが本當の戀かも知らんよ』

『そんな事はないよ。戀は樂しいものだよ』

と敬三が言つた。浩は其れに答へなかつた。二人は起つて庭を歩き出した。もう日は西の方へ落ちて洋館の屋根の三角な影が芝生に劃然と印され、植込の梢だけが赤々と輝いて、百舌鳥が慌たゞ

しく啼いて過ぎた。

『其處でね君』と浩は眞直を見ながら敬三に言つた。『淺見からの手紙だがね、淺見は恁う書いてよこしたんだ。君は節子を愛してくれるか、あんな事になつても愛してくれるか、其れに依つて僕は少し考へなきやならないから遠慮なく言つてくれ、と恁うなんだ』

『詰らない事を言つてよこしたね。彼奴少しどうかしてやせんか』と敬三は言つた。

『さうぢやないよ君、これは淺見が餘程熟考した上で書いたんだと思ふよ』

『どうして……』

『僕が今でも節子さんを愛してると言つてやれば彼は喜ぶに違ひない。其れと同時に彼の取るべき手段は……』

『解つた、失敬、僕は解つたよ』

『さうだらう？　淺見は自分及び一家を犧牲にして節子さんを粟津から離緣させるかも知らん、さうなると』

『うん』

『だから僕としてはどうしても今日猶依然として彼女を愛して居るといふ返事を淺見に書けない』

『書いても可いさ。娘を賣つて僅かに維持する様な名譽や家柄は棄てる方が可いのだ。淺見の意見は其れだ』

『ぢや僕の身になつて考へてくれ給へ。僕として淺見を犧牲にしてまで節子さんを所有したいといふ事は……君……戀といふものは道德を度外じてはならないんだよ』

『さうだなあ』

『其處で僕は淺見に對して僕は最早節子さんを愛して居ないと言つてやるより他に途がないのだ。だが君、そんな事が言へるか。僕は僕の戀が破れたけれども、破れたまゝに塵も留めず、神聖に保存して置きたいんだ。僕は實際今でも愛して居る。彼女が他家へ緣付いても僕の愛には變りがないのだ。其れを君、今嘘を吐いて淺見を欺くといふ事は、縱令目的が立派であるにしても僕は虛僞を以て神聖を汚したくないんだ。破れてぼろ〳〵になつた愛でも、これが僕の唯一つの寶なんだからね』

『それもさうだなあ』

『そこで僕は何方の返答を書くかだ』

『困つたなあ』

二人は築山の裏路から亭に登つた。其處から牛込、目白の森や建物が夕靄の中に出沒して眩くもない落日が凝と橙黃色の光を雲の間に遏めて居る。

『嬶を貰ふんだな』と敬三は突然言つた。さうしてから急に其れを確かめる様にもう一度、

『嬶を貰へよ、間に合せで可い、さうすると淺見も諦める』

浩は棒でも呑んだかの様に背を反らして立ち止つた。さうして敬三の顏を呆れた様に見詰めた。

『僕がいくらでも搜すよ。可いのがあるよ。いくらでもあるよ』

『……』

『若し何なら……さうだ、おい小南！　あの澄江さんが可いぢやないか』

『おい』と浩は非常に嚴肅な顏をして言つた。

『そんな事を決してあの女にも妹にも言つちや不可ないよ。間違が起るからね』

『可し、言はない』と敬三は輕く受け流して、

『あれが不可なければ他に素敵な美人を搜すよ。請合ふよ』

『君は戀愛の意義が解らないね』と浩は悲しげに言つた。

『僕は母にもそんな事を言はれたよ』

敬三は從順に考へ込んだ。

誕生祝

遼陽を占領した喜びの醉ひが冷めきらぬ翌十月の九日、東京市は更に驚くべき歡喜に熱狂した。

『沙河の大勝利！』

戰へば必ず勝つものと決めて居るものゝ恁くまで迅速に又恁くまで完全に勝ち得た事は全く望外の望であつた。町々は國旗を掲げただけでは物足りなかつた、彼等は如何にして此の喜を表白しようかに苦んだ。神田の青物市場では急に屋根より高い綠門を造つて其れに大國旗を垂れた、國旗は餘りに大きいので其の兩端を屋根の角から綱で支へた、魚河岸では兼て準備してあるので御輿の屋臺を擔ぎ出して三味線太鼓で踊り廻つた。誰が言ふとなく、大きな丹頂の鶴が宮城の天を三週して遠くへ去つたといふ噂が傳はつたので、其れを見ようと二重橋前には何千となき群集が詰めかけた、さうして萬歳を唱へた。新聞社は競うて提灯行列を開催する。町の人々は店に引籠つて居られないので皆外へ出て當てもなく走り歩いた。

此の夜、淺見子爵家では恒子夫人の誕生祝があつた。元來夫人は軍國多事の際であり、自分も氣分が勝れないので、誕生祝には不贊成であつたのだが、子爵はどうしても肯かなかつた。彼は節子を粟津家へ嫁つてから負債は償却するし、粟津が關係して居る諸會社の平重役となつて、方々から

月給が入つて來るし、家の中は見違へる樣に奇麗になつたので、何かに付けて多くの人を招待したいのであつた。實際彼は人を招待する事が好きな性分で、どんなに貧乏した時でも來客の馳走だけは廢めなかつた。

夫人の注意でほんの心易い人達だけを招待したが、其れでも三十人許りの人が詰めかけた。敬三が入つて行つた時來客はすつかり打解けて思ひ〳〵の相手と快く話をして居た。男連は盛んに紫の煙を擧げて居る、婦人連は片隅の卓子に集まつて居る、若い婦人は若い方に集まり、老人は老人達と言つた風！

杉橋中將夫人は例の如く幡ヶ谷の行者の話をして居た、彼女は何處へ行つても行者の逸話を吹聽するので、彼女と親しい人は同じ話を二度も三度も聞かされるのであつた。

『遼陽の時にも、ちやんと御當てになりましたよ、其れに今日の沙河の事もね、確かに十月の九日だつてね』

『まあ』

老婦人達は一齊に讃歎した。

『其れにねえ貴方、此の戰爭は多分來年の春頃には御終ひになるだらうて仰有いましたよ』

『來年の春？』

聲々が起つた、其の聲の中には其れは早過るといふ心持もあり又晩過るといふ心持も含んで居た。

『でも奥様、あの行者は品行が悪いといふ噂がありますが』

遞信大臣の秘書官夫人が恁う言つた。一同は妙に沈默した。

『其れは嘘です、人の悪口です』と中將夫人は打消して『なか〳〵愛國者です』

此の時向ふの令嬢團の方に漲る樣な笑聲が起つたので一同は其の方を見やつた、紋付裾模樣、水水しい襟元を輝かした令嬢達は手を取り合つたり、肩を突き合つたりして顔を眞赤にして笑ひ崩れて居る。

『まあ』

老婦人達は令嬢達のたしなみの悪いのに呆れたのか、其れとも貰ひ笑をしたのか何れも眼を見合つて微笑した。

令嬢團は今てにをはの小母さまを圍んで八方から攻撃してるのであつた。老刀自は例のだぶだぶした股引を袴の下から露したまゝ令嬢達を叱るやうに言つて居る。

『其れは不可ません、何處の家でも血統が一番大切なものです、肺病の血統は何より恐しいものですからね』

『でも小母さま、其れでは浪子が可愛さうですわ、そんなに血統が大切なら最初に浪子を貰はなけ

れば可かつたのですわ』

酒井令嬢は恁う言つて、愛くるしい黒眼をくる〳〵と動かした。

『其れが解らなかつたからでせう』と老刀自は言つた。

『ですから不可ないんですわ、一旦結婚してから病氣が起つたからつて其れを離緣しても可い事になると私達もうつかり結婚が出來ないわ』

一番小さな身體で而も一番才氣のありさうな船水令嬢が言つた。老刀自は行詰まつて口の周圍に皺を寄せて何か言はうとしたが又默つた。

『小母さまお負けなすつたわ』

と誰かゞ言つた。

『い、え〳〵、ですから結婚は大切なものなのです、其の不如歸といふ小說は兩方の家庭を戒めたのだと思ひます、どちらも結婚前にもつと能く調べれば可かつたのです、さうでせう、節子さま』

節子は默つて人々の話を聞いて居た、彼女は只微笑した。

『さうですわ小母さま』

敬三が入つて來たのは此の時であつた、彼は誰よりも先に節子の姿を見留めた、他の令嬢達が皆腕椅子に腰を下して居るのに節子だけが立つて居た、彼女は浪に千鳥の裾模樣を綠色の絨毯に曳摺

つて居た、濃紫地に白綸子の襟は其の色白な胸元や首筋や顔に能く似合ひ、鬢を切り詰めて結つた廂髪は何となく淋しいながらに美しかつた。敬三が節子を見たのと節子が敬三を見たのと殆ど同時であつた、太い明晰した眉の下にちらと輝く涼しい眼、其れは兄妹と言ひながら毎も一郎を憶ひ出させる點であつた。疑ひもなく節子が敬三の方へ歩み寄りたかつた、が此の時敬三の傍から大きな聲が聞えた。

『やあ、小柴さん、君はどう思ふかね』

其れは畠山伯爵であつた。

『しばらくでした伯爵』と敬三は挨拶した。

『まあ掛け給へ、一體日英同盟は何の邊まで役に立つとるか』

『非常に役に立つて居ます』

『さうか、併し私の考では此の際英國がボーランドを煽動して獨立運動を起させれば露國は非常に苦むだらうと思ふよ、腹背に敵を受くる事になるからな』

『其れは御名案です、多分日本がやつてるでせう、英國の手を藉りなくとも』

『さうぢやらう、うむ、さうぢやらう、さうなくてはならぬ筈ぢや。だが頃日の新聞で見ると佛蘭西が盛んに露國を助けとる樣ぢやね』

『伯爵、佛蘭西の事は英國に一任して可からうと思ひます、英國は必ず佛蘭西を抑へ付けます』

『抑へるかね』

『大丈夫です』

『抑へるかね、どうぢや』

伯爵は横を向いた、其處に節子の舅粟津萬藏が詰らない顔をして煙草を喫かして居た。彼は伯爵に聲を掛けられて急に煙草を唇から放して言つた。

『抑へるでせう伯爵！』

其の向ふに淺見子爵が疲れ切つた顔をして椅子に凭れて居た。彼は晝からの來客で煙草を喫み過したのであつた、庭へ出て新な空氣を吸はうと思ふのだが、間斷なしに入り來る客のため其の暇もなかつた。

『御目出たう〳〵』

どや〳〵と男の客が詰めかけて來た。

『一郎君は非常なお手柄をなすつたさうで』

『いや、やつと兵隊並みの事をしたゞけで』

彼は態う答へてにや〳〵と微笑む、さうして其の度毎に一郎の其の後の經過が氣遣はしくなる。

『若し一郎が死んだのなら、今頃は私はどんな氣持だらう』

こんな事も考へて見る、さうして何とも云へぬ喜びがぞく〳〵と腹の底から湧き上るのであつた。

『なあお母さん』と彼は恒子夫人に言つた。

『一郎が無事に歸つてくれば、もう此の上の幸福はないな』

『えい、私も今さう思つて居た處です』

身體の小さい恒子夫人は腰を下す暇もないので立ち通しであつた。彼女は良人の腕椅子に片手を掛けて恁う言つた、新來の客が花束を持つて入つて來た。

『お前は疲れたらうから、少し若夫婦に代つて接待して貰はう』

伯爵は恁う言つて節子を手招ぎした。

『御用なの？　御父さま』

節子は長い袂をくる〳〵と腕に卷いて父に寄り添ひ其の顏を覗いた。

『うむ、少し御母さんと代つて御あげ、篤彌さんもな』

『えい、御母さま彼方で御休みなさいませ』

節子は恁う言つて篤彌の方を見やつた。篤彌は今中央の卓子に令孃達や老婦人達を集めて寫眞帖を披いて居た。彼は頭を奇麗に分け、燕尾服の白短衣を突き出し、細い聲を出して細やかに寫眞の

說明をする。

『これは其の……倫敦のピカデリー・サーカスです、どうです、大したものでせう、道路はまるで鏡の樣です、雨が降ると兩側の家も樹木もはつきりと道路に映るんですからね、日本の道路は畠地ですよ、靴の底に泥が付くなんて事は外國では絕對に無い事です、其れを思ふとね、神戸や横濱に住んでる外國人に對して全く耻かしい氣がしますよ』

『これは皆貴方が御寫しになりましたのですか』と誰かゞ言ふ。

『さうです、記念のために方々寫しました……これを御覽なさい、これは倫敦の巡査です、大きな身體でせう、これは地下鐵道の入口……日本では此の頃やつと電車が出來ましたが、どうです地の底を汽車が走るんです、まだ〳〵日本は彼國に及びません』

『さうでせうね』

『まあ御上手に御寫しになりました事』

節子は一寸眉を顰めた、彼女は此の晴がましい席上で良人が寫眞自慢をする事を堪らなく氣恥かしく思つた。何事に付けても篤彌は自慢する、諭、義太夫、玉突、乘馬、寫眞術、何でもやるが一つとして完全なものはない、而も當人は頗る天狗である。實際彼は洋行中に學び得たのは芝居見物、飲食店、怪しき魔窟入り、さうして寫眞機を肩に掛けて手當り次第に寫し歩いただけである。

單に其れだけではなかつた。彼は寫眞の説明をしながら絶えず其の奇麗に磨き立てた指先を寫眞帖の前に出す度に燦然と輝く指環の寶石を誇るかの樣に頁を繰るのである。さうしていかにも得意らしい聲で言ひ續ける、其の聲は氣取れば氣取るほど喉にラムネの玉でも痞へた樣な圓みを帶びるのであつた。同時に『日本ではどうも』と日本を滅茶々々に罵倒する。

淺見家の令嬢の良人であればこそ婦人達は默つて應對して居るものゝ、紳士達は皆奇妙な顔をして引退つてしまつた。

『厭な奴だ』

敬三は怎う思つた、彼は何か言つて窘めてやらうかと考へたが、其れよりも寧ろ揶揄つてやれと思つた。

『矢張り何ですな、一遍洋行して來なくちや一人前になれませんな』と彼は言つた。

『左樣々々』と篤彌は反り身になつて美しい手を揉みながら、『生活の程度が異ひますからね、日本では菜食ですが彼等では肉食ですからね』

『なるほど、熊や獅子は肉食をするから強いんですね』

『左樣々々、日本では疊に寐ますが、どうも疊に寐るのは地びたに寐る樣な氣がしますね』

『なるほど、鶴は木の枝に寐るから長生きするんでせうね』

『左樣々々、何しろ素足を露して歩くのは亞弗利加、印度の土人と日本だけですよ』

『なるほど、外を歩いた靴の儘で座敷に入る事が出來ると重寶ですね、無論犬や猫は泥足の儘家の中に入りますが、外國の犬猫は靴を穿きますかね』

『これは名言ぢや、はッ／／／／』と畠山伯爵は大きな聲で笑ひ出した。くす／／／／と笑ふ聲が隅々に起つた。篤彌は一向感じない。

『日本の飯はどうも宜しくないですな』

『さうですか、露西亞兵は大抵パンの樣ですね』

又も笑聲が起つた、敬三は何か言はうとして不圖氣が付くと向ふに節子は涙ぐんで敬三を見詰めて居た。其の眼は羞恥に曇り、恰ら揶揄ふのは止して下さいと言ふかの如く見えた。

敬三は默つた。

食事の支度が調うたと女中が報らせに來た、一同はぞろ／／と食堂へ入つた。食堂の壁紙はすつかり薔薇色に張替へられ、格子作りの天井から大きな枝條燈が垂れ、卓子には眩きばかりの花籠が竝べられてあつた。暫らく人々は席順を讓り合ふために混雜した、絹磨れのさや／／と鳴る音、肅しげな囁き、蘭麝の香ひ、黑、紫、緣の紋付や金襴の帶、裾模樣などの色彩が、いかにも豐かな幸福らしい空氣を造つた。

若い令嬢達はてにをはの小母さまの傍に陣取つた。小母さまは羹汁を飲む時に匙を向ふへ出すものか、手前へ引くべきものかを篤彌に質問した。

『向ふへ掬ふのです』と篤彌が言つた時節子は顔を眞赤にして肱を突いた。

次の料理が出た時小母さまは給仕人に日本の箸を下さいと頼んだ、若き令嬢達は胸元に腮を入れて笑ひを怺へた。

『私も頼む』と畠山伯爵は言つた。篤彌は料理の事に就いて頻りと淺見子に語つた。倫敦にはビフテーキ專門の料理屋がある事、一千七百年の葡萄酒を飲んだ事がある事、巴里には蠣の生を食はせ、蛞蝓を食はせる料理屋がある事などを語つた。

彼の父粟津萬藏は悴の博識に驚く樣な眼をして折り〳〵彼を見上げた、さうして一同が謹聽して居る樣子を見廻して日本酒をぐび〳〵と飲んで居た。節子は人々の心持を充分に察した、彼女は良人がものを言へば言ふほど輕蔑されて居る事が解つて居た。彼女は此の席上にある如何なる男よりも篤彌は劣つて居ると思つた。篤彌の低級な談話は此の位で濟めば可いが、どうかすると伊太利の美術論に亙る時がある、其れは悉く間違だらけでダニエルは獅子使ひの曲馬師であつたり、ラファイロは基督の十二使徒の一人であつたりするのである。其れが出なければ可いがと氣を揉んだ。

『伊太利へ行きました時にね』

篤彌は怎う言ひだした、節子ははつと胸を打つた、さうして篤彌の肱を突いた。篤彌は默つた。

此の時背後の扉がさつと開いて一人の騎兵が現れた。

『おやッ』

『あらッ』

『まあ』

聲々が一度に轟いた、椅子を離れる音、どや〳〵と歩み寄る音。

『おう一郎！』

淺見子爵は茫然と立つた。

『おや、どうして』

恒子夫人は涙に曇つて我が子の姿が判然と見えなかつた。二人は歩み寄つた、節子も……敬三も。

だが一郎の手は早くも畠山伯爵に占領されてしまつた、伯爵は片手を一郎の肩に掛け、片手でしつかりと一郎の手を握つた。

『やつたね、おい、能くやつてくれた、名譽だぞ、おい』

怎う言ひながら伯爵は熱い涙をほと〳〵床に落した。

『伯父さん御元氣で御目出度う』

一郎は恁う言つた、さうして早くも一同の顔を見廻して微笑した、微笑は挨拶の代りであつた。

『丁度好かつた〳〵』と淺見子は言つた。

『さあ此處へ御出』と夫人は自分の椅子を讓つた。

『御父さん只今歸りました、御母さん只今、皆さん只今！』

一郎は恁う言つて猶立つて居た。さうして節子の顔を凝と見やつた。

『御歸り遊ばせ御兄さま』と節子は言つた。一郎は其れに答へなかつた。さうして敬三の傍に腰を下した。

『能く歸つたなあ』と敬三が言つた。

『うむ』

『負傷はどうした』

『癒つたよ』

敬三は瞬きもせずに一郎の顔を見詰めた、彼は薄い髭を生やして居た、負傷のためか少し痩せて見えるが、日焼のために寧ろ引締まつた強健さを思はせた。

若き令嬢達は遼陽の戰に一騎奮戰した此の勇士に對して一種凛然たる尊敬を以て其の花やかな顏を向けた。或者は戰場の光景を想像して眉を顰め、或者は雄々しき姿に胸を轟かし或者は無事に

歸つた天祐を祝福した。凡ての視線は彼一人に注がれ、凡ての談話は彼を中心とした。

『やつたなお前、よくやつた、華族の面目がお前に依つて保たれたぞ、うむ、よくやつた』

畠山伯は同じ事を繰返し〳〵料理を口髭の間に詰め込んだ。

淺見子は餘りの嬉しさに昏惑して娘の婿を一郎に紹介する事を忘れて居た、だが篤彌は如才なく一郎の傍に歩み寄つた。

『御兄さんですか、私は粟津篤彌です』

『はあ』

一郎は冷然と椅子を離れずに言つた。

『僕は淺見一郎』

彼は恁う言つてから、次に立つて居る萬藏に對しても同じ事を言つた。

料理や酒は彼の前に運ばれた。彼は善く酒を飲み善く食つた。

『君、今夜宿つても可いだらう』と彼は敬三に言つた。

『うむ、だが君だつて御兩親といろ〳〵話があるだらうから』

『話なんかありやしない。僕は君と話したいために來たんだ』

『ぢや宿らう』

敬三は早くも彼の心を察した、同時に節子の方を見やつた、節子の顔は大理石の如く青白くなつた。彼女も亦凡てを察したのであつた。

家の外――遠くの町で潮の様な響が起つた。

『提灯行列よ』と誰かゞ言つた。

『お前は丁度可い時歸つた、沙河は占領したぞ』と畠山伯が言つた。さうして『難有い事ぢや、實に難有い事ぢや』と續けた。

『バンザアイ』

聲が次第に近くなつた、一同は悉く席を離れて露臺の方へ走つた。墨の如く暗い天に星屑が寶石を撒き散らした様に燦々して居た、行列の一隊はドット〳〵と音を立てゝ塀の外を通る、坂路に差しかゝつた一隊の提灯が植込の隙からちらり〳〵と見える。萬歳を叫ぶ群集の聲はもう嗄れきつて居た。

『日本人だなあ』

伯爵は恁う言つて兩手を擧げて萬歳に呼應した、若い令嬢達は美しい聲のありつ丈けを絞つて三呼した。室内からの電燈が彼女等の薔薇の花の様な袖口が捲くれて滑る眞白な腕をちら〳〵と照らした。

再び一同は席に復つた、そこで畠山伯の音頭で淺見子爵一家の萬歳を祝した。

『お前は疲れやしませんか』

恒子夫人は一郎の傍へ寄つて小聲で言つた、實は一郎を居室へ引退させてしみ〴〵と話して見たいのであつた。

『いゝえ些も』と一郎は言つた。さうして母の肩に窃と手を置いた、夫人はそく〳〵と肩先が痺れる様な嬉しさを感じた。彼女は果しなく昂みあげる涙を怺へ〳〵來客達には顔を背けて何か言はうとしたが、もの言へば涙がこぼれさうなので下唇を嚙んで我が子の鼻の邊を見て居た、實際人並より身丈の低い彼女の頭は人並外れて身丈の高い一郎の肩の處に漸と屆くだけであつた。

『傷の處はもう快いんですか』

『大丈夫です』

『もう痛まないの？』

母は一郎の傷口を檢分し其れが完全に癒着したのを見ない中は氣掛りなのであつた。彼女は母に心配させまい爲に一郎が嘘を言つてるのではなからうかとさへ思つた。

人々は食卓を離れて銘々談話室へ退去した、もう粟津父子などに構つてるものはない、何れも何れも一郎を取巻いた。長椅子に四人の令嬢が目白押しに腰を掛けた、今一人は其の中の一人の膝の

上に腰を掛けた。ほつちりとした星の様な眼は齊しく一郎に向けられた。

『今晩は御疲れぢやらうが、戰況を話してくれ、御母さんの御祝ひぢやからな』

畠山伯が恁う言つた時令孃達は歡聲を擧げた。

『何もありませんよ』と一郎は微笑した。

『話して頂戴な』

『ねえ、ねえ、ねえ』

美しい聲が盛んに起つた。

『强請れ〳〵』と畠山伯が令孃達に言つた。

『御願ひしても宜しうございますか』と一人の令孃がてにをはの刀自に訊いた。

『御ねだりなさい』と刀自は眞面目に言つた、皆が笑つた。

一郎に取つては砲煙彈雨の修羅場から一變して此の紅粉羅綺の樂園に轉じたのは極めて不思議な事であつた、彼は周圍の人々の顏を靜かに眺めやつて例の朴訥な談話を始めた。彼は至つて言葉に不器用であつた、が話し行く中に次第に熱氣が加はつた、砲兵戰から白兵戰、哥薩克の突擊、我が軍の退却、奇兵の奇功、正面部隊の大返し。事實だけをほち〳〵言ふのであつたが、其れは修飾された誇張の言葉よりも遙かに深い感動を與へた、令孃達は醉うた樣に音も立てなかつた、彼女等は

鳩の樣に柔かな胸に手を當てゝ刻々に迫る鼓動を抑へ、唇を結んで鼻から呼吸をして居た。

『工藤三吉といふ軍曹は不思議な奴です』

一郎は恁う言つて人々を見廻した。

『おう、お前と一緒に出發つた男だね』

『さうです、彼は自分は決して死なゝいと信じて居るのです、彼は何時でも眞先に進みます、味方が悉く死んでも彼だけは微傷も負ひません、彼は戰爭が終るまで決して死なゝいと言つてます、不思議な男もあればあるものですな』

『沙河ではどうだつたらう』

『多分無事でせう、さうして飲んでるでせう、彼は素晴らしい働をするけれども、又素晴らしく飲むもんだから、差引されて一向昇進しません』

皆は敬三の顏を見やつた、敬三は首を縮めて頭に手を當てた。

夜が更けるに伴れて人々は名殘惜さうに去つた。令孃達は母親達に叱られて澁々室を出た。明るい電燈が數限りもなき花瓔、花束、花籠に滿たされた一室を淋しく照らした。

人々が去つた後で一郎と敬三は昔ながらの書齋に引込んだ。恒子夫人は寢卷に着替へる樣にと勸めたが、一郎は何時までも騎兵服を脫がなかつた。

『さあ珈琲を飲まうね』

彼は恁う言つて敬三を安樂椅子に坐らせ、自分は室を出て珈琲を持つて來た。敬三は一郎の快活な態度の中に何か知らん重苦しい色が潜んでる事に氣が付いて居た。二人は珈琲を飲みながら沈默した。

『小南は無事かね』

一郎は恁う輕やかに言つた、が其れはいかにも故意と平氣を裝うてる風であつた。

『無事だ』

『元氣かね』

『うむ、別に變つた事もないよ』

『彼は冷靜だから外に表さないよ、だが心の中は……』

『其れも解つてるよ』

『で、節子の事に就いて？　彼は？　……』

『彼は矢張り節子さんを愛してる』

『愛してる？　えつ？　本當か？　おい本當に愛してるか』

一郎の眼は火の如く輝いた。

『節子さんが他の男と結婚した處が僕の愛に變りがないと言つてる、だが其のために今更どうの恁うのといふ事は好まん樣だよ』

『何故君はそんな事を言ふのだ』

『今更仕樣がないぢやないか』

『何故仕樣がない』

『君は節子さんを粟津から取戻して小南の處へやらうといふんだらう』

『無論だ、うむ無論さうだ、さうするのが双方の幸福だ』

『併し其れには二つの難關があるよ、まあ聞けよ』

敬三は一郎の眼を凝と見詰めて言つた、彼も亦一生懸命である。

『うむ、聞かう』

『一つは君の一家の負債だ』

『解つてるよ、俺達は素裸になる、車夫馬丁になつても虚僞の生活よりか優だ』

『併し御兩親や親戚が承知なさるまい』

『若し僕の兩親が恥を知つてるならばだ、僕の兩親が僕及び妹を愛してくれるならばだ、虚飾や門閥保護のために毎日々々良心に責められる樣な生活を棄てゝ大手を振つて外を歩ける樣にしてくれ

るのが至當だらう、僕は必ず父や母を說得して見せる』

『可し、其れは其れとして置かう、だが第二の問題だ、節子さんが既に他人と結婚したのだ、を他へ與へたのだ、其れに拘らず今更小南の腕に其の汚れた身體を任し得られるかどうか』

『其れだ、俺も其れを考へた、が一向差支がない事が解つた。泥まみれの身體を戀人に捧げて、戀人の優しい手で其の泥を洗つて貰ふのだ、其れが惡い事ではない、何でもない、小南は其の位の事は解つてる筈だ』

『君はさう思ふか』

『うむ、確信する』

ほと〳〵と扉を叩く音がした。

『御入り！』

扉が動くと節子の姿がすつきりと現れた。

『節子か、お前未だ歸らないのか』と一郎は立上つて言つた。

『えい、私今歸らうと思つて……』

節子は恁う言つたが其の顏は靑白く唇は顫へて居た。

『まあ、少し緩りして行け、小柴君と三人で話さう』

一郎は急に調子を變へてしみ〴〵と優しく言つた。節子は椅子に腰も下さなかつた。其の小柄で瘠せていぢらしい姿は一郎の胸を壓した。

『なあ節子、兄さんは何にも言ふまいね、過去は言つた處で仕方がない、なあ、お前は瘠せた、僕が出發してから三ケ月と經たない中に大變に分別臭くなつた、其れも今更言つた處で仕方のない話だからな、僕は御前に感謝してるよ、お前の手紙に書いてある通りだ、お前がお嫁に行つたのも僕が戰爭に行つたのも同じ事なのだからね、これが人間の義務だ』

『御兄さまにさう仰有られると私嬉しいわ』

『まあ御掛け、だがね節子！　義務にもいろ〳〵あるんでな、正當の義務と不正當の義務、詰り盡さなければならない義務と盡さなくとも可い義務、盡してはならない義務、義務でないものを義務だと誤解する義務……』

『御兄さま』と節子は眞直に顏を擧げて一郎を見やつた。

『解つて居ますわ』

『解つたか、そこで僕は御前を正しき義務の方へ引戻したいと思ふんだ、ねえ節子、お前は今の良人を愛してるか』

節子はよろ〳〵と動いて椅子に腰を落した。

『愛してるかね、どうだ』
『御兄さま！　なぜそんな事を御訊きになるの』
『なぜでも可い、僕に本當の事を打明けてくれ』
『御兄さま』
節子は全く石の如く血の氣がなくなつた。
『私愛して居ます』
『粟津篤彌を？　お前が？』
『愛して居ます』
『愛してる？』
『私の良人ですもの』
『間違つた義務ぢやないのか』
『いゝえ、愛して居ます』
『おい、節子！』
一郎は立つて節子の傍へ寄らうとした、其の手を拂ふ樣にして節子は扉口に走つた、さうして扉を出るや否や兩手を顏に當てゝ暗い廊下を歩いた。

父と子

私は愛して居ます！
恁う言ひきつた妹に對して一郎は何を言ひ得よう。愛して居る！　あの薄つぺらな篤彌を愛して居る！　其れは信じ得べからざる事である。夫婦の間柄は他の想像を容さない程不可思議なものがある。愚劣な男と見える篤彌でも長い月日の間には愛する樣になつたのかも知れぬ。
併しそんな事はない。涙に滲んだ手紙を戰地へ送つて萬斛の愁を訴へた節子！　月とも日とも只一人の男と思ひ定めた小南浩と添はれぬ血涙の日記！　其の情熱が恁くばかり急に冷めようとはどうしても信ぜられぬ。
信ぜられねばこそ、病後の疲を押して一氣に歸京し、父や母を諫めて彼女を小南の手に取戻さうとしたのである。
餘りの意外であつた。一郎は軍服の儘寢椅子に身體を埋めて動かなかつた。敬三はもうすつかり酒が醒めて只茫然と一郎の顏を見詰めて居る。彼は自分の意識が毫しも働かなくなつたと思つた。
一郎が何か言へば直ぐに雷同するだらうと思つた。
『どうしたんだらう』

彼は恁う言つた。一郎は肱を伸ばして莨に火を付け燐寸の棒が手を燒くまで持つたまゝ默つて居た。

『愛してるのかね』

『さうかも知らん』と一郎は言ひかけたが直ぐ其れを打消す樣に叫んだ。

『犧牲だ』

『犧牲とすれば餘りに苦しい犧牲だね』

一郎は莨を灰皿に投げ付けて言つた。

『おい飲まうか』

『明日にしよう、折角君が歸つて來たのに僕だけ君を占領してしまつては御兩親に濟まない』

『さうか、ぢや君は泊まつて行けよ』

『今夜だけは御兩親と緩り話せよ』

『いやだなあ』と一郎は立つて窓の方へ歩き出し、暗い夜の天を眺め兩手を耳の上に當てた。

『俺は親父が嫌ひになつた。濟まないとは思ふけれども親父が嫌ひになつた。娘を藝者に賣り飛ばす樣な奴は……』

聲がハタと絶えた。窓の硝子に其の顏がはつきりと映つて居る。彼は泣いて居たのであつた。

『さう言ふなよ、君が負傷したといふ號外が出た時子爵は車に乘つて帽子が飛ぶのも氣付かずに陸軍省へ……』

と敬三は優しく言つた。

『其れが何になるか、そんな愛は何だ。節子を犧牲にして……其れが……』

『止せよ、其れは君の思想問題だよ、思想と愛情とは混同しちや不可ない……あゝ誰か來た樣だ』

扉が颯と開いた。子爵と恒子夫人が現れた。

『一郎着替へたらどうぢや、寢卷を着て寛いでくれ』と子爵は近寄つて卷莨の箱に手を掛けた。

『僕は着替へたくありません』と一郎は言ひながら向き直つた。

『寢卷を持つて來ましたよ』と恒子夫人が言つた、さうして彼女は其れを擴げて一郎の背後に歩み寄つた。兵子帶はつる〳〵と敷物の上を走つた。

『兎に角、着替へてくれ、な、さうしてお前の名譽ある……其の華族の模範を示したる處の……赫赫たる處の……其の傷の痕を見せてくれ、完全に癒つたか、其れを見ない中は御母さんも私も眠られんて』

子爵は恁う言ひ終つてから體裁惡さうな眼をして敬三に言つた。『なあ小柴君、さうぢやないか』

『さうです』と敬三は老子爵の意中を酌んで言つた。子爵は猶續ける。

『貫通銃創と言つたね、背中まで抜けたんか、左の肺の上！　危い處だつた、だが丁度其處に金鵄勳章が掛けられる。負傷の痕に勳章が、……はッ〳〵〳〵、だが背中の方に、もう一つ勳章が欲しいな、可し〳〵背中の傷の痕には御母さんが勳章を掛けてくれるだらうて、はッ〳〵〳〵、なあ小柴君！』

『はい』

敬三は自分の辭し去るべき時だと思つたので別れを告げた。

『歸るか』と一郎は扉口まで追掛けて來て言つた。

『うむ、明日又來るよ』

『來てくれ、待つてるよ』

敬三は淺見家を出た。夜の色は漆の如く黑い。彼は自轉車にも乘らずに町を歩いた。混亂した悲しい情緒が胸の中に旋回した。其れは何のためであるかは解らない。極めて些細な斷片が百色眼鏡の硝子の破片の如く不統一に出沒するのである。

親と子！

互に抱き合ひたい愛情を有つて居ながら、抱き合ふ事が出來ないとは何事であるか。敬三は暫らく其れを考へた。

翌日敬三は十時頃に眼を覺まして、其れから大急ぎで食事を濟ま し直ぐに浩を訪ねた。浩の書齋は上を下への大騒ぎであつた。彼は今度又新たに一間の書架を購入れた。其れは彼の莊嚴な靜肅な書齋に極めて似合はしい岩壁な堅木造りで、大きな硝子戸が付いた獨逸風のものであつた。敬三が入つて來た時に浩は古本屋の引越の樣に左右縱横に取散らした幾千卷の書籍の中に埋まつて埃だらけになつて整理をして居た。書架を買はうといふのが彼の久しい前からの問題で其れがどうしても氣に入つたのが無いので失望して居たのであつた。今彼は漸く其れを購め得た喜びに胸は幸福に充たされて居た。

『次は？』

書籍と書籍の間に膝から下を隱して澄江は片手に額のほつれ髪を搔き上げながら吻として浩に言つた。

『これです、ゲーテの全集です、同じセレーズのがあるでせう。あゝ其れ〳〵』

浩は澄江の足元を指す。澄江は其れを今一度采配で叩いて書架の中に陳列する。彼女は銘仙の紫絣の袷を着て、羽織なしに、メリンスの帶をきちんと御太鼓に結び、赤い襦袢を十文字に掛けて居た。幼いから世間の苦勞を嘗め、十三の年に小南子爵家に引取られた彼女は何事にまれ肅しやかにものを整理する智惠があつた。彼女は浩が命ずるまゝに本を抱へて書架に列べるや否や、其の細りした

指先で本の爪先を輕く押して見て毫しでも歪みはせぬかと上へと下とを丁寧に吟味する。さうして其れが完全であると思つた時に、微笑を以て浩の方を顧みる。彼女は恁うして浩と共に同室にあり、浩の助手として働く事に壓へきれない樣な幸福を感ずるのであつた。浩が新調の書架に滿足して居ると同じく彼女も亦此の書架に滿足し、あらゆる書籍に尊敬を有ち、其の整理を無上の光榮と思ふのであつた。今朝からの勞働であるが彼女は疲れなかつた。彼女は何時までも〳〵此の仕事が形付かずに居てくれゝば可いと思つて居た。彼女の胸は益〻熱し、其の顏は紅らみ、折り〳〵浩の靜かな眼ざしを見やつては凝と沈默して其の喜びを味はつて居るのであつた。彼女は又浩の態度に堪へきれない程の尊敬を有つた、前後左右のあらゆる書籍を分類して片端から整理して行く浩の眼には書籍に對する愛着の炎が燃えて居た。彼は如何なる古ぼけた本でも、安價な本でも決して粗末にはしなかつた。彼は折り〳〵思ひ出した樣に手を差し伸ばして一冊を抽き拔き、ばら〳〵と頁を飜して二三行だけちよつと讀んで見る。さうして子供の樣な無邪氣な微笑をゆつたりと唇邊に浮べる。

『環さんは何處へ行きましたか』と浩が言つた。

『御緣側の方へいらつしやいました』

澄江ははつきりと言つて次の本を書架へ入れた。

『環さん！』と浩は大きな聲で呼んだ。

『はあい』と隣室の方で答へる。

『逃げたのか』

『いゝえ、一寸休憩よ』

『お前は休憩の方が勞働の時間より多いね』

『はゝゝゝ』と環の笑ふ聲が聞える、『いやね御兄樣、そんな事はないわ、私隨分働いてよ』

『お前としては多大の勞働だ、三十分と働いた事は生れてから今日だけだらう』

『いや、いや、いや……御兄さま、ひどいわ』

恁う言つたが環は矢張り立たうともしない。

『何をしてるんだ』と浩が言ふ。

『日向ぼつこをして居ると眠くなるわ、快い氣持よ、澄江さん此處へいらつしやい』

恁う言つてから又附加へる。

『もう可いんでせう、澄江さんだつて可哀さうだわ』

『さうだ〳〵、澄江さん御休みなさい』と浩は言つた。

『いゝえ、私は疲れやしません』と澄江は言つた。

敬三が入つて來たのは此の時である。

『やあ、大變だね』

敬三は立つたまゝ聲を掛けた。

『直き濟むから、隣の室で待つてくれ給へ』

『構はん、僕も手傳はう』

『うむやつてくれるか』

『久し振だよ、僕がこんなに澤山の本を弄るのは』

敬三は極めて眞面目に言つた。浩はチラと敬三の顏を見やつて微笑した。彼は敬三の氣持が能く解つた。學生時代には本の虫と綽名された程、貪る樣に讀書ばかりして居た敬三が、新聞記者になつてから讀書に遠ざかつてしまつた。今此の堆積した書籍の中に立つて敬三が昔の讀書人の氣持に立返つたといふ事は無理もない事だと思つた。

『羨ましいな、こんなに本があつて』

『碌なものはないよ』

『僕にはまるで馬に小判だ。獨逸語て奴は唐紙の模樣だね』

『又始まつた』

『どうしても獨逸語だけはやる氣になれないよ、……やあ、拉丁だね、これは何だ、ははあバイブルか、イエス彼等に言ひけるは、まことに〳〵汝等に告げん……』

『其れはバイブルぢやないよ、理學の本だ』

『やあ、しまつた、僕は澄江さんに僕の博學を見せようと思つたら……』

澄江は顏を眞赤にして笑ひを怺へて居た。浩は大きな聲で笑つた。

『お茶を下さいね、澄江さん』と敬三は無遠慮に言つた。彼は澄江が室を出て行くのを見送つてから力强く浩の方へ振向いた。

『おい、淺見が歸つて來たぞ』

『淺見が？』

浩は眞直に顏を上げた。

『昨夜歸つて來た』

『無事か』

『うむ。無事だ』

『身體の負傷は？』

『無事だ』

『どんな風に』

『どんな風にでも無事だ』
『もう痛みやしないか』
『しないだらう』
『再發しないか、寒くなつても』
『大丈夫だ』
『元氣か？』
『元氣だ』
『それで？……君、どんな風だ、元氣か』
『元氣だと言つたぢやないか』と敬三は笑ひ出した。浩も笑ひ出してしまつた。彼は餘りに我が態度の慌てさ加減を耻入つた。
『可かつたねえ』
大きな溜息が肩を搖つて溢れた。寢ても起きても氣に掛つて居たのは、親友淺見一郎の負傷なのである。
『ところでね、淺見が來たのは君の想像通りだ、節子さんを取戻して君に謝罪しようといふにあるらしい。そこで昨夜彼は僕の面前で節子さんに質問した』

『君！』と浩は手を擧げて制める樣に言つた。彼は何となく大きな暗い影が身に迫つた樣に感じたので。
『まあ聞けよ、僕としては君に言はずに居られないからやつて來たのだ。節子さんに恁う訊いた。お前は良人の粟津篤彌をどう思ふかと』
『さうか』
浩は胸の轟きを押靜めるもの、如く、片膝にカントの一冊を突張つて眼を伏せて身動もしない。敬三は續ける。
『するとね、節子さんは恁う言つた。私は良人を愛して居ます』
浩は睫毛をぱちりと動かしたが直ぐ元の寂寞に復つた。
『愛してると言ふんだよ、其れは君……どうしても嘘としきや思へない、思へないがどうする事も出來ない。淺見は呆れて何にも言はなかつた、言ひやうが無いぢやないか、そこでだね』
『待つてくれ』と浩はカントをぱたりと床に落して言つた。
『俺達は今何の話をして居たのだ。其れが俺達の考へべき事ぢやない、決して他人の生活に觸つてはならないのだ、思うても不可ないのだ、淺見が何を考へようと、其れが僕の身に關聯した問題だつたら僕としては斷る、さうぢやないか、僕達は觸れてはならない事に觸れようとして居るのだ』

『君としてはさうだ、其れが正しい考だ、だが僕としては節子さんが恁ういふ返事をしたのを見て益〻彼女の苦衷を察しないわけにはいかないのだ』

浩は再び沈默した、さうして大きな手で自分の額の隅をむずと摑んだ。何か言ふかと思へば何にも言はずに膝の下の本に眼を落して居る。

長い沈默が續いた。

『其れで……淺見は？』

浩は恁う言ひかけたが、見る〳〵顏が蒼白になつた。彼は非常な勢で立上つた。

『おい行かう』

『何處へ』

『淺見の處へ行かう』

『若し節子さんが居ると工合が惡いぜ、君と顏を合せると……』

『そんな事は小さな問題だ、おい、淺見がどんな事を考へたか知れやしない、おい、彼は屹度……彼は……おい、淺見の身になつて見ろ、板挾みだ、自分から火の中へ飛び込んで來た樣なものだ。彼の取るべき手段は何か、これが彼の滅亡だぞ』

『うむ』

敬三は凝と考へた、其れは全く自分の考も及ばぬ事であつた。いかにも一郎の立場は絶體絶命である。妹を粟津家から取戻す事は最早絶望である。縱令心の底ではどんなに良人を嫌つて居るにせよ、兄に向つて明かに良人を愛して居ると言ひ切つた妹を强ひて離緣させべき理由を有たない。左りとて一郎自身が小南浩に誓つた言葉は消え去るべくもない。妹を貰つてくれ、妹が君を愛してゐる、此の言葉に對して一郎の負ふべき責任は何か。

『行かう、早く行かう』

冷靜な浩が恁くまで慌てたのを見た事はない。

『行かう』

二人は書籍の間を歩き拔けようとした。途端に其處に御茶を持つて立つて居る澄江を見た。彼女は談話の途中に來て入る事もならず、出る事もならず、狼狽しきつて而も立竦んで居たのである。

『お茶は要りません、出て行くから』と浩は澄江に言つた。

『僕が頂戴します』と敬三は茶碗を取つて立ちながら一口に飲んだ。

『何處へいらつしやるの？』

隣室から瓊が跳んで來た。彼女は日向ぼこりで顏を林檎の如く染めて居た。其の豐熟した肉體と大きな眼と黑い髮と白い顏は、恰ら此の室をぱつと明るくする光の樣に見えた。

『淺見が歸つて來ましたよ、瓊さん』と敬三は言つた。

『さうですつてね、私皆聞いてましたわ、其れで淺見さんの處へいらつしやるの？』

『さうだ』と浩は言つた。

『御止しなすつて頂戴』と瓊はひどく昂奮して、『あんな家へ行くの御止しなすつて頂戴ね、御兄さまはどんなに侮辱されたか其れを御考へになつたら、いくら親友だからつて、あんな人の家へ……』

『そんな事を言ふものぢやありません』と浩は諭す樣に言つた。『淺見家の人達が僕の頭から泥を浴びせようと、一郎君だけは僕の親友だ』

『御兄さまは强いわねえ』

瓊はくるりと身體を廻して背後を向けた。其れと竝んで御茶盆を持つた澄江は凍着いた樣に立つて居た。

浩と敬三が淺見家へ行つたのは十二時頃であつた。二人が直ぐ例の書齋へ通された。其處に現れた不思議な光景！　老子爵はぐつたり頭を垂れて寢椅子に埋まつて居ると、夫人は泣き腫らした眼に手巾を當てゝ居る。

『一郎はなあ小柴君』と子爵は力なく言つた。『又戰地へ行きましたよ』

『行きましたか』と敬三は吃驚して浩と眼を見合つた。

『夢の樣です、昨夜來たのは幽靈ぢやないかと思ひます』と夫人は言つた。

子爵はもう此の世の望がなくなつた人の樣に落膽して、今朝突然一郎が陸軍省へ行つて再役の許可を取つた事や、其れから家へ歸つて初めて再役の話をした事や、どういふわけで再役をするかと詰問しても其れに就いては何にも答へなかつた事、見送は一切止めて貰ひたいと言つた事などを語つた。

此の話をする間にも子爵は幾度となく絶句してはハンケチを當てゝ居る。

敬三は今更の如く不思議に思つた。

子爵は浩には氣が付かないものゝ如くであつた。氣付いて居たにしろ、浩とはどんな關係であるかを忘れてしまつたらしい。彼は浩を只一郎の親友として記憶して居るのであらう。

二人は淺見家を出た。

『多分……こんな事になるだらうと思つたから僕が大急ぎでやつて來たんだ』と浩は言つた。

『僕の智惠が足りなかつた』と敬三は言つた。

『萬一したら淺見は停車場に居るかも知らんよ』と浩は言つた。

『どうしてだ』

『僕はどうしても淺見に會はなきやならん。淺見も僕に會はなきやならん、其れは双方で知つて居るのだ』

『行つて見よう』

當にもならぬ事を當にして二人は新橋停車場へ急いだ。停車場では今消魂しく鈴が鳴つて居た。乘客は恰ら火事場の如く我先にと改札口を走り行く。下關行が將に發車せんとしつゝあるのだ。二人は改札口を入つて車の窓々を見やつた。戰時の事とて車輛を増したので汽關車は歩廊を外れた遠くの方にあつた。蜈蚣の様な車體は少しく彎曲して見える、豫備兵の一隊が幾つもの車を占領して居た。彼等は極めて不揃で、悉く三十歳を超過して居た。中には頭の禿げたのもあつた。軍隊を出てから長い間、教練に遠ざかつたので、彼等の身體には緊張味がなかつた。色の生白いのや、人生に疲れてひよろ〳〵したのや、其れは何れも〳〵世帶じみた顔をして居る。彼等の身邊には其の妻や子供が寄り集まつて泣顔をして居る、車の窓から出る顔も皆涙に濡れて居る。其れは實に何とも云へない凄慘な光景である。現役兵には元氣があり功名心があり、若き愛國の血がある。だが豫備後備になると、前途に何ものもない、あるものは後髪曳かるゝ妻子の戀々たる情である。……心の底で呪ひながら、表面で讃美せねばならぬ。悲痛な微笑！

實際何れの兵卒も微笑して居た。窓から現れる顔といふ顔は悉く微笑して居た。見送人も亦微

笑して居る。勵ます人、勵まさるゝ人、双方共に涙を流しながら微笑だけは續けて居る。

兵隊の中から一郎を見出す事は中々困難であつた。

『居るよ』

敬三は一番終りの車を目蒐けて走つた。いかにも普通乘客の三等席の窓から顔を出して居るのは一郎であつた。

『やあ』

『やあ』

一郎は手を出して浩の手をしつかりと握つた。

『間に合つて可かつた』と一郎は言つた。

『なぜ行くのか、もう少し考へたらどうか』

と浩は言つた。

『何も言はんでくれ』と一郎は眼を浩の眼に据ゑて、『俺を許してくれ』

『許すも許さんもないよ、君と僕との間に最初から何事もないのだから』

『さうだ』と一郎は首肯いて、『妹も許してやつてくれまいか』

『許すよ』と浩は言つた。『節子さんがどんなにならうと、僕の愛に變りがない』

『恐らくは、節子の愛も……』

一郎は言ひ掛けたが默つた。二人の手が結び付いた樣に締め合つて激しく顫へた。

『死にに行くのなら止してくれ』

浩は堪りかねて言つた。

『さうぢやない、僕は親父の傍に居るのが苦しいからだ』と一郎は言つた。さうして微笑した。此の時驛員が見送人を車體から遠のく樣に整理し廻つた。其れは發車の時間が迫つた事を知らせたので、兵士共は急に姿勢を正して微笑した。浩と一郎は手を放した。さうして更に顏を見合つて微笑した。

笛が鳴つた。萬歲の聲が轟いた。一郎の車に隨つて二人は步廊の盡きる處まで步いた。車が段段速くなるに連れて二人も段々小走りになつた。其の辯三人は互に何にも言はなかつた。立止まつた時一郎は大聲に叫んだ。

『あとの事は賴むよ』

『安心せい』

二人は叫んだ。

ぞろ〳〵と力なく見送人は歸る。彼等も顏には最早微笑がなかつた。重さうな瞼は濡れた眼に

垂れて、靑ざめた筋肉は悲しさうに顫へて居る。彼等は停車場を出てきら〳〵冬の日が輝く廣場を見た時漸く手巾を顏から離した。見送りの旗は力なく寒い風に動いて居る。

『淺見は何故行つたのだらう』

敬三は再び考へた。さうして恁う言つた。

『二人に三人だね』

『何が』と浩が訊いた。

『二人の親が自分の子と娘と他人の君との三人をめちや〳〵にしてしまつたんだね』

『いや、まだ〳〵他にも負傷者があるよ』と浩は言つた。『湖の面に石を投げると、平和が破れて幾百となき波が起る。石は一つ、波は百千。一人の行動が何十人に影響するか數へきれない』

『さうだ』

『俺は考へなきやならない』

『何を？』

浩は答へなかつた。

敬三は此の時一隊の貴婦人連を見た。其れは見送りからの歸りしなで、其れ〴〵馬車や車に乘る處であつた。

『おやッ』

貴婦人の中から刻み足で敬三の方へ歩いて來たのは富塚惣兵衛の肥大なる夫人であつた。

『しばらくでしたね』

『しばらくでした』

敬三は少からず狼狽しながら挨拶した。彼は富塚夫人とは一二度會つた事があるだけで、先方から言葉を掛けられる程の間柄ではない。と彼は石段の上に有名な眞琴孃が立つて居るのに氣が付いた。彼女は母と敬三の方を眺めながら同行の貴婦人と何か語つて居た。

『些と御話しにいらつしやいまし』と富塚夫人は言つた。

『はい、難有う』

『御伴の方は誰方』

『えつ？』

敬三は何の事だか解らないので訊き返した。夫人の聲は急に小さくなつた。

『貴方の御伴の方は？』

『小南君です』

『あゝ、さう〳〵、小南子爵の……さうでしたね、どうして奥様と御一緒ぢやないんでせう』

『小南君は獨身ですよ奥様』と敬三は笑つた。

『さうでしたね、あゝ、さうでしたね、何れ又』

肥大な黑紋付と金茶の厚板の帶が、鈍い波動を起して大象の如くに群集に紛れ去る。

『何を言つてゐんだ』

敬三は馬鹿々々しさに舌打をして向ふに立つて居た浩に追付いた。

號外屋が何か怒鳴りながら走つて行く。一人の男は其れを買つて一と目見て地に捨てた。其れは田舍代議士の補缺選擧の記事であつた。

酒！

我が軍は遼陽を占領した、殘るは奉天、哈爾賓、さうして旅順である。戰勝々々の祝ひ酒に麻痺して心驕れる國民は奉天と旅順の陷落をもどかしく待ち焦れた。

だが實際我が國の陸軍情態を知つて居る極めて少數の人達には不安の雲が次第に濃厚になつて來たのである。第八師團を除く他は日本全師團を空虛にして滿洲の野へ送つたのである、而も第八師團でさへも其の半分を新に送らねばならなくなつた。敵は貝加爾鐵道が通じてから毎日々々驚くべき兵と糧彈を輸送して居る、其の實數から言ふと彼は最早三十萬の兵力で日本は二十萬餘りに過ぎ

ない。

若し決勝が延び〳〵になると、春暖と共に湖水の氷が解ける、輸送が益〻便利になる、其の上に九月十三日にフインランドを出たバルチック艦隊は二十萬噸の艦艦舳艫相啣んで十二月二十日には喜望峰を廻りマダガスカル島に近づいて來た。無論彼の目的は旅順を救ふにあるのだ、我が海軍が果して前回旅順沖の海戰の如く此の勁敵を擊攘し得るだらうか。さうして陸軍に於て奉天攻擊が目下の兵力で充分であらうか。

決勝が近づくに從つて我と我が弱點を顧みざるを得ない、此の不安な年が暮れて明治三十八年一月一日、旅順の守將ステッセルが我が乃木軍に降を乞うた。

日本全國民はどれだけ狂喜したかは記し得べくもない。小柴敬三は此の日ほど酒を多く飲んだ事はなく又此の日ほど忙がしかつた事もなかつた、其れは二日の朝、號外が未だ刷り終らない時からであつた。

彼は元老を歷訪して旅順開城に就いての感想を聞かねばならなかつた。其の日の朝は元日と同じく輝かしい許りの晴天であつた。梅園伯は朝から上機嫌であつた、彼は寢床の中で開城の通知を受取つた、さうして其と同時に床を蹴つて起きた、彼は直ぐ身を潔めて神前に額づいた。朝飯が濟まない中に來客が續々と押寄せた。

『御目出たう』

新年の祝詞と開城の祝詞と重なつた意味の祝詞が繰返された。彼は何人にも面會した、夫人は應接室へ行つて下さいと勸めたが彼は肯かない、彼は凡ての客に盃を羞めた、御前が御機嫌だといふので其に乘じて揮毫を乞ふものが續出した。

『まあ飲め、揮毫は預かりだ』

恁う言つて伯爵は永井鷗眠を呼びにやつた、伯爵の揮毫は大抵鷗眠の代筆である。十時頃に伯爵は漸くフロックコートに着換へた、夫人は此の機に乘じて一先づ盃盤を收めようとしたが無駄であつた、伯爵は應接室へ行かずに再び元の席へ洋服の儘坐り込んでしまつた。御勝手では夫人が黑紋付を着たまゝで女中共を差圖して居た、旅順が陷落しなければ安心が出來ないと聞いて居た彼女、而も賢夫人と謳はれて居る靜肅な彼女も此の日ばかりは心も空に浮き立つて居た。彼女は開戰以來伯爵の擧動に深い注意を拂つて居た、外泊の時はいざ知らず、家庭に眠る時の伯爵の狀態は實に慘めな程痛々しきものであつた、夜は二時頃に床に就く、三十分ばかり鼾が聞えるかと思ふと突然ばつちり眼を開いて魘えた樣に凝と天井を見詰める、深い溜息を吐いて又眠る、又眼を覺ます、朝の五時には床を出る。斷續的の不健康な眠は僅かに三時間。其で身體が續くものではない。

其は夫人に取つて珍らしい事ではなかつた、日清戰爭の時——戰爭の前後に於ても伯爵は此の通

り睡眠中に突然眼を覺ました、市中は戰勝々々の叫びに醉うてる時、苦しい夢を見て居るのは毎も伯爵である。

『旅順が陷落した、今夜から久し振で安眠なさるだらう』

夫人は怎う思つて微笑した。さうして絕えず玄關口に響く馬車や車の音に注意した。

『奥様！　ブランデーと仰有います』

色の白い小間使が怎う夫人に言つた。

『不可ません、葡萄酒になさい』と夫人は言つた、夫人は嚴しくブランデーを禁じてから家庭には一切葡萄酒を用ふる事にした。

『さう申し上げましたけれども、葡萄酒は酒でない、酒の樣な酒を持つて來い、丁度……』

怎う言つて小間使は顏を赤めて笑ひ出した。

『其れで？』と夫人が次の言葉を促す、小間使は眞赤になつて俯向いてしまつた。

『何と仰有つたの？』

夫人の聲は笑を帶びて居た、彼女は大凡の伯爵の言葉を察したのである。

『女の女らしからざるは女にして女にあらず、酒の酒らしからざるは酒にして酒にあらず、お清、おぬしは女か男かと怎う仰有います』

『お前は何と御答へ申したえ』

『默つて居りました、さう致しますと女でないといふなら此處で裸になれ、どうだ、いやか、いやなら女だと言へ、扨ておぬしが愈々女だと解つて見れば、酒も愈々本物の酒でなければならん筈だ、奥様に訊いて來い』

『さう？　さう？』と夫人はにこやかに言つた。『お前は嘸御困りだつたらう、其ではもう一度葡萄酒を持つて行つて、御祝ひですから三鞭酒に致しましたとさう御言ひ』

『はい』

お清が出て行つた後で夫人は獨り我が奇智の結果を想ひやつて笑つて居た。

伯爵はブランデーを待つて居ると其處に富塚惣兵衛がやつて來た。

『御目出たうございます、重ね〳〵御目出度い事で』

惣兵衛は袴をガサ〳〵と音させてぱつと裾を開き其の痔せた身體を袴の中に埋める樣に坐つた、さうして右手を擧げて大きな鼻を撫でようとしたが、不圖氣が付いて手を下に下した。

『やあ御目出たう、景氣はどうか』と伯爵が言つた。

『新年早々大損です』

『なぜだ』

『開城が三ヶ日の中でなかつたら、ざつと二三百萬圓儲かるのでした』

『どうして？』

『取引所が休みなんで』

『はッ〳〵〳〵、抜目のない男だ、ぢやステッセルへ電報を打つて取引所開始まで開城を待つて貰へ』

『いや御前、富塚が何千萬圓の損をしても國家の利益には代へられません』

惣兵衛は恁う言つて伯爵の顔を見詰めた。

『さうぢや』

梅園伯爵は恐しく眞面目な顔をして言つた、惣兵衛は高く手を擧げて鼻を撫でた。どんな冗談の中にも伯爵は必ず相手の人物を見抜く辭がある、其を能く知つて居る惣兵衛には其だけの策戰があつた。

『ところで御前』と彼はもう一度頭を下げた。

『目出たい折に今一つ私の御願を御聽き屆け下さるでせうか』

『どんな？』

『はッ』

惣兵衛は伯爵を見上げた、さうして默つた、彼は一と月前に伯爵の御聲掛りで明治新聞の高峰素之に五十萬圓の金を出してやつた、其の埋め合せが未だ濟まされない。そこで彼は伯爵の顔を見詰めた、なぜ見詰めるかといふに彼には一つの外交秘術がある。彼は自分より偉大な人物に接する時には必ず其の人の弱點を頭に描くのである、これは己が畏怖の念を減ずる妙藥であつた。彼は今伯爵の右の眼の下にある一點の黑子を見詰めた、さうして四五日前築地の長谷川で大勢の藝者を集めて、伯爵が遊んで居た光景を懷ひ出した。

『御前はどうしてそんなに浮氣でいらつしやるんでせう』と一人の藝者が言つた。

『さあどうしてだらう』と伯爵が言ふ。

『私知つてるわ』と他の一人が言ふ。

『言つて見い』

『御顏の黑子は、浮氣黑子よ』

『あら御黑子が浮氣をさせるの？』

『何だ？　御黑子？　御ほくろつて何んだ、母親かお黑子か、母親の御ほくろか、はッ〳〵〳〵』

羅を着けた母親の御黑子が御黑くて可笑しいか、これは面白い、皆言つて見い』と伯爵は言つた。

『おはぐろを着けた御母親の御黑子は……』と一同が早口に言つたが誰も完全に言へなかつた。

『では、私の黒子を抜いてくれ、私の浮氣が止むかも知らん』
『蠻の油を付けたら抜けるわ』
『釘抜はどう？』
いろ／＼な聲が出た。
『自分で誰よりも別嬪だと信じて居る女が嘗めると黒子が抜ける』と伯爵が言つた。
『けぢ／＼ぢやあるまいし』と一人が言つた。
『さあ／＼、誰が一番別嬪だと自惚れてるか』と伯爵が言つた。
『嘗めたいけれども勿體ないんですもの』
と一番若い子が言つた。
『親の敵だと思つて嘗めろ』
若い子は脱兎の如く走り寄つた、さうして黒子に唇を當てた、あつといふ暇もない、彼女は障子を外して逃げ去つた、桃の花片の樣な唇の痕、紅二點が伯爵の目の下に殘つた。餘りの失禮に座中は白け渡つた。
『えらい奴ぢや』と伯爵は苦笑した。
惣兵衛は今其れを想ひ出すと共に伯爵に對する臆病な氣持を大半逐ひやつてしまつた。

『娘の嫁入に就いて是非一つ……』
『うむ、私で出來る事か』
『はい、御前の御言葉添がありますれば多分大丈夫だらうと思ひますので』
『どんな事だ』
『小南子爵の御長男、浩樣と仰有る方に……と家内が申します』
『小南の？　うむ、哲學者だ……なるほど』
『小南子爵は春木侯爵に迫害されて非常に憤慨して居られます』
『さうか』
伯爵は下唇を嚙んで考へ込んだが軈てはつきりと言つた。
『富塚君、私は骨を折つて見よう』
お清が例の三鞭酒を持つて來た。
『何だ、葡萄酒か』と伯爵が言つた。
『三鞭酒でございます』とお清が言つた。
『泡の立たない三鞭酒だね』
伯爵は其れだけ言つて滿足さうに嚥み乾した。敬三が入つて來たのは此の時である。

『やあ來たね』と伯爵は聲を掛けた。『種取か』
『御話を伺ひに參りました』
『旅順開城に就いてか』
『さうです』
『市中は？』
『大變な騒ぎです、まるで狂氣です』
『さうかな』
『で伯爵の御考は？……』
『早稻田へ行つたか、彼は饒舌る事が巧い』
『行きました』
『どんな事を言つてたか』
『露西亞皇帝は素車白馬で以て、モスコーで城下の盟を結ぶだらう、まあ恁う言ふ風で』
『はッ〳〵〳〵、さうだらう〳〵彼は好人物だなあ』
伯爵は上機嫌である。
『其で……春木は？』

『行きました』
『何と言つた』
『乃木は能くやつてくれた、だが敵將ステッセルの胸中を察すると實に氣の毒だと』
『其だけか』
『其だけです』
『武弁の感懐には相應しい』
伯爵は鋭く恁う言つて屹と唇を結んだ。
『伯爵の御意見は？』と敬三が促す。
『私には意見がない』
『戰爭はまだ〳〵續くでせうか』
『無論だ、前途遼遠』
『今年中で終るでせうか』
『なか〳〵、後二年三年五年かね』
『そんなに？　伯爵！』
『第一の戰の次に第二の戰、武の次に文がある』

『第一、と仰有るのは』

『世間では私を親露主義者と稱して居る、私は親露主義者だ、だが征露を主張したのも私だ、私は露國と親まんがために露國を征するのだ、愛すればこそ懲らしめるのだ、支那は狡猾で虚僞が多い、これと親む事は薪を抱いて火に投ずる者だ、露國と親んで東洋の覇權を固うするより他に策がない、だが露國は私利私慾に走つて支那を壟斷しようとした、日本が師を起したのは彼を覺醒せしめんがためである、覺醒の要點は何にあるかといふに、第一に日本の實力を認める事だ、第二に傲慢の心を改める事だ、第三に露國の政治を改革して立憲政治にする事だ、私は露國を征討して彼の國の民力を疲らし其の血と肉を枯らさうとは思はない、露國が弱くなれば日本の大損耗だ、唇亡んで齒寒し、凡そ立國の要訣は隣國を併呑するにあるのではない、隣國を獨立せしめて第三國の侵入を防ぐ障壁となすにあるのだ、戰爭に打勝つても敵國を滅ぼしては不可ない、内政に干渉しても其の國の實力を養つてやるのが至當だ、さうすると、日本が露國に對してやるべき事は多々ある、五年の歳月は決して短くない、旅順の開城位で狂喜する樣では駄目だ、斷じて駄目だ、本當の戰はこれからだ、戰つて後に露國を救へと私は叫びたい、提灯行列は不可ないと言ふのではない、提灯の火が一夜で消えるのでは不可ないと言ふのだ、今後五年間……否永久に消えない日の丸の提灯を翳さなければならぬのだ、無論、無論……無論』

伯爵は默つた、彼は今言ひつゝある言葉が餘りに空疎である事に氣が付いたのであつた。此の遠大な理想よりも、現に時々刻々に迫りつゝある我が國の兵力と經濟狀態に處する道を講ぜねばならぬのである。外債は募集し盡くした、此の上に更に募集し得べくもない、兵力は用ひ盡くした、今半年も戰が續けば後備國民兵まで狩り出さねばならぬ。

伯爵の沈默は長く續いた、執事が幾度も盆に載せた名刺を持つて來たが伯爵は見向きもしなかつた。應接室の方には絶えず人の足音がした、號外屋の鈴の音が折り〳〵竊む樣に聞える。

『上原さんが御見えになりました』

執事が恁う言つた。

『どの上原だ』

『雅子さんです』

『俺が知るかッ』

執事は驚いた顏をして去つた、伯爵は頻りに酒を飲んだ、彼は口に酒を入れはするものゝ酒の味を知らなかつた、丁度何か思案に耽りながら煙草を喫かして居る人の如くであつた。恁うなつては一向面白くもないので室を出た。今朝からの酒で彼も少しく醉うて居た、新聞社へ行くと編輯局は戰場の如く活氣づいて居た。旅順開城の詳報を早く知りたいために毎も怠け勝の者共まで詰め掛

けて居る、編輯室は絶對に酒を禁じて居るので彼等は土瓶に酒を入れてがぶ〳〵飲んで居た。敬三は自分の卓子で大急ぎで元老の感懐を書いた。其は最も彼の得意とする處で、彼は他人の談話を勝手に製造する事に妙を得て居た、どんな斷片でも彼の筆に成ると其の人の風采や性格まで躍動すると稱せられた。

原稿を編輯長の卓上に投げ出すと、二三の論説記者達が直ぐに頭を寄せて讀んだ。其の中に例の武藤白山も居た。

毎日の事ではあるが敬三は原稿を書き終るまでは一種の創作的な感興に驅られて一氣呵成にやるのだが、扨て原稿を編輯長の卓上に提出する時には堪へ難き屈辱を感ずるのであつた、自分の書いたものが他人の手で檢閲されたり補修されたり削除されたりするといふ事は下駄屋の職人も同じ事だと折々思ふのであつた。此の日は二三人の先輩が檢閲した。

『素的々々頗る振つてるね』と一人が言ふ。

『第二の號外へ掲すが可い』

賞讃の聲が起つた。

『非常に面白い、君はなか〳〵名文家だね』

白山は恁う敬三を振向いて言つた。

『馬鹿にするない』と敬三は叫んだ。一同は驚いて向き直つた、敬三は眼がぐら〳〵する程腹が立つた。

『僕はどうして君等に批評されなきやならないんだ、君等は僕より一年や三年乃至は五六年も先に入社したから僕を後輩扱ひにするんだ、だが僕は君等に僕の文章を見て貰ふ程下等な人間ぢやない、僕は下駄屋の職人ぢやないんだ、元老は何だ、春木は何だ、梅園は何だ、あんな奴の談話を取次ぐのは恥辱だ、馬鹿野郎！　世界が一變しつゝあるのを知らないか、惑星の鍔が外れ掛けてるんだ、地球が二十三度半傾いてると言ふが、二十五度になるかも知らん、或は二十度に、一度に五度に……一度に……馬鹿野郎』

敬三は鐵砲玉の如く編輯室を出た、背後から潮の如き喝采が起つた。

何といふ事なしに癪に障る、だが又何といふ事なしに胸が透いた、丁度一ぱいに蔽ひかぶさつた雲の根が切れて風にふはりふはりと飛んでる樣な氣持である。其れに拘らず彼は口の中で同じ事を繰返して居た。

『馬鹿野郎！　元老は何でえ、新聞記者の職人めが……』

彼は自轉車の鏈を掛け直さうとしたが中々車に嵌まらない、同じ事を繰返して居ると、火鉢に股火をして居た入口の爺さんが手助けをしてくれた。

『小柴さん、御機嫌ですね』と爺さんは言つた、爺さんは正月を知らぬもの、如く汚い厚い錦入の筒袖の上に東洋新聞と赤字で染めた印袢纏を着、三尺帶の横に手拭をぶらさげて居る、此の手拭は時として自轉車を拭き時として爺さんの顏を拭くものである。爺さんの名は何であるか知らんが、姓は藤堂であるので社中で評判になつた。

『藤堂さん、錢を貸してくれないか』と敬三が言つた。

『えつ？』と藤堂小使守は驚いて目を睜つた。

『一圓貸してくれ』

『冗談でせう』と小使は齒の拔けた口を開いて笑つた。

『本當だ、僕は家へ歸るまでに二ケ所で飲まなきや行けないんだ、今日纍口を忘れて來た』

『可うがす』

小使守は内懷に手を入れて幾つも〳〵紙に包んだものを出した、さうして一圓の紙幣を敬三に渡した。

『落さない樣になさいよ、どうも醉つていらつしやるから仕樣がない』

敬三は自轉車に乘つた、彼は眞直に家へ歸らうと思つたが直ぐ氣が變つて憲政本黨の本部に立寄る事にした。本部では議會休會中とは言ひながら田舍代議士が溢る、許り室内に集まつて祝杯を擧

けて居た。

『可し〳〵』と敬三は首肯いた、彼は一と通り代議士の顏を見廻した。

『今日は一つ誰に奢らしてやらう』

元來敬三に一つの内職がある、其れは政治の政の字も知らずに村と村との意地張とか、政黨の體面とか、但しは代議士の肩書を系圖の中に留めたいとか、金があるために祭り上げられたとかいふ目出度い代物で、彼等は議會召集と共に上京するのが何よりの樂みである、此の樂みの中には名士と交際する事を樂みとする方は上等の部類で、多くは東京の藝者を買ふとか賭博をする相場をするとかにあるのである。彼等は内閣彈劾案や增稅案や其の他反對黨と接戰する當日だけは止を得ず出席するが、其の他は大抵待合の一室に寢轉んで居るのである。

だから愈〻閉院式が終ると彼等は鄕里への土產がなければならぬ、第一に困るのは開會中の報告である、此等の田舍代議士は其の報告演說や報告書の原稿を新聞記者に書いて貰ふのが常例で、敬三は毎も議會毎に五六百圓の收入があつた。

『やあ君、何處かへ行かうか』

敬三の肩を叩く者がある、振向くと其れは北陸地方の代議士で岡本久兵衞といふのであつた。彼は非常な財產家なので有名でもあるが、非常に頭が惡いのでも有名である、毎も彼は折鞄の中に議

案をはち切れさうに入れて抱へて歩いてるが一度も其れを披いて見た事がない。

『うむ、行かう』と敬三は言つた。

『行かずにや居られない、旅順開城だからな』と岡本代議士が言つた。

二人は車を命じて赤坂へ走らした。

『さあ〳〵藝者だ〳〵』

久兵衛君は議案入の鞄を床の間に投げ出して大きな聲で怒鳴つた。

『御正月ですから皆御約束がありますので』と女中が言つた。

『約束の無い奴を二十人ばかり』と代議士が言つた。實際正月の二日ではあり、旅順開城の祝で藝者は殆ど賣切れてしまつた、二人が女中を相手に飲んでる中に日が暮れた。八方に電話を掛けて友人を召集した、其等が集まつた頃にはぞろ〳〵藝者も現れた。

客は田舍代議士、有志家の面々である、彼等は鄕里の野良に於けるが如く胴魔聲で唄つた、久兵衛は長襦袢一つになつて頬冠をして踊つた、若し盆踊が代議士の資格に加へらるゝものなら、久兵衛君は立派な代議士だと言ひ得る。

どれだけ飲んだか、どれだけの時間を經たか敬三には解らなかつた、彼は喉の乾きに眼を覺ますと自分の傍に一人の女が寢て居るのに氣が付いた、女の隣に又一人の女、背後には二人の女！

『これはどうしたんだらう』

彼は枕元の水差の水を飲んでから凝と四邊を見廻した。自分の傍に寢て居る藝者は敬三と特殊の關係ある女である。敬三は到る處に恁ういふ藝者を二三人は持つて居た、其の中に名前を忘れて顔だけ知つてるのもあり、又名前も顔も忘れたのもある。

どれも〳〵醉うて居る、何とも言へぬ臭氣が室内に籠つて息が詰りさう、酒の香と婦人特有の生理的な香と、頭の油と白粉の香と、其れは蒸す樣な不純な混濁した香である。

『窓を開けたら寒からうな』

彼は恁う思ひ惱んで居ると隣の女がむにや〳〵と口の中で何やら唸り出した、同時に蒲團を片足で跳ね上げて、ぱつと燃え立つ裏地の上に長襦袢を脫けた太い〳〵練馬大根の樣な脚が膝の上までにゆつと露れた、其の膝には黑と茶と混つた樣な皺が疊んで居る。

『恐しい太い脚だ』と敬三は思つた。同時に自分の側に居た女は短く圓い腕を伸ばして敬三の胸をどしんと突いた。

『おい〳〵』と敬三は驚いて搖り起した。

女は左手で右の腕をぼり〳〵と搔いた、さうして何やら唸りながら今度は頬の處を搔く、髮はがつくりと枕の外に落ちて、額の色と生際の繰込んだ兩角の皮膚の色が差つて居るのが解る、先づ鼻

筋の白粉は無事であるが眼の上下は斑に剝げてどす黑い地色が出浚して居る。彼女は口を開いて眠つて居るために鼻が仰向いて見える、其の鼻穴は呼吸の度に大きくなつたり小さくなつたりする。

敬三の胸に憐憫に似た淋しさがむら〳〵と湧いた。彼は女の眼を覺ましまいために背後を向けて再び眠らうとした、がなか〳〵眠れない。丁度彼の眼の前に寢て居るのは二人組の藝者である、一人は痩せて青ざめて、眉墨が眉の外まで滲んで居た。彼女は苦しさうに呼吸するたびに喉がブリキの樣に鳴つた。其の胸に顏を埋める樣にして眠つて居る若い藝者の背後、其れは恐しい縮れ毛で首筋に渦卷いて居るが、成熟した襟元から露な背が人間とは思へない——例へば魚の樣な生生しさと糜爛した淫蕩を聯想せしめる。脫ぎ捨ての着物は、枕元に裏返つたまゝ横たはり、何か知らん赤い布の樣なものが夜具の裾にあつて其の上に帶がのたくつて居たりする。

狼藉と言はうか、繚亂と言はうか、此の不統一な室内の光景の中に更に目立つて見えるのは例の蒲團を挾んだ太い脚で、而も足袋を穿いたまゝである。足袋の白さが餘りに淋しい。

不圖氣が付くと丁度枕の下の處に蟇口が一つ落ちてある。眠られぬまゝに敬三は其れを手に取つた、さうして開いて見た、其處には如何はしき木版畫が一枚と、一圓紙幣一枚と十錢銀貨が二枚、合計一圓二十錢の財産である。敬三は慌てゝ其れを閉めた。彼は堪らなく苦しくなつた。

『俺はどうしてこんな處へ來たんだらう、俺は一體何といふ劣等な人間だ、俺は田舍代議士を取卷

いて御馳走になつて耻とも思はなかつた、こんな醜惡な室に眠る事を耻とも思はなかつた、金のために肉を賣る此等氣の毒な女性に對して同情も起さずに○○○○○○○○○○○○○、其の癖俺は正義を唱へる。他人を攻擊する、俺の今までの生活は全然泥を食つて生きてる鰌の樣なものだ、そこで俺はどうしたら可いんだらう』

彼は窃と起きた、さうして外套を肩に引掛けたまゝ室を出た。廊下は暗い。

彼は車に乘つた、最早明方に近からう。町々の屋根に霜白く殘月に照られて居た。車が止まると等しく玄關の中から母の聲がした。

『敬三かえ！』

『さうです御母さん』

玄關の戸の間に寢卷の上に羽織を着た母の姿が現れた。

『まだ眠らないんですか御母さん』と敬三は言つた。

『歸つたら御飯だらうと思つてね御湯を沸かして居ましたよ』

『濟みません、御母さん』と敬三は逃げる樣にして書齋へ入つた。さうしてもう一度言つた。

『濟みません』

蒲團の裾に行火が入れてあつた。敬三は直ぐもぐり込んだ。

『ねえ敬三や』

母は次室から聲を掛ける。

『はい』

『先刻ね、小南さんの御嬢さんが來てね』

『環さんですか』

『あゝ』

『どうして？』

『御兄さんが結婚をするから其れに就いて……』

『小南が結婚？』

『あゝ、環さんの考へではね、澄江さんと結婚させたいといふんだけれども、御兄さんは承知なさらない、だからお前から勸めて貰ひたいつてね』

『僕もさう思つてるんです』

『併しね、今度他所から内談があつたらしいんですよ』

『どんな？』

『環さんの話ではね、富塚さんの娘さん、恐しく肥つてるつてね、その方を貰つたらどうかて言つて來た人があるので、御父様は反對だけれども御母様が賛成らしいつてね』

『富塚のデブ公か、はッ〳〵〳〵あれが小南の細君に……はッはッ〳〵冗談にも程があらあ』

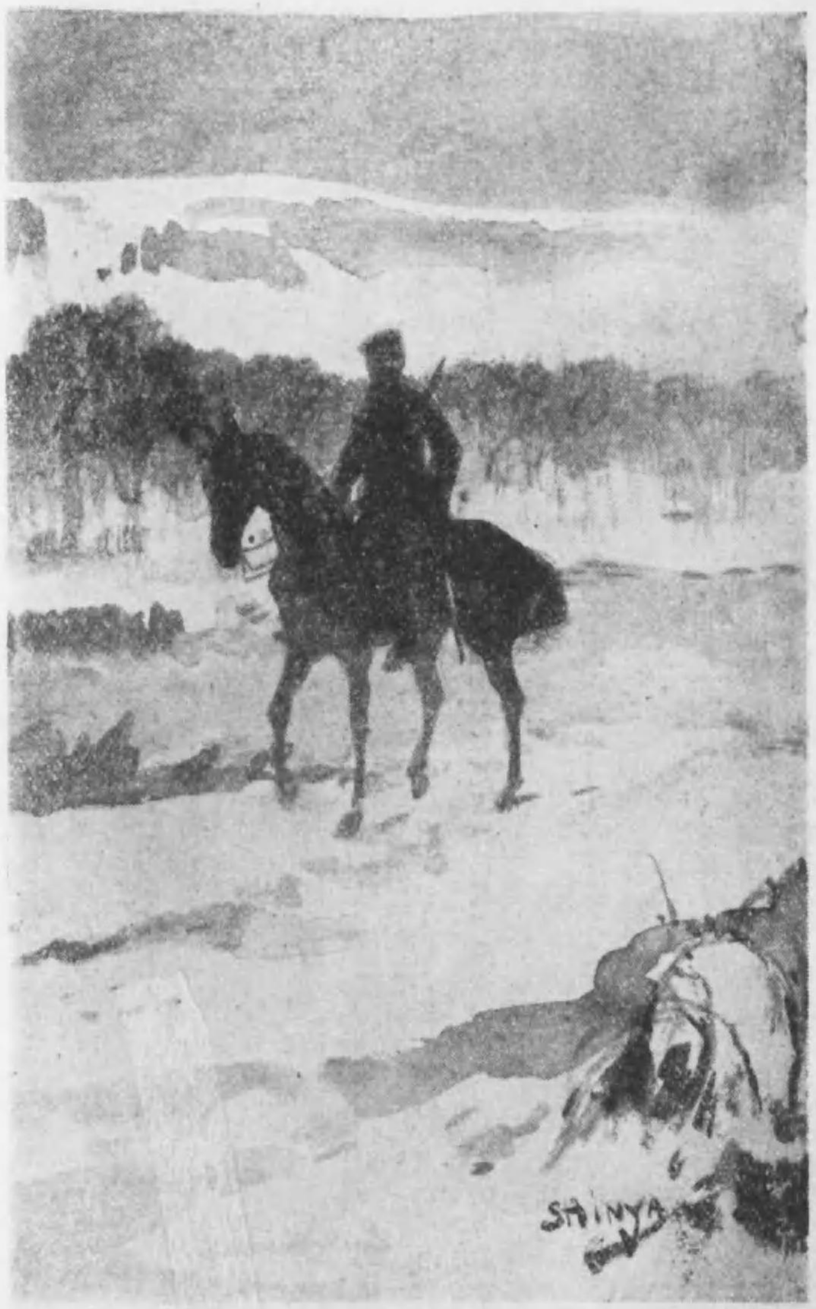
母は何も言はなかつた。敬三は足を踏み伸ばして胸一ぱいに呼吸した。

日本兵

明治三十八年三月三日の拂曉、針の尖の樣に鋭く細かい雪が滿洲の野を眞白に蔽うた。左は沙河を隔てゝ姚千戸屯、唐家臺、上蘇麻堡子の高地、其の背後に揚家屯、臺溝、胡家勾の山々が起伏して居る。山は嶺だけ纔かに白く見えるが麓は未だ暗い。右は凡て日本軍占領の地帶、其れすら一點の燈火もなく加ふるに降りしきる粉雪のために靄の幕に包まれた此の全景の中には何ものも見る事が出來ない。

氷點下二十五度！　寒さが野となく山となく河となく凡てを沈默さして大地は深い眠りに凍てついて居る。

沙河の邊に枯木がすぼん〳〵と頭を出して居る。河は全く氷結して陸と水との差別がない。只河らしく思はれるのは二三尺の高さに雪を戴いて居る堤防があるからである。此の淋しい雪の路にガチ〳〵〳〵といふ石で石を叩く樣な音が聞える。音が段々緩くなると其處に二人の騎兵の影が現


SHINYA

れた。

『寒いなあおい』と一人が言ふ。

『あゝ』

其れだけで二人は再び沈默した。馬の鼻から出る息は釜の湯氣の樣に白く張つた。二人の騎兵は今佟家坟の守備地から師團本部へ歸る處である。二人は河を左に取つて長い間沈默して馬にダクを呉れた。先なるは騎兵中尉淺見一郎である。次は傳令騎の吉田といふ兵である。

『もう夜が明けるかね』と一郎が言つた。

『未だであります』と傳騎が言つた。

『今日は何日だつけ』

『三月の三日であります』

『おう、節句だな』

『はい』

『降りて少し歩かう』

『はい』

此の寒さに馬上に長くある事は極めて堪へ難い苦痛である。兩足は全然感覺が無くなつて凍傷を起す。二人は馬から降りた。降りる時に一郎はがちやゝと劍を靴に當てゝ少し蹌踉いた。大地が凍つて滑つたのである。が今一つは身體の自由が利かない爲めである。襯衣三枚に袴下三枚、其の上に毛皮の短衣、上着、外套、これだけの重さでも大したものである。其の上に頭巾を被り、騎兵の事として目ばかり出る樣に襟を立てゝ羅紗の布で口と鼻とを隱す。其れでも呼吸は鼻先で凍り髯を針の樣に硬くする。

節句だ、と偶然に言つた自分の言葉が突然一郎の胸を暗くした。彼は幼い時に妹節子の室に雛を飾つてやつた事を憶ひ出した。彼の眼の前に現れたのは長い髪をお下髪にして背中へ垂れ其の中程に大きな白いリボンを着けた節子の姿であつた。雪洞の灯、御殿の屋根、内裏雛の對、桃の花、いろ〳〵な調度、彩色した大きな御菓子の鯛、其處で節子は唄ふ。

『雀々、雀は何と言て鳴くか、天子樣にチウ〳〵、鴉々、鴉は何と言て鳴くか、御父樣にカウ〳〵〳〵』

節子は雀をチヾメと言ひ、天子樣を天子チヤマと唄つた。圓い顏と大きな眼、可愛い口元！　其れが今明晰と現れた。

『副官殿』と傳騎が言つた。一郎は答へなかつた。彼は馬の韁を手袋した手に握りながら自分が何處を歩いてるかをも知らぬ樣に歩いた。幼き妹は父のために一身を犧牲にした。いかにも彼女は鴉

の唄の如くである。俺は今天子様に一身を捧げようとして居る。俺は雀の如くならうとして居る。だが、あの時、雛棚の前で桃の花に照り映ゆる灯の下で唄つた彼女の片言交りの唄が事實其の如く二人を支配する様になつたのはどういふわけだらう。

『俺は男だ。だが節子は女だ。俺は今夜にも死ぬ。死なずにや置かぬ。だが節子は死ぬにも死ねない。これから三年五年十年二十年の後までも苦しまねばならぬのだ。俺の苦しみよりも節子の苦しみがどんなに辛からう』

『副官殿』と吉田傳騎が再び言つた。『そろ〳〵明けかけて來ました』

『さうだな』

一郎は眼を擧げた。山々の襞は暗く凸起部が仄かに白い。東の方の山の峽から曉の色が覗いた。其處には敵の砲臺らしい黑い影がぽつちり見える。中腹の方から靄が頻りに湧いて居る。雪はもう晴れた。

『騎らうか』

『はい』

二人は馬に騎つた。

『あゝ何時俺は死ぬんだらう』

一郎は自分の死に就いて考へた。彼は今まで幾千幾萬となく見た死骸を憶ひ出して死にたくないと思つた。彼は支那の百姓共が露國將校の死骸を丸裸にして其の所有物を盜んで居たのを見た事がある。俺もあゝなるんだらう。非常な侮辱を感じて彼は戰慄した。だが俺は死なねばならぬ。俺の苦痛は只死に依つて救はれるだけだ。

白い河沿の野路が少し宛明るくなつた。突然砲聲が一度に轟いた。其れは敵か味方か解らない。向ふの山の中腹の靄の中にぱつと光が出た。次いで其の次も、又其の次も、豆を煎る如き機關銃の音も聞えた。恐しい音を立てゝ虛空に一彈が炸裂した。

『やつてる〳〵』と吉田が言つた。

『急がう』

二人は馬に鞭を入れた。

近衛師團司令部は馬耳山にあつた。其處は今煮えくり返る様に多忙を極めて居た。司令部の中には誰も居なかつた。荒壁造りの家の中は明け放しになつて、縱横に板片や藁や毀れた瓶や倒れた障子などが亂れて居た。棚となく壁となく、處々に釘に刺した蠟燭が風に搖めいて燃えて居た。どつどつ〳〵と音立てゝ歩兵が通る。其の頭を銃劍だけが明けなんとする天に見える。其れより下は只黑い波が動いてる様、百千の怪物が流れを切つて泳ぎ行く様、彼等は砲聲と銃聲が聞えれば聞える

程、沈默し、さうして足を速めた。其の深く包んだ外套の下に溢るゝ如き愛國の血が動いて居るのだ。家を思ふものもあらう。母を思ふものもあらう、小さき弟や妹を思ふものもあらう、さうして人に秘めた戀人を思ふものもあらう。彼等が此の大きな義務を敢行するに當つて其の千萬無量の感懷は到底筆に盡くし得べくもない。

歩兵の黒波が過ぎると、非常な勢を以て砲兵の一隊が走つた。馬の鼻息が濛々と立ち昇つた。蹄の音、車輪の音、さうして砲身は高く曉の天に突出して居る。

『分捕砲隊だ』と歩兵等が喝采した。

『華族砲隊！』

『頼みますぞ、しつかり』

『引受けた』と馬上の士官が兩手を擧げて言つた。

『難有い』と一郎は思つた。軍隊語で言へば獨立砲兵隊！　其れを誰が號けたか分捕砲隊と呼んだ。各地の戰場で分捕した大砲を以て大隊を編成し、土方少佐が隊長となり、其の部下幹部は西鄕、野津の兩大尉、立見中尉、米田少尉等、華族の子弟が多かつたので、又の名を華族砲隊と名付け、もう一つハイカラ砲隊とも言つた。其れは土方少佐は歐洲新歸來の青年將校で、其の操縱する速射砲は今まで日本にない最新式のものであつたからである。

華族といへば長袖紈袴もの、役に立たないものとばかり見做されて來た事を毎も殘念に思つて居た一郎は有りたけの聲を絞つて叫んだ。

『成功を祈る！』

其處へ淺田師團長が幕僚と共にどや〳〵と入つて來た。

『では行つて參ります』と軍醫部長は入口で師團長に言つた。

『おう、今日は多からうぜ』

『はい、承知しました』

參謀長の重見大佐は中へ入るなり直ぐ叫んだ。

『飯にしよう、今の中にやらんと時間がなくなる』

此日淺田師團長は全軍を集めて嚴令を發した。

『一旦占領したる地點は如何なる情況の下に立つも全滅するまで守らねばならん』

元來露軍の總帥黑鳩公の豫想は旅順を陷れた勢を以て長驅して來た乃木軍は彼の左翼から攻めて來るだらうといふのであつた。其のために彼は新來のグリッペンベルグ將軍をして乃木軍に當らしめた處が日本の策戰は全くこれと反對に、乃木軍は敵の最右翼を大迂回して奉天の背後に出たのである。其れを知つた黑鳩公は慌てゝ左翼から七十二大隊を割き其れでも安心が出來ずに更に一軍